死神達の恋歌　～月の導き～

yatenyue

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神達の恋歌　～月の導き～

【Ｎコード】
Ｎ１８４９Ｚ

【作者名】
ｙａｔｅｎｙｕｅ

【あらすじ】
精霊術師のうち炎術師であった彼女・雛桜美月は、中学一年生１３歳の春、５月に死んだ。
こちらは、尸魂界（ソールソサイティー）サイドです。
太陽の方が現世サイド。
で彼女の双子妹・雛桜卯月です。
力は最強、ですが精神的に弱め。

といっても普通よりは強いです

過去の世界すべての前世の記憶を持ちます。

冬獅郎×ヒロインです。（私自身は、彼女がいなければ日夏派です）

月、太陽　共通プロローグ（前書き）

月、太陽両方共通です

月、太陽　共通プロローグ

私は　　私の姉の美月は

あの日　死んだ

《零番隊隊長、兼元十番隊第三席副官補佐》

雛桜美月

Ｍｉｔｓｕｋｉ＝Ｈｉｎａｚａｋｕｒａ

最も辛き運命（サダメ）を持つ者

「日番谷隊長には、桃ちゃんがいるし」

勘違い

すれ違い

「大好きっっ」

「消えて」

「・・・仕方ないよ。

冬獅郎にとって、桃ちゃんは、姉か妹みたいなんだと思うから。」

垣間見たのは、柔らかな微笑

「絶対、ルキアは助けてあげるから。」

何度　別れてもなんで私は、恋をしてしまうんだろう?

大きな罪を私は、背負っているのに。

「・・卯月が私に・・？」
贖罪（しょくざい）？
「よくも冬獅郎を藍染っ！！」

紅（アカ）と赫（アカ）と朱（アカ）を纏い、
哀（アイ）と愛（アイ）とに満ちる
心優しき少女

「嘘・・・でしょ。卯月が消滅（キエ）するなんて！！」

これが　罰　？

哀しくも愛しい　そして
残酷な　物語が　今紡がれる
それはまるで影のように
美月は満月（ミツキ）のように。

《十番隊隊長》
日番谷冬獅郎
Ｔｏｕｓｈｉｒｏ＝Ｈｉｔｓｕｇａｙａ
氷と雪を操る炎の対。

美月の第一印象は、抜けたヤツ。
第２印象は、失礼なヤツ。
第３印象は、可愛いヤツだった。

気が着けば、美月を目で追っている自分がいた。

松本のヤツにからかわれても、否定できなかった。

「俺は、お前が好きだ。」

あいつは、いつも自分のことより、他人のことばかり考えていた。

良く言えば、優しい。

だが、

悪く言えば、自分を軽く見ていた。

儚い。

強いが、弱い。

だからこそ思ったんだ。

護ってやりたい　と。

今まであいつに会うまで、護りたいヤツは雛森だけだった。

俺にとって姉であり、妹であったから。

でも今は、できるならば美月の笑顔と心

そして欲張りかもしれないが、

雛森のことも護ってやりたい。

そう思うんだ。

「雛森に血ィ流させたら、

俺がお前を殺す。」

血を流す雛森

涙を流す美月

血を流し倒れる俺にすがりつく美月

もっと、強くなりたい

消え行く意識の中

感じたのは、暖かな炎。

《水術師》
雛桜卯月
Ｕｄｕｋｉ＝Ｈｉｎａｚａｋｕｒａ
血の呪いを受け継ぐ者

「私のせいだ。」
白黒（モノクロ）の世界。

姉の残した詩。
いつだって、私の心を救うのは、
あの子　なんだ。

たくさんの友達。
美月が死んで3年経っても、なお気にし続けた。
そして、
知らなかった周りの人々の思い。
嬉しかった。
でも、やっぱり逢いたいから。
ルキアもだけど、私の1番はやっぱり美月　なんだ。

そんな私が1番キライ。

皆傷だらけ。なのに私は無傷
美月は重傷。なのに私は護られ無傷。

「私が・・消滅(キエ)する？」　聞いた時
生きたいという思いと、
やっと死ねるという思い。　2つ　の矛盾した思いが胸に満ちた。

絶望への序章が
始まる。

黒崎　一護
Ｉｃｈｉｇｏ＝Ｋｕｒｏｓａｋｉ
朽木　ルキア
Ｒｕｋｉａ＝Ｋｕｃｈｉｋｉ
井上　織姫
Ｏｒｉｈｉｍｅ＝Ｉｎｏｕｅ
茶渡　泰虎
Ｙａｓｕｔｏｒａ＝Ｓａｄｏ

有沢竜貴
Ｔａｔｓｕｋｉ＝Ａｒｉｓａｗａ
小島　水色
Ｍｉｚｕｉｒｏ＝Ｋｏｊｉｍａ
浅野　啓吾
Ｋｅｉｇｏ＝Ａｓａｎｏ
卯月の
理解者達

そして・・・
《滅却師（クインシー）》
石田　雨竜
Ｕｒｙｕｕ＝Ｉｓｈｉｄａ
救済者

「自分だけが不幸・・？笑わせんな」
そう君は一蹴したね。
今までの僕の価値観を
だから、僕も言わせてもらう。
「罪？そんなの関係ないだろう。
君は逃げているだけだ。」　君を傷つけるかもしれない　でも、
何も関係がなかったからこそ救える

《零番隊三席兼元四番隊三席》
大道寺　皐月
Ｓａｔｓｕｋｉ＝Ｄａｉｄｏｕｊｉ
共有者　優しき毒舌者
悟る者

あの子達は、本当に溜め込むのが好きですわね。
率直な優しさは、人を救うこともありますが、
逆にそれが苦しくなることだってあるんです。
本当に見て居られない、太陽と月

「馬鹿ですわね。そんなことで迷うなんて」

「あなたは、思う通りにやればいいんです。」

「少しは頼りなさい。馬鹿娘ども。」

いつも、キツイ言葉である　・・・不器用な言葉・・・

でもそれは常に真を指している。

全てを認めている者。

《零番隊四席兼元三番隊三席》
神無月　由宇
Ｙｕｕ＝Ｋａｎａｄｕｋｉ
共有者
愛を拒絶する者

愛は、破滅への序曲。

アタシは、そう思わなきゃやっていけなかった。

・・・自分の想いも分からず、愛を知らず、走り続ける者・・・

でもあの子達には、幸せになって欲しいから。

「アタシは、そういうの分かんないけど、あんたは違うでしょ。」

「まぁ、いいけど」

「イヅル、どうしたの？」

アタシは、自分の気持ちが

安堵の理由が

ワカラナイ

零番隊副隊長兼元二番隊副隊長》
如月　海依
Ｋｉｓａｒａｇｉ＝Ｋａｉ
共有者
信じようとする者

何度裏切られても、
人とは汚いものだと知っていても、
信じられようとし、
「どんなことがあったって俺は俺だから。砕蜂、お前だけは俺を信じて下さい。」　大切な人
「信じるに決まっているだろうが」
また、信じようとする。
・・・男とも女ともとれない、不思議な者・・・
俺はさ、人間って弱くて醜いものだって知っている。　でも、それを知った上で、
俺は信じたいんだ。
それに、俺は、この手にあるもの全てを護りたい。

俺が私（＝女、弱さ）を棄てた代わりに。

美月達？

あいつらもだよ。

あいつらは、あの時から罪だ　って気にしている。

そんなの気にしないでいいのにな。

俺や皐月達が言っても聞きゃしない。

あいつらは、力は強い。

最強って言ってもいいくらいにな。（俺もだけど↑自慢）

でも、心の一部分が酷く弱い。

失うことを恐れている。

だから俺はあいつらを支える。

ただそれだけだ。

そして

「私は、彼のために強くなるの。」

《零番隊七席兼元十二番隊三席》

神代　魅

Ｍｉｉｒｕ＝Ｋａｎｅｓｉｒｏ

改造された身体の持ち主

「たとえ私を思ってくれなくても
彼が幸せならそれでいいの」

「俺は、あいつのために強くなったんだ。」
《零番隊六席兼元十一番隊四席》
須王　修宇
Ｓｙｕｕｕ＝Ｓｕｏｕ
強さを求める者

「俺が本当に思っているのは
誰なんだ？」

すれ違う2人

「僕は、あなたに会いたくて、死神になったんです。」

《零番隊八席》
那智　葵
Ａｏｉ＝Ｎａｃｈｉ
美月を尊敬する者
そして、血縁者

「僕に何ができるか

わかりませんけど
僕は僕にできることをやるだけです」

「何もしないって、性に合わないし」
《六番隊三席》
佐野　明良
Ａｋｉｒａ＝Ｓａｎｏ
美月と同じ血を持つ者
そして　崇拝者

「あなたはあなたにできることを
すればいいの。俺はあなたを否定しませんよ」

《零番隊五席兼元六番隊副隊長》
青木　輝
Ｈｉｋａｒｕ＝Ａｏｋｉ
愛に裏切られ、心を美月に救われた者
そして
裏切り者

残されたのは　１枚の手紙
「だいっきらいな人間を
もう一度信じたいと

おもったのは
美月隊長のおかげです」

さぁ紡がれ始めるは、愛しくも、残酷な物語。

プロローグ　始まりの時（前書き）

目の前には大虚（メノス）

こんなことになるなんて

思いもしなかった

プロローグ　始まりの時

私はいつものように、

一護に虚が近付かないように、

一護から離れてからいつもは零の状態にしてある霊圧を

少し放出した。

いつもと違う所といったらいつも一緒の双子の妹、卯月がいない。

ただそれだけ。

いつものように雑魚だけかと思っていた。

なのに、突然の後ろからの攻撃…

私の腹を貫いていたのは

大虚の舌。

一体だけ混ざっていた、新種の霊圧を消すタイプの大虚だった。

私の魂は、あっという間に肉体（カラダ）から引き離されてしまった。

（ちっ。今日に限ってっ。
卯月がいれば、苦労せず気を引いてもらって
その隙に肉体に戻るのに…
卯月は狙われたりしてないよね。
因果の鎖はまだ切れてないし、
早く肉体へ…）

魂から１０？離れた肉体へとまず行こうと
考えている間に、
視線が大虚にいっていたせいで
他の残っていた雑魚が
私の鎖を

踏みちぎれた。

（もうダメかな。
卯月には一護がイル。）

そう考え、霊体状態の私は朱い瞳を閉じようとした

その時、

強い冷気のような霊圧を肌で感じ、

閉じかけた眼を開けると

瞳に入ったのは

銀の髪をもつ死神。

その死神は一刀で大虚を倒し、周りの雑魚達を片付けていく。

全て片付け終えた彼が、私に近づき、言う。

「大丈夫か？
ったく、こんな所で霊圧を流すなんて何考えてるんだ、お前は‥って
人の話聞いてんのか！！
おいっ」

ほうけていた私は、正気を取り戻す。

不覚にも私はその死神に見とれていた。

私は赤くなった顔を隠して答えた。

「はっはい」

はっきりいってマヌケ極まりない。

その死神ははぁ…とため息をつくと、急に真剣な顔になって言う。

エメラルドのような翡翠色の瞳が私を一瞬硬直させる。

「お前、俺が見えるのに俺の服装見て、何も思わないんだな。

俺以外にこんな服のヤツ見たことあるのか？」

私はこの言葉を聞いて
私の男に対する態度にしてはなんの警戒も持たず、
ありのままの事実を言った。
「へ、だって死神でしょ。
ある程度霊圧あれば見えるの当たり前でしょ。」
彼は、呆れたような顔になって、
こう言った。
「死神が見える人間なんか聞いたことねぇーよ
勝手に決め付けんな！」
私はその言葉を聞いてそういえばそうだった
と思った。
でも

「あ、周り一族とか見えるから忘れてた」

「そーかよ。（でも何故こんなに霊圧が低いんだ）

お前名前は？」

霊圧を少ししか出していない状態のままで私は彼の質問に答えた。

「私は　雛桜美月　です。あなたは？」

「雛桜か
俺の名前は日番谷冬獅郎だ」

それは
私という一人の人間の死という終わりと

新たな世界や思いの始まりだった。

しとしとと降るのは雨

それは遺された体を濡らし、

血を洗い流していった。

用語説明　精霊術師とはなど（前書き）

太陽と共通です

用語説明　精霊術師とはなど

◆精霊術師とは

精霊術師

精霊の力を借り、魔を滅ぼす者ら。

そもそも

約千年前５人の若者が、五行を司る神と誓約（自らの誓い）と契約（血を次ぐ者に力を）を結び、代々続いてきた。

その直系は

炎の精霊を操る炎術師の家系，雛桜家

地の精霊を操る地術師の家系，大道寺家

風の精霊を操る風術師の家系，如月家

雷の精霊を操る雷術師の家系，神無月家

水の精霊を操る水術師の家系，神名家

だったが、

８０年ほど前に現世では

神名家は滅びた

また分家は無数にあるため直系の1人が、宗主として術師の上に立つ。

またそれぞれの属性の精霊の加護を受けているため

それぞれの属性のものでは影響を受けず、同じ術師でかつ実力が上の同属性は効く。

また　人それぞれ　周期も　月齢も　違うが力や霊力が不安定になる日が

炎術師だと、満月周辺

水術師だと、新月周辺

地術師だと、満月寄りの半月

風術師だと、三日月

雷術師だと、半月

力が　弱すぎる人と強すぎる人が頻度が多い

まぁ　多くても1年に1，2度

◆超越者とは・・・

あらゆる次元において神に認められ力を借り受けることを認められたをさす。

その数は今この世界に片手しか存在していない

美月の生家、雛桜家ははるか１０００年ほど昔、神獣・朱雀と契約した超越者の血を継ぐ家系である。

いやそれだけではない、ほかの４家、

水の神名家は、神獣・玄武との

地の大道寺家は、神獣・白虎との

雷の神無月家は、神獣・青龍との

風の如月家は、神獣・黄龍との

超越者の血を引く。

それを一族は始祖と呼んでいる（名前は伝わっていないが、５人

は知っている）

◆精霊術師の家系の戸籍について

はっきりいって作られていますが、関係者以外閲覧不可だし
たとえ天皇でも見ることは叶いません。

だから
死後であろうと気づかれずに仕事ができるのです

◆雛桜家

炎術師直系

一番直系に近い分家としては佐野家があげられる。

炎だけは

明確に等級づけされていて普通の炎＞黄金の炎（浄化の炎）＞神炎

神炎とは、
自らの霊気を織り込んだ最高峰の炎で

いままでには美月を入れても１０に満たない。

美月の神炎は
朱金色で
太陽のようなことから
紅炎またの名をプロミネンスと呼んでいる。

◆神名家
影の五代天皇家の一つ。
（他は炎術師の雛桜、雷術師の神無月、地術師の大道寺、風術師の如月）
水術師の本家。
８０年程前現世では滅びた。尺魂界では元四大貴族で３３年前滅びたとされる。
代々零番隊隊長を宗主が勤める。
美月達の母が元零番隊隊長神名葉月
高確率で双子が生まれ、二人は引き離されて育てられる。

というのも、神名家はある呪いを受け継ぎ、その呪いに対抗するために、術を用い、双子の片方が呪いを受け継ぐようにした。

二人の母である葉月は、二つにわかれた受精卵が結合し1人で生まれてきたので呪いを受け継いでいた。

呪いや神名家に伝わる刀については未来編最終ページにて

瞳の色について

炎術師の本家「雛桜」及び分家では、一番強いのが濃い朱。で暖色系が多く、橙や赤紫、ピンクなどで占められている。

雷術師の本家「神無月」及び分家では、一番強い力の持ち主は金、他は明るい茶色や、オレンジ等がもっぱら

水術師の本家「神名」及び分家では、藍色もしくは紺色で、藍色のほうが力が強い。濃い青系です。

風術師の本家「如月」他分家では、水色が一番力が強いほうで、より透き通ったほうが力が強い。ほかは薄い灰色や茶色

地術師の本家「大道寺」および分家は、濃い茶色やオレンジ、少ないが緑である。
緑が一番強いといわれている

◆葬儀の違い

精霊術師の家系は葬儀屋とかは呼ばないし、お墓も作りません。
一族ごとに決まっていて
自らの仕える神の御元へと還るため

風術師は本家地下にある風の力が溢れる微生物の一匹もいない部屋に死体が朽ちるまで（風化）

地術師は本家地下に半分弱埋められて、地に還るまで水術師は同じ
一族のものに作られた氷の中へ葬られ

雷術師は一族が絶えず、力を注いだ雷の間で
炎術師は本家地下の炎の間で

どの葬方も肉体に宿る血の力がなくなるまで死したときのまま腐敗もしない

（どこも微生物がいないし存在できない）のため1ヶ月でなくなる人もいるし

逆に十数年かかる人もいるちなみに明良を含めた美月達は未だ変化一つない

多分明良は分家ながら強かったのであと十年は
美月達は歴代最高だし、前世に始祖がいるので

数百年単位必要かもというかいる。ちなみに始祖はまだ残ってる。

だって仮に火葬するとして炎術師なら死んですぐは燃えないし、水術師なら燻るし、地術師は足が地についていたらすぐ燃えても治るし、風術師はなんかありえないことに空気の膜で覆われるし

困らないの雷術師のみ

ちょーっと不自然に静電気発生するけど（全然大丈夫じゃないってー）

◆単語説明　出てくるたび更新予定

怨霊

ギリギリ虚ではない

かなりのレベルになると自分自身が虚になるのを

無意識に避けている

また魂葬も簡単でなく、下手な虚より達がわるい

が　虚のようにレーダーに反応がないため

１００％　生者の術師等に倒される。

登場人物　その１　月ヒロイン　雛桜　美月（前書き）

イラストはサイト内にあります　ここにはありません

登場人物　その１　月ヒロイン　雛桜　美月

原作の年（一護が高一）は２００７年とする

雛桜美月

１９９１．４．３生まれ

享年１３歳

炎術師の家系の直系

雛桜家の長女であり、卯月の双子の姉。

１３歳の５月末、虚との戦闘で死亡

その時　十番隊隊長日番谷冬獅郎に助けられる

その後すぐ斬魄刀を生み出し、死神として働くことになる。

その時は十番隊三席。

その後同年１２月、卍解が使えることがばれ

零番隊（正式名御廷十三隊直属特別部隊零番隊（レイ））隊長となる

霊気の色：朱金

生前の髪の色：黒

今の髪の色：朱

瞳の色：朱

身長：１４５？

体重：３０？

血液型：Ａ型

相手：日番谷冬獅郎

詳しいことは第四章で話すが前世の記憶があり

その記憶のためか、過度に周りが傷付くの良しとしない

鋼や狩人（同姓同名）、復活（水無月楓）連載でててくる主人公は、

パラレルワールドの彼女。

詳しい前世はかなしき物語で

またパラレルワールドの自分との記憶は共有している

前世の罪で

時間と空間の扉の守護者

になっている

――――――――――――――――

◆斬魄刀

？朱夏（シュカ）

始解：炎よ散れ朱夏

刀が炎を纏い、炎を操る

卍解：卍解火輪朱雀（カリンスザク）

七星の力を使う。

朱金の炎を放つ大きな朱雀が現れる

鬼宿（タマホメ）：レーザー状の炎（黄色）

柳宿（ヌリコ）：炎の球

星宿（ホトトリ）：炎の刀

翼宿（タスキ）：鞭状の炎

軫宿（ミツカケ）：幻炎（紫）

井宿（チチリ）：盾の炎（白）

張宿（チリコ）：空間を断つ炎（青白）

元々は美月の守護精霊

具現化：緋色の中国風の服を着た美月によく似た１０程朱髪朱瞳（美月より薄い）の少女で口調が古式。

中国で南を守護するという神・朱雀。

炎を司り、雛桜家に力を与えた張本人。

「我はお主の言葉に従う。ただそれだけだ」

つかは羽のような形。

卯月の斬魄刀藍珠の対

？癒宇（イウ）

始解：癒せ、癒宇

青白い光で癒す。内部を治す時、刺した方が治る。

卍解：〇？（里）以内の全ての人を治せ、卍解治癒空間

完全治すには長時間必要

薄い朱い霧にその空間が覆われる。

具現化：白に近い銀髪に碧瞳の女で背中に片翼

元戦いと癒しと愛を司る大天使。

「もし自分が死ねば皆が助かるなら貴女ばどうしますか？」

つかがない懐サイズの刀
持つ所には「癒」の字

サブ主人公その2の皐月の斬魄刀宇紀癒の対

？刹那（セツナ）

始解：血に飢えろ、刹那

刀身が血色に染まる

キーワード、切り刻め”ということで刺した対象を木っ端みじんに

卍解：血を浴び、悪夢を見せろ、卍解永遠ノ悪夢

昏い空間に傷付けた敵を閉じ込め、精神が壊れる
もしくは美月の許可を得るまで出られない
両刃の剣で、揺るぎない殺す覚悟を持たないと
美月自身が傷付く。

具現化・黒髪緋瞳の男で全身黒づくめ。
ひどく好戦的で戦闘狂に近い
左目に大きな傷跡がある
「人を殺す覚悟お前にあるか？」
黒の柄から白い布がでている。
朱夏以上斬月未満の長さ
卯月の斬魄刀琥珀の対で、神名家に伝わる宝剣の１つ
――――――――――――――――――――

●その他
誰にでも愛される子恋愛ごとには涙もろい。
しかし、意志が強く、喜怒哀楽の激しい子。
しかし自分の恋にはうとい。

いくらつらい目に遭おうとも人を愛せる。

が若干男が苦手。（えっ）

（これは本人達しか知らないことだが、異母兄・響［父の前妻の子」により、小学４年から６年の中頃まで性的虐待を受けていたしかも兄１人だけではない）

彼女本人もショックと兄の術で忘れているが、心の奥底や体が覚えているし、日記で見知っている。

１０までは前世の記憶はうっすらとだけだったが、
皮肉にも上をきっかけに全てを思い出す。

ＩＱ３００以上の持ち主で
アメリカのハーバード大学の理数科と医学部の終了資格をわずか６歳の時半年で取っている。

イメージは赤薔薇か桜。
また１２までピアニスト兼作詞作曲家”ナナ”として名を挙げる

左手にガーネットでできたブレスエットをしていて
これが霊圧制御装置
8割を封じ込める

だが残り2割の状態でも
隊長格の1．2倍の霊圧

つまり
全霊圧は隊長格6人分
しかし霊圧制御装置をつける原因は
体が耐えられないため。

また、完全に霊圧を解放すると
額に朱雀の刻印が浮かび上がる。

――――――――――――――

登場人物　その２　　太陽ヒロイン　雛桜　卯月

原作の年（一護が高一）は２００７年とする

雛桜卯月

１９９１．４．４生まれ

現在１６（原作初期時）→１８（死神代行消失編～）

空座高校１年３組→３年（石田と同じクラス）

一護とはクラスメートで小学校からの友人

様々な武道大会で優勝していて、

一護やチャドより

１００倍強い。（死神前段階で）

雛桜家の次女で次期宗主。　（２０代め）

月ヒロイン美月の双子の妹

姉が死んだのは自分のせいだという自責の念を抱き、また魂の無事を信じたいと思っている

―――――――――――――――

霊気の色：藍碧の霊気

髪の色：（通常）黒色

（霊体）藍色

瞳の色：藍色の瞳だがカラーコンタクトで茶色にしている

身長：１６０？

体重：４０？

血液型：Ａ型

相手：石田雨竜

―――――――――――――――

美月、サブ主人公３人組とかかわりの深い切っても切れない前世の絆を持つがまだその記憶を取り戻していなくて

第二章中

少しずつ思い出していく。

パラレルワールドの記憶の共有は完全に思い出した後

霊界の扉の守護者

―――――――――――――――

◆斬魄刀

？：藍珠（アイジュ）

始解：水氷に舞え、藍珠

水のように様々な武器に変化する

卍解：卍解玄武水氷陣珠

水の玄武が出現して、水の球を操る

凍結（水色）

変幻自在（透明）

癒し（白）

幻（緑）

溶解（黄）

もちろん普通の水の球あり

卯月の現守護精霊

具現化

藍色の中国風の服を着た卯月に顔立ちのよく似た藍髪藍瞳少女

中国で北を守護する神・玄武。

神名家に力を授けた張本人やはり古式な口調

「お主は一体どうしたいのじゃ」

外見

つかが雨粒の形

長さは朱夏と同じくらい

美月の斬魄刀：朱夏と対である

？琥珀

始解卍解ともに不明↑まだきめてない（決め次第更新）

具現化

ぴちぴちピッチのミケルそのまんま

蒼翠とも彼女に言われる。

碧銀の髪に紫の瞳

外見は刹那と正反対で白い刀身柄で柄からでる布は黒
長さは小太刀（コダチ）

美月の斬魄刀：刹那と対である

――――――――――――――

その他

裏表がある子。

（４人よりも）自分のことはどうでもよく、自分のせいで誰かが傷つくのを恐れる。

恋愛対象として男はあまり好きではなく、（女が好きと言うわけではなし）ナンパ男への対応が１番酷い。

完全に思い出すのは、２章中だったりする。

ＩＱ２００

ハーバード大学体育科（なかったらごめんなさい）をトップで卒業かつ体育の国際教員免許を８

歳で半年取った。

美月とともにコンクールで何度も優勝。

”ナナ”の双子の妹”ナミ”ヴァイオリニストで歌も少々。

現在は歌手を波音（ハノン）として。

イメージは水仙か蓮

蒼いサファイアでできたブレスレットと髪飾りをつけていて
それは霊圧制御装置。

これにより8割強の霊圧が封じ込められている

完全に封じた霊圧を解放すると

右手の甲に玄武の刻印が浮かび上がる

――――――――――――

紹介はまだまだ続く…　長い

登場人物　その3　サブ主人公　3人衆（前書き）

姉御肌で、胸でかめな、派手系美人なサブ主人公1
毒舌敬語系、大和撫子系なサブ主人公2
兄貴系中性的美人なサブ主人公3
です。

登場人物　その3　サブ主人公　3人衆

サブ主人公その1

神無月由宇

享年15

1987.10.10生まれ

元三番隊三席
現零番隊四席

姐御肌な性格で
男女にもてる。

霊気の色：黄色がかった白金，　金色

髪の色：（今）金色
　　（生前）金茶

瞳の色：金

身長：165？

体重：45kg

血液型：O型

相手：吉良イズル

――――――――――――――――

主人公と同じ
死んだとき前世を全て思いだした

魔界の扉の守護者

――――――――――――――――

◆斬魄刀

？雷覇

始解：雷をあげろ、雷覇

外見変化せず、雷を操る

卍解：四方よりまじわれ、卍解青龍雷輪

青白い電気をまとい金の光を放つ青龍が現れる
始解のパワーアップ

元由宇の守護精霊

具現化

金髪金瞳の黄色を基本にしたミニスカ中華服を着た１０程の由宇に似た少女

中国で東を守護する神・青龍

「いこうかの由宇」

迅雷の方が短い
迅雷とは対

？迅雷

始解：集え、迅雷

外見変化なし、雷覇より弱く、微妙な調節にたけている。

卍解：卍解紫電一閃

雷をまとう鳥雷鳥が現れ、その羽根は当たるだけで大ダメージ。

始解のパワーアップ

由宇の元守護精霊

元を正せば、異母兄・日向陽（ひゅうが ひなた）の守護精霊。

具現化
２０くらいに見える蒼銀色の髪に金色の瞳の男性。
「ちゃっちゃと終わらせよう主」

雷覇とは対
雷覇の方が長い

―――――――――――――――

その他

公私を分けている

零番隊の苦労人。

イメージは黄薔薇か向日葵。

愛って何かわかっていながら心がそれを認めない

天才若手女優”唯”。

１２～２５までの役を１０の時から。
出演したものはどれも好評
話題の名作”朧月夜”での幽霊”アリサ”役や
”天使のつばさ”では第一シリーズでは妹の聖良、第二シリーズでは姉の怜良等５年前のデビュー当初から
天才子役の名も期待の若手の名も様々な声も総なめにしている。
政略結婚な両親で父親も母親も愛人作っているし、夜遊びはするは、な最低ども
兄弟仲は最悪
　全員片親違い。
名字は一緒だから、怪しまれないよう別々の学校に通ってたけどさ
名前なんて全然気にしなくてもいいよ
一番年上なのが１２歳も年上の異母兄・充（ミツル）
次に１０年上の異母姉・艶香（ヨウカ）
つづいて
５つ上の双子の異母兄、実（ミノル）と旬（シュン）
でこの後に生まれたのが

由宇

由宇だけがこの夫婦本来の子

由宇が生まれた後はもうこの夫婦離婚してないだけでもう悲惨

悲惨

上の兄姉みんな母親違う

で下に

２歳下の異父妹・愛

４歳下の異父妹・恋

６歳下の異母妹・絵依

６歳下の異父妹・憂（ウイ）

８歳下の異母弟・昭夫（アキオ）

９歳下の異父弟・治

１０歳下の異母弟・昭継

１２歳下の異父弟・健

母親が生んだのは全員認知せざる得なかったけど、

父親はそこらじゅうで種撒き散らしてたらしい（下品ですまん）

霊圧制御装置は、シルバーアクセのブレスエット
左手につけていて、完全霊圧解放すると、左腕に青龍が浮かび上がる。

―――――――――――――――――――

サブ主人公その２

大道寺　皐月
享年１６
１９８７．５．５生まれ

元四番隊三席
現零番隊三席

毒舌腹黒ですか
言うことは正しく、実は優しいお姉様

―――――――――――――――

霊気の色：白がかった緑

髪の色：（今）碧
（生前）茶

瞳の色：緑

身長：１６０？

体重：４３ｋｇ

血液型：Ｂ型

相手：檜佐木　修兵

主人公と同じ
しんだ時に思い出した

天界の扉の守護者

◆斬魄刀

？花音

始解：惑わせ、花音

卍解：咲き誇れ、幻音（うつつね）を聞かせよ、卍解白虎百花繚乱
土の力や植物の力を使う

花の香りを使い、さまざまな効果のある香りや、薬を作ることも可能。

皐月の元守護精霊。

具現化

碧瞳碧髪の皐月にそっくりの外見だが毒舌は控えめな１０程の少女。

中国で西を守護する神・白虎。

「何してるのさっさと行きますよ皐月」

柄に飾りひもがついていて始解の時緑にかわる。

海依の斬魂刀：地生の対

？宇紀癒

始解：力を与えよ、宇紀癒

卍解：命の息吹を、卍解昇天癒紀

ともに癒宇と違い、体の傷を治すのではなく、霊力を回復させる。

（自分の霊力を相手のに変換）

卍解では、満遍なくだが、１人１人に対しては、始解のパワーよりダウン気味

具現化

黒髪碧瞳の癒宇にそっくりな少年。

同じく片翼を持ち、元癒しを司り天界の番人補佐であった天使（→皐月の部下）

「また貴女と戦えるなんて光栄です皐月様」

西洋風の普通のサイズの刀

癒宇の対

――――――――――――――――

その他

腹黒、毒舌、敬語キャラ。

だが優しく、少し弱い。大人。

人は汚いものだと悟っている。

間違いなく男を尻に引くタイプ。

美月達のお姉さんかお母さんみたいな。

冷静に見えるが、激情家

イメージ大樹か薔薇の棘

裁縫等がとても上手く、料理に至っては若干１２歳でプロの料理人の資格を取り、

和洋中伊等を幅広く着手していてまた日本一の高級旅館＞梓弓＜の女将：月夜として働いていた。

霊圧制御装置は首の十字のネックレス

完全霊圧解放すると、胸元に白虎が浮かび上がる。

―――――――――――――――

サブ主人公その３

如月海依

享年１５

１９８８．２．２生まれ

元二番隊副隊長

現零番隊副隊長

男前で中性的

髪が長いのに女物以外着ていると男に間違われる

もしくはどっちと言われる

霊気の色：碧や水色がかった銀

髪の色：（今）銀
（生前）黒

瞳の色：水色

身長：１７０？

体重：４７ｋｇ

血液型：ＡＢ型

相手：砕蜂

主人公と同じ
しんだ時に思い出した

妖精界の扉の守護者

◆斬魄刀

？風華

始解：風よ我が声に応えよ、風華

うすく刀身に龍が浮き出る

卍解：黄龍迅風華遠

水色で銀の光を放つ黄龍が現れる

元海依の風の守護精霊。

具現化

海依にそっくりだがこっちの方が若干女らしい。

銀髪水色の瞳で中国服着用。

中国で中央を守護する神・黄龍。

「行こう主様」

風車のようなつかの形

？地生

始解：地の力を我に、地生

卍解：地竜五行地ノ章

土色の竜が現れる

元海依の地の守護精霊

具現化

茶髪茶瞳の筋骨隆々とした男

「さっさとしろ海依」

小太刀ほどの刀

花音の対

――――――――――――――――

その他

恋愛に関して男大嫌い。

というより前世は男女すごい半々なせいで性への認識が薄い。

イメージは白か蒼か水色の薔薇。

またその容姿をいかしたモデルで主に男装モデルと変幻自在に声を操る凄腕のベテラン声優として、

モデルは１２くらいから声優は８くらいから活動している。仕事名は戒（カイ）。

５歳年下の異母弟・風がいる。

術師の本家大道寺家の娘と如月家の現党主の間に生まれた。

珍しい術者同士のハーフ。

後妻に嫌われてた。

左手人さし指につけている指輪が霊圧制御装置

完全霊圧解放すると、、黄龍が左手の甲に浮き出る。

―――――――――――――――

5人衆についてと零番隊（前書き）

サブ主人公三人衆と双子の共通点とか、零番隊について…　等々

5人衆についてと零番隊

霊圧制御装置ついて

つかわれている宝石は
元々は霊石と化した真珠

術師の属性により、宝石に変わる

炎→ガーネット

水→蒼いサファイア

雷→トパーズ

地→ペリドット

風→アクアマリン

強い力を封じ込めるために使い、通常力の制御できない幼児のころからつける。

が5人の場合は
普通の人［一族分家］が玉ひとつ
普通の直系3～4で完全に押さえ込めるが

10この玉つけても

８割までしか封じ込められなかった。
［↑これ以上付加できない］
１０までなら
玉を濃縮し１こ分の大きさにできる。

そんな５人の
共通点

・自らを突き通す
・心に傷・過去を乗り越えている
・裏切り＝なくならない
しかしなくなってほしい。

・・肌でなく魂に刻まれた刻印

ヒロイン達の設定＋α

義骸を使わなくても、霊圧の調整や構成で実体化できる。
（死神ヒロイン達やオリキャラはもちろん、灰側ヒロイン、魔法側ヒロインも、）
イコール
義魂丸を持ち歩いてもない

語学力について

日本語以外に
海依や皐月、由宇ができるのは　アメリカ英語、中国語、フランス語
卯月はそれ＋αドイツ語

美月は卯月＋αイタリア語、イギリス英語

である。

（＝美月は、依、独、英、米、日、中、仏の七か国語しゃべれて、
卯月は一伊、英
あと3人は一独である）

――――――零番隊――――――

正式名御廷十三隊直属特別部隊　零番隊（レイ）

隊花　薔薇

意味［うつろい行くもの
様々な色（シキ）］

隊長羽織（裏）　紅（クレナイ）

副隊長章のようなものが

隊長以外全員にある。

～五席まで後に↓四席　金
後の席官銀
で出来ている

零番隊的虚ランク

Ｓ×５破面ゼロナンバー１～７
Ｓ×４上の８～１５
Ｓ×３上の１６～２５
　破面１～５エスパーダ
ヴァストローデ
Ｓ×２　６以降のエスパーダ
　　ヴァストローデ
Ｓ　それ以外のアランカル
ＡＡアジューカス
Ａギリアン　巨大虚
ＢＣＤ普通虚
死神でいうと

隊長格は全力でＳ×３

零番隊の美月・海依・皐月・由宇は全力でＳ×５と互角程度。
副隊長は隊によるがＳＳ（恋次）からＡＡ　です。

一角さんはＳＳ

かなー

ちなみに

零番隊の５席以下はＳＳＳ弱

六番隊三席はＳＳＳ弱

で精神状態に大いに影響される

よくも悪くも感情的な面がかかわる

なお等間隔空くのでなく

ＳＳとＳＳＳやＳＳＳとＳＳＳＳではもう別次元である。

王族特務は零（ゼロ）から参番隊までである

ゼロはレイとほとんどメンバー同じ

壱番隊一隊長山吹　空羽（クウハ）♂

副隊長：青木輝♀

弐番隊一隊長三上　馨（カオル）♂

参番隊一隊長佐野　斎（イツキ）♂

→原作５０年前の佐野家当主

輝以外いずれも原作時から今まで一緒

（まだ、名前しか決めていませんが
詳細が決まれば
つけたします、次話に）

他オリジナルキャラ

オリジナルキャラ

？青野　輝
享年１７
死因　親による虐待
虐待理由　異能
家族（生前の）両親、妹（１４下の）

元六番隊副隊長兼現零番隊五席
恋人に裏切られた過去をもつ。
心を美月に
体を藍染に救われた過去を持つ
美月の願いで空座町で、高校生として潜入
二章で彼女が選ぶのは……
藍染？それとも美月？

身長：１５５？
体重：４５？
血液型：Ａ型
誕生日：１／２

髪の色：黒　　瞳の色：オレンジ
霊気の色：オレンジ

斬魄刀
言霊

始解：虚を現に、現を虚に、言霊
瞳がオレンジから金に変わる
効力範囲は刀を中心に半径５０？
卍解　夢幻ノ詞

どんな言霊を現実にする
また効力範囲は半径２？
だが、理に関する　ことは
代価を必要とする

具現化
１０？程の妖精で白髪黒瞳。
「ちょっとーしっかりしてよ輝私はあなたが何を選んでも従うから」

？須王　修宇

元十一番隊四席
現零番隊六席

第三章で五席に

見た目　２０前後
髪の色：灰色
瞳の色：黒色
身長：１７５？
血液型：Ｂ型
体重：？
誕生日：？だから初めて魅と会った日である３／１０

霊気の色：白

冬獅郎とは同期で、まあまあ良好な関係だったのだがあることで険悪に

草冠とも知り合いでいつも一位日番谷　二位　須王　三位　草冠

魅とは幼なじみ

更木出身

斬魄刀
光神
始解：貫け、光神
光属性なので、太陽が出ている時最も力を発揮

卍解は魅と合体卍解

？神代（カミシロ）　魅

元十二番隊三席
現零番隊七席

第三章で六席に

見た目：２０前後
髪の色：栗色
瞳の色：焦げ茶色

身長：１６５？
体重：？
血液型：Ｏ型
誕生日：修宇と同じ

霊気の色：黒

桃達と同期

一回生で始解を習得

更木出身で、修宇とあって世界に色がついた
修宇が好き

マッドサイエンテストが大嫌い
整形で見えなくしているがおでこに大きな傷。
マユリの肉体強化の手術をうけた。
そのため、身体能力は隊長格だが、体内などがついていかず、吐血することがある。
腕の傷は1回生の時の実習中虚に。
チョーカーをいつも外さないのは下の手術痕を隠すため。左目視力が極端になく、
流魂街時代から０．２と悪かったが投薬の影響で０．０５にそのため戦闘時眼帯をつける。右目は３．０
零番隊章は腰に巻き付けていて、改造死覇装。

阿散井達と同期

斬魂刀
闇王

始解：全てをおおいつくせ、闇王
同様に月がでて辺りが闇で覆われている時最も力を発揮

合体卍解
卍解「闇夜ノ月光紳王」

？那智　葵

零番隊八席

第三章で七席に

見た目１２、３
髪の色：薄い亜麻色
瞳の色：茶色
身長：１５０？
体重：？
血液型：ＡＢ型
誕生日：７／２０

霊気の色：蒼

まだまだ新人の死神
明良とは同期。
流魂街にいたころ三席時代の美月　に様々なことを学ぶ。
そのため尊敬の念をもつ

実は　雛桜家の者らしいが生まれてすぐ死亡したため術はなにひとつ使えない

血筋上　〇〇の兄に当たる

斬魄刀

蒼炎
始解：炎＜熱するものを全て無にかえせ、蒼炎
刀身を蒼い炎が覆う
氷水＜蒼き力を蒼炎
刀の蒼がいっそう色濃くなる二つ同時に使うのは不可
卍解：蒼碧炎氷（ソウヘキエンヒョウ）
水晶でできたような翼を持つ龍。天龍
中で炎が揺らぐので模様が動くように見える

具現化

藍に近い紫色の髪に赤紫色の瞳の三十路まじかに見える男性。美形。
実は蒼炎使い・雛桜彗。
水術師と炎術師のハーフ
「こやつは一応雛桜直系だぞ。産まれる前に死んだがのう」

？佐野　明良

六番隊三席

享年：１３
髪の色：赤茶
瞳の色：明るい茶色いや、桃色
薄いオレンジにも見える便宜上桃色で
身長：１５３？
誕生日：８／２３
血液型：ＡＢ
霊気の色：薄い赤　桃色

雛桜家の分家・佐野家の次男
美月、卯月、留依のはとこに当たる。

元美月の婚約者

美月を尊敬していて、初恋は留依だったりする

毒舌マシンガントークの持ち主で、
顔立ちはそこらの女の子より愛らしい
初対面は十中八九女に間違える・・・

生前はサッカー部キャプテンであり、Ｕ－１４に所属していた海依、
皐月、由宇、風と同じく
聖クロス学園に通っていて頭もいいのでＳＡだった

サッカーのポジションはＦＷ

これはネタバレだが
この世界のホイッスルの椎名翼である

斬魄刀
陽翠
始解：紅に染まり踊れ炎よ、陽翠
形状変化なし。
目に見えない小さな炎を起点に発する色は金と普通の深紅
卍解：太陽炎輪翠彰（ニチリンエンリンスイショウ）
いくつもの廻る炎の輪
核が雪の結晶のような形の炎。
これが壊されない限り再生可能。

具現化
一見不良の金髪赤瞳野郎。関西弁
元守護精霊らしい
「おいおいしっかりしてくれーな姫さん」↑でそのあと明良はいつもこう切れる「目が腐ったのかな、それとも頭かなこの馬鹿が」
「そんなことゆったって姫さんは姫さんやかわいいかわいいの」

？如月　風
サブ主人公3　如月　海依の異母兄弟にあたる。
如月家次期当主
本人は姉を大変したっていたが…
周りはそれを良しとしなかった

主に女モデルとして”宵”という名で活躍している
また姉同様声優もやっている。
髪の色：黒
瞳の色：水色
誕生日：１９９２．１２．１０
身長：１５５
未来は１７０
霊気の色：水色
血液型：Ａ
風術師で如月の次期当主

？雛桜　留依
美月や卯月の従妹にあたり、
明良のはとこに当たる

敬語をよくつかい、おしとやか。
おかっぱ頭が印象的。

いちおう声優で”朱炎”の名をつかう。

髪の色：黒
瞳の色：赤だが薄い。濃いピンク
誕生日：１９９４．６．１２
身長：１５０
血液型：Ａ
霊気の色：赤紫

紳炎は使えない

。サブのサブ　かも

？日向（ヒュウガ）　陽（ヒナタ）

神無月由宇の唯一兄と認めた異母兄

８歳上。

秋生まれ

髪の色：薄い茶色

瞳の色：黄色

約８年前死亡

享年１６歳

誕生日：１９７９．１１．１５

血液型：Ｏ型

身長：１７０ｃｍ

体重：６０ｋｇ

自らの魂の片割れである守護精霊を妹に託したため、

斬魄刀を持っていない。

流魂街にいる。

冬獅郎を拾ったおばあちゃんと暮らしている

霊力はあり、結界・縛術・鬼道・その他の術は使えるし、弱かった体は、強くなっている

今のところ死神になるつもりはない。

？八城　初音

元由宇達のクラスメイトで妹のような存在
見た目１６、７歳

葵達のクラスメイト。
茶髪茶目の可愛い系

原作時点では、四回生。

？煌（こう）　未姫（みき）
身長：１６０ｃｍ
体重：４５ｋｇ

中国人と日本人のハーフ

冬獅郎や修宇と同時入学で、女名だが男

生前病弱だったため、色白。

対人関係がダメダメ

でも実力はあったようで、現在七番隊５席

見た目は１６、７。

紺色の髪に、漆黒の瞳

第一話　我が名（前書き）

私は死んで死神となった。

心残りがないといえば嘘となる。

それでも、別れてしまった道が再び交わると信じて、私は歩き続ける。

愛する人と仲間達と共に：

仲間を守って死んで幸せとかそういうことは、考えない。

共に助かる可能性がどんなに低くても、

０％じゃない限り、

また自分がどれだけ傷ついても絶対に共に助かって見せる：

こんな私を大切にしてくれる人のために

第一話　我が名

私はその死神・日番谷　冬獅郎に魂葬された。

第一話　我が名

「ここが…　尸魂界（ソール・ソサエティ）。
なんか、あっちの方から大きな霊圧をいくつも感じる。
なんかとても懐かしい感じもする。」

そう自分の世界に没頭しながら
順番待ちを通り越し勝手に中へと
自分の感じるままに歩いて行った

霊圧を感じるほうにと。

だが、私は急にとまった。
なんとなく嫌な自分に害を及ぼすタイプの霊圧を感じたから。
私はその辺にあった石を拾って、嫌な感じのする所に投げた。
すると下から大きな壁が現れた。

すべてを拒絶するかのようなオーラを放つ壁が…

「やっぱりね。
外敵を退けるためのものの類ね…
でもこの向こうっていったい？
守らなければいけないものがあるわけ？
それにこの霊圧…」

冷静に物事を推察する私こと雛桜美月。

「そこは瀞霊廷（セイレイテイ）だよ。」

突然の声に振り向くと、そこには少しわかめのおじさん。

「あなた…誰ですか？」

私が気配に気付けなかったかなりの手練と見える人物

「そりゃぁ失礼。僕は享楽春水という者だ。」

それとは裏腹に飄々として軽薄そうに見えるその男が着ているのは、
さきほどは気付かなかったが、
派手な女物の上着の下にあるものは、死神の着る黒い着物・死覇装。
それをみて少しは警戒心を解く。
全くの正体不明男ではなくなったから。

でも、私は、彼女は本能的な部分でまだ警戒していた。

「あなた、その服死神ね」

頭が痛い

なぜかくらくらする

「そうだよ。

僕…

私の意識はブラックアウトした。

おそらくは

生前の記憶を全く失わずに

この尸魂界にきたからも原因だった。

ドサッ

美月は倒れ

それを瞬歩でよった享楽が支える。

そしてこう疑問を空へと溶かした。

「ちょっと君っ
気を失ってるよ
対して霊圧があるわけじゃないのに
霊圧をここまで正確に感じ取れるなんて
いったい何者なんだい」

そういいつつ
御廷十三隊八番隊隊長である彼は
彼女を抱え、瀞霊廷の中へと入って行った。

ＩＮ　八番隊隊主室

「隊長っ
どこにサボって……

誰ですかその子

まさかさらってきたんじゃないですよね」

真面目そうな眼鏡をかけた２０代半ば程に見える女性の死神。

「七緒ちゃん　ただいまぁ

この子？
なんか霊圧ほとんどないのに
瀞霊廷の外から霊圧を感じるとか言ってて
話してたら急に倒れちゃったから連れてきちゃった」

「何が連れて来ちゃったですか
この子の親御（義理）さんが心配したらどうするんですっ」

会話を聞いているだけで
享楽さんのいい加減さ
七緒さんの苦労がにじんでいる。

「仕方ありません
目を覚ますまでここにおいておいてかまいません。
そのかわり、後できっちり総隊長に事情を説明すること。
そしてサボった分の仕事してくださいね」

冷たい眼差しで享楽をにらみつけた。

「えぇ～
七緒ちゃ～ん」
はっきりいって情けないことこの上ない。

こうして享楽隊長は七緒さんの言うとおり
美月を別室において
仕事をすることになったのであった…。

――――――――――――――――――――

美月がいたのは

朱金色の炎につつまれた空間だった。

「ここは…？」

誰もいないその空間でその疑問に答えた声があった。

『ここはお主の心の世界じゃ。』

「この声は…朱夏？なんで私は死んだのに」

それは美月にとって、大事な相棒の声

死んだ以上

もうしばらくは聞くことがないと思っていた声

『そうじゃ

しかし、この世界では、精霊術師としてのお主の守護精霊として存在しているのではなく、

死神としてのお主の相棒・斬魄刀として存在し共に戦う。

だが、お主の斬魄刀は我だけではない。

あと2本ある。その名前をみつけるのじゃ』

私は嬉しかった。

また再び朱夏と戦えることが
ともにいれることが
”いままで”で”彼女たち”の次に永く一緒にいたのは、
まぎれもない彼女・朱夏だったから。
それが私を再び戦いの中に誘うものだとしても…
それに無力で護れないことがどんなに恐ろしいか彼女は
”今まで”にずっと”体験”してきたから

「わかった、朱夏。見つけてやろうじゃない」

私の肯定の返事に対して朱夏は

『よし、ならば…』

朱夏の人型があらわれた。

緋色の中国風の服を着た美月によく似た

１０程美月より薄い朱髪朱瞳の少女。

後ろには2人ほどいるが、見えない。

『まず我はとっくにお主を認めておる。

”あの時”からのう。

卍解もできそうじゃな。

卍解はおいおいまた時間のあるときの夢の中でもなんでも教えるとして、

とりあえず、始解の時は、≪炎よ散れ朱夏≫　の言霊を言え』

卍解？

始解？

はっきりいって死神のことは知る必要もなかったから、

正直に朱夏に尋ねた。

「卍解？始解？なにそれ」

すると不思議そうに

『知らなかったのか？

説明しなかったか？』

おいおい
いくら私でもしんだ後必要になるかもわからないことには、手を出さないよ

たしかに雑学知識や専門知識は豊富に持ってるが、

というかこんなに早く死ぬなんておもわなかったしねぇというような思考のすえ

「朱夏私をなんだと思ってるわけ？

私は”万能”じゃないんだからね」

と言うのだった。

『斬魄刀には、２つの解放があり、最初の解放を始解、もう１つを卍解というのじゃ。

一般的に、卍解は始解の５～１０倍の力が出せるのじゃ。

じゃから使えるものは本当に少ない。

自分の斬魄刀の名前すら知らない者も多いようじゃからな。

のため、死神の隊長になる第一条件でもある。

力が使えないより使えるほうがいいじゃろうお主にとっては、のう美月。』

思い出すのは”前世（むかし）”の記憶の1つ。

自分の力の無さを

いやどんなに強い力をもっていても使えなければ意味がないと思い知ったときの記憶。

力が引き寄せる者もある。

だけど、…

自分の無力に嘆くのはもううんざりだから

だから私は・・・

「教えて、あなたが私に貸してくれる力のことを…
あなたの力の最大限を私は引き出して見せるから」

『美月ならそういうと思ったぞ。
私の卍解は朱雀七星宿の力を使う
まぁ今はとりあえずここまでにしておこうかの。
今は始解で十分じゃろうし
先にお主の事をあやつらに認めさせてやれ。
大丈夫じゃ
美月ならのう』

後ろから来た二人の姿がやっと見える。
一人は女。
白に近い銀髪に、引き込まれるような深い新緑の碧。白い衣がまぶしい

もう一人は、男で、左目に大きな傷跡がある
黒い衣に黒髪に血のような赤い瞳の攻撃的な殺気を放つ人だった。

『あなたが美月？』
先に声をかけてきたのは女の方だった。
「はい。
あの貴女が私『そうよ。私はあなたの斬魂刀の１つ。
あなたを認めるかはこの質問にいかに答えるかで決めさせてもらうわ。
私の納得のいける応えなら、私もあなたに力をかしましょう』
どうやらめんどくさいのが嫌いなようで単刀直入に彼女は言ってきた。
「分かった。私も真剣に答えましょう
あなたの言葉に」
『では聞くわ。
美月あなたは何のために戦うの？』
その言葉を聞いた途端、幼い頃から染みついた言霊が声となって、口から飛び出す。

「我、すべての人が平穏を送れるよう、また
時には人たることも忘れず、
大切な人を守るために」
精霊術師としての理…
だが無意識に答えたようにみえたのが
途中から一変し目に強い光が宿る。
『そう、
ならあなたは、大切な人のために死ねる?』
「それしか方法がないならするかも知れません。
でも、少しでも可能性があるなら、残される人の悲しみを考えて、
最後まで足掻きます。
大切な人も、自分も死なないそんな方法を見つけてみせるっ。
こんな私を大切にしてくれる人のために」
それは嘘偽りない言葉…
そして”前世(むかし)”からの教訓

親しい人に残されるのがどんなに辛いか〟覚え〟ているから

『気に入ったわ。

私の名前は癒宇(イウ)。

癒しの力を持つ者。

必要になれば、私を呼びなさい。』

癒宇の背中から片方だけ右側に翼が生える。

「ありがとう、癒宇」

そして癒宇は姿を消した。

いよいよ美月は男に向かいあった

彼は言う

『俺は、朱夏や癒宇のように甘くないぜ。

お前純粋な殺意を持って人を殺せるか?』

殺人…
人を殺すことが悪いことだとかそんなこと言うつもりはない
人を殺すのは覚悟が必要
それが自分の心を削ることだとしても…
きれいごとで生きて行けるほど人は綺麗じゃないから
できる限り人は殺したくない

でも…

「それが大切な人や、自分を守るために必要なら
自分の手を汚します
（もう汚れているし）」

男は美月の答えに対し
『ハハハ
おもしれぇ
とりあえず認めてやるよ
俺を呼ぶときは生半可な覚悟で呼ぶなよ

それでいいなら
俺を呼べ

俺の名は刹那だ』

★―★★―★―★―★★―

癒宇もそして刹那も消え、私と朱夏だけになった。

朱夏が私にこう言葉をかける。

『美月、刹那を試しに使おうとか思わないことじゃな。

刹那はわざと説明を省いたようじゃが、

刹那は諸刃の剣。

少しでも斬るいや殺すことに躊躇いがあれば、自分にダメージが帰ってくる。

本当に殺したいと思った時だけつかえ。

こころするのだぞ』

まるで私のしようとしそうなことを、先読みしたかのような言葉…

いや確かにすこしだけ試してみようかな～とは思ったけどね。

いや永年私とつきあってないね　うん

「わかったよ」

そうして再び美月の意識は遠ざかっていった。

そして自らの心の世界から現実の世界へ…

―――――――

その一瞬高まった霊圧の強さに、

隊主室にいた、八番隊隊長享楽　春水や同隊副隊長　伊勢　七緒　、

そして離れた一番隊にいた隊長山本元柳斎重國が

その部屋に集まる。

前者2人は、先ほど美月に大した霊圧がなかったからの驚愕で
後者はその霊圧の根っこがよく知るもう居るはずのない者に似ていたため

そして、霊圧はおさまり、もとの抑えた霊圧のに戻った。
そして少女は
美月は目を覚ます。

自分の心の世界から現実へ

あたたかくて冷たい現実の世界へと

「ここどこ?

あなた達誰？」

開口一番の言葉はそれだった。

「瀞霊廷内だよ。
僕は言ったよね。
この子が僕の副官の「八番隊副隊長の伊勢七緒と言います」…だよ」

「わしは一番隊隊長兼総隊長山本元柳斎重國じゃ
おぬしの名前は？」

「私？

私の名前は雛桜美月

生前精霊術師でした。」

その美月の言葉に納得したように笑う山本総隊長。

精霊術師…

同じ精霊術師の血を引くなら似ていてもおかしくないから…。

ああこれで決められたサダメへのトキが遠ざかった…

「そうか。精霊術師か」

隊長格なら精霊術師のさわりぐらいなら知っているし、総隊長は直系5家の名くらいは知っている。
だからこそ嘘ではないと分かった。

「それならいつまで霊圧を下げておくつもりじゃ？」

総隊長がやっと気づくレベルだったので後2人は驚いた。
「あ、はーい」

美月は霊圧を上げる。だいたい死神でいう4席レベルに。

（ハンターの”念”でいうなら、絶からうっすーい纏に）

「これでいい？
山本総隊長さん？」

「（4席レベルか）…それで全力か？」

そうとわれ

彼女は考えた。
＞
本当のこと言っていいのかな？
ぶっちゃけ1割弱くらいなんだけど。
封印状態で…

うんごまかすの決定ー
なんかいやな予感するし

＜

という具合だ
封印状態というのはまた追って話そう。

「さあどうかな」
「ほう　1割のう」

年の巧で読み取られたようで
思わず美月は天然で黒化する…

［天然だから恐ろしいー
バーイ　月　］

「心読まないで（微黒笑）

そうじゃないと目潰れちゃうよ」

はっきりいって恐い。
のだが飄々と

「細かいことを気にするな。
さてどこかの隊の3席にでもするかのう。」

まさに年の功ほどに厄介なものはないのだ…

第二話　対面

隊長、副隊長が集まった一番隊隊主室。

一の描かれた扉が全て集まったと同時に閉じられる。

まあ並の霊力の持ち主なら間違いなく倒れる。

こんな中で決めることになるなんて

メンドクサ（えっそこ？by月）

ハハ　山本総隊長殺してぇ（黒）

二話　　対面　　どこの隊に？

「今日集まってもらったのはのう

今呼ぶ子をどこかの隊の3席にしてもらおうと思ってな」

それに対し

「「…」」

な反応の六番隊隊長：朽木白哉と五番隊隊長：藍染惣右助（なんか胡散臭いｂｙ美月）

「：バカバカしい。必要ない（海依だけで十分だ）」

ある意味海依が好きだなぁと思わせる二番隊隊長兼隠密機動総司令官：砕蜂。

「うちは無理だ。
もう3席は2人いるし」

と十三番隊隊長：浮竹十四郎。

「そんなコトカネ。
人によるね」

というマッドサイエンテスト
いや十二番隊隊長兼技術開発局局長の涅マユリ

「どんな子やねん。
可愛い子なら欲しいわぁ」

と訳のわからない感情を読ませない三番隊隊長：市丸ギン

「うちも無理そうだねぇ
（可愛かったのに）」

残念そうにいう八番隊隊長享楽春水。

「隊長の言う通りね
（結構優秀そうだったのに）欲しかったですけど」

と伊勢七緒さん。

「治癒霊力があるなら、欲しいわね。」

四番隊隊長：卯ノ花烈が。

「人手不足だしどっかの誰かさんがよくサボるから欲しいな」

と十番隊隊長：日番谷冬獅郎が

そう、あの時の少年だ
美月を助けた

「「「あいにく3席が頼りになるのでね（だよ）」」」

と七番隊隊長：駒村左陣と九番隊隊長：東仙要

そして三番隊副隊長：吉良イヅルが

「強ぇのかそいつ」

と十一番隊隊長：更木剣八が

それに続いて副隊長：草鹿やちるが

「剣ちゃんが欲しい子ならあたしもほしーい」

と。

「「どんな子（なのかしら）（だろうね）」」

と日番谷いわくどっかの誰かさんの十番隊副隊長：松本乱菊と

五番隊副隊長：雛森桃が。

「「隊長（マユリ様）と同じで」」

と四番隊副隊長：虎徹勇音と、十二番隊副隊長：涅ネムが

「「俺達もッス」」

と仮六番隊副隊長：阿散井恋次と
九番隊副隊長：檜佐木修兵が。

二番隊副隊長は今回体調不良で休みだ。

「早く紹介してくれませんか。」

と冷たい声で、七緒さんが言う。

「まあいいじゃろ
入りなさい
いや入りにくいじゃろうから8番隊副隊長連れて来てもらえるかの」

そして
彼女こと雛桜美月のもとに来て手を引く。

まあ無駄な抵抗をしつつ

姿を表した。

まず彼女の容姿や格好に皆驚いたようだ。

格好は現世の制服。

年は日番谷隊長よりは年上だろう１３、４歳ほどの年格好

髪と瞳の色は朱。

阿散井より明るくてまた心なしか炎のよう

髪は長くておだんご頭。

顔立ちは可愛くて綺麗だ。

見た目で判断するなだろうが３席に命じられるように見えない。

しかも

全員（何人か除く）「「「「「「「「（それに霊圧を感じない）」」」」」」」」

というように思うのも無理はない彼女が霊圧を制御し、すべて閉じ込めているからある。

ちなみに不真面目にも

「（かわいい子やん）」

と考える市丸に

「（昨日のやつか？
いやでも魂葬したばかりだぞ。
他人のそら似か？）」

とかんがえる日番谷。

「（やっぱりかわいいな。
それに霊圧隠してるのがわかんないよな。やっぱり制御能力はなかなかだよねぇ）」

とかんがえる享楽さんである。

まあ総隊長でさえ違和感を覚える程度しか不自然な点はないのだ。

ふつうどこかに乱れが出るはずだから

ちなみに今感じることのできる霊圧はほぼないに等しく、徒人同然なのだから。

「雛桜美月です。
ほとんどむりやりこのくそじじぃに連れてこられました。
もちろんやるからには精いっぱいやらせてもらうつもりです。」
と怒気を少し孕んだ声でいう。
総隊長は飄々という。
「ほほ
美月そろそろ霊圧を抑えんでもらえるかの。
それに斬魄刀をもってこんか
残さずじゃぞ。」
しぶしぶと美月は取りに行き
斬魄刀を3本も持ってきながら

霊圧を3席レベルへと引き上げた。（赤子をひねるほど簡単よ　by美月）

驚愕の視線が集中する。

それもそのはず。

普通死神は一本

しかも席官以外は浅打のものがほとんどだ。

今現在例外は3人のみ。

今日欠席の二番隊副隊長　如月　海依

三番隊3席　神無月　由宇

4番隊3席　大道寺　皐月

だけ。

しかもその3人でさえ2本。

また、美月が持つ斬魄刀のうちの一本は普通より一寸ばかり長い。
（斬月より少し短いくらい）
（一本は逆に短いが）

斬魄刀の長さは霊圧の大きさ。
しかもここまで霊圧制御がうまいということは、これが限界値だということだから。

「あっ　日番谷君!?」

周りを見回しているうちに、美月は彼に気づき指を指した。

「何じゃ知り合いか?」
「・・・やっぱり昨日のヤツか。
ガキの癖に妙に悟った眼をしやがったヤツ」

「あー　ガキにガキっていわれたくないんですけどー
昨日もさっきもいったけど雛桜美月って名前がちゃんとあるんですー」

でも・・・
隠してたことに彼は気づいたんだ

私のもつ闇に・・・

完全じゃないけど

過去のせいでどこか　自分がつらい目にあって当然と思ってること

に…

だから興味を持った。

そしてその意思の強い瞳も

まぁ

俗に言う一目ぼれってやつに近かったなって、この時を思い出して私は思うな

「ぺいっ

やめんか

日番谷、　雛桜もな」

狐目隊長が言う

「説明してくれへん？

なんで十番隊隊長さんと知り合いなん？」

「昨日　魂葬してもらっただけです。
ちょっとミスっちゃって、大虚　に殺されただけです。私、精霊術師なので…」

「そうやったんか
よかったなぁ」

胡散臭い
うざい

だてに長年、記憶を蓄積していない
生きていない・・・

この人も、裏で微笑む五番隊隊長さんや、一見無表情の色黒さんも怪しいと思ってしまった。

信じてはいけないと

それを感じさせず、美月は言った

「あの　さっきの会話から　2，3，5，9，12、13は嫌です。
歓迎されていないようですし…」

「ほうワシ個人としては、　6，8，10，11のどこかにはいってもらいたいのじゃが」

拒否権はなさそうだし、嫌なところは入っていないとくに胡散くさいあの人たちの隊じゃなくて安心だ。

「できれば体験してから決めたいのですが・・・」

「では6番隊から順に　2日ずつでいいかの・・よいか、朽木」

「わかりました、ついて来い恋次」

「ほら来いよ、あー」

「雛桜でも美月でもどっちでもいいです。」

「雛桜。

・・

俺は、６番隊副隊長代理の阿散井恋次だ。」

「私は、６番隊隊長朽木白哉だ」

じーっと美月が見るのは副官章。

「これって椿
恋次さんに似合わないね。
もしかして隊の象徴？

アハハ
朽木隊長はピッタリだけど副隊長にあわねぇー
だってたしか有名な花言葉”高潔な理性”だよっ
似合わなすぎー」

冷たくて冷静そうなでも
心根は優しいんだろうなと思う目を持つ朽木さん

「うっせーよ」

不器用そうで直情型で猪突猛進そうな阿散井くん

まあ

少しはよさそうかな

おまけ

「人は見かけに寄りませんなぁ」

「…そうじゃの

それにしてもあの子によくにとる」

続く.

第三話　４つの隊の３席体験　輝の救い

第三話　４つの隊の３席体験　輝の救い

ＩＮ六番隊

「今日明日だけ3席としてお世話になります

雛桜　美月です。

分からないことが多いかもしれないが、

よろしくお願いします。」

穏やかに

彼女は笑った。

さりげない動作

一昼夜ではできない振る舞い。

それは貴族出身の多い死神でもめったにみられないものだった。

（ちなみに特にこの六番隊には割合が多い）

「あの　朽木隊長。今日は何をすれば宜しいですか？」

（なんだー　あの変わりよう昨日との違い

同一人物かー！！？）

と思うのは　恋次だ。

「そうだな。この書類をやって貰えるか？

今日中だ」

そう言って渡されたのは、５？ほどの書類の束

（た隊長新人にそれは……あんまりだと…）ｂｙ恋次

（なんだこれだけかぁ）ｂｙ美月

「はいっ

わかりました」

ニコッ

隊員全員が見惚れた。

それこそ老若男女問わず

それほど愛らしく綺麗な若干１３歳とは思えない微笑みだった。

「そうか。よろしく頼む（↑実は結構気に入ってる）」

すらすらすらすら

あの量を僅か１時間半で終わらし

（でも筆って書きにくいね

まあ普通の子よりは慣れてるけどね

呪符とか書いてた時代（トキ）もあるし）

「あ終わりました。

朽木隊長　確認お願いします。」

しばらくして

「誤字脱字も間違いもない。これを四番隊へ
こちらを十番隊へ持って行ってくれ。」

（げっ
暴言隊長のとこっ）

あーあ
昨日の今日でいくの気まずいよなー

うん
悪い人じゃないのは分かるんだよね

ってことでズルズル先延ばしにして先に４番隊に……

ところ変わって４番隊・・・

「（たしか・・・

隊長が卯の花烈　さんって女の人で・・・

温和そうな人だったな。

で、副隊長は　名前は聞いてないけど

背のすごく高い人だったよね・・）

失礼します

六番隊3席（空席だったらしい）の

雛桜　美月です。

書類を届けに来ました」

卯「入ってください」

「この書類どこに置けばいいですか?」

卯「勇音」

副隊長の人が　書類を受け取る

「では　失礼　　卯「ちょっと待ってくれるかしら?」　はい・・

（あれなんか一瞬寒気がしたような・・・）」

信じたくありません

こんな　優しそうな人がどす黒いなんて

卯「あなた　治癒霊力は使えます？」

「あー　たぶん使えます

３本の斬魄刀のうち１本は治癒系ですし」

卯「そう　それじゃ　明日だけでもいいのでうちの隊の手伝いをしてくれないかしら？」

あれ？　疑問形なのに有無を言わさない雰囲気が・・

「く　朽木隊長にお願いしておきます・・・

（話せば　朽木隊長は分かってくれるよ　うん

帰ったら　明日分も終わらそう・・・）」

卯「よろしくお願いしますね」

極端に黒属性に弱い　美月であった。

（あーあ

次は…十番隊か

行きたくないなー

あの時は私むきになりすぎたし

ていうか　霊圧からして　卯月と同じ水とか氷に関係ありそうよね

副隊長はたしか　巨乳美人さん　だったよね）

とか考えているうちに十番隊隊首室前まで来てしまった・・・

はぁ

「（副隊長だけだといいなぁ――――――）

六番隊３席の雛桜　美月です。

書類を届けに来ました」

「入れ」

うわぁ
いるし

「失礼します。書類はどこに置けば？」

さっきも思ったけど

悪い人じゃないのも

怖い人じゃないのも

冷たい人じゃないのも

分かってる。

彼の霊圧は、どこまでも冷たいと感じるけど、

普通はそうかもしれないけど

どこまでも　廣くて広くて　そういうなら冬の蒼穹（ソラ）で氷空（ソラ）。

優しくて、　どこか温かい

そんな　内面が感じられる。

まぁ　これは　永い永い活きてきた時間があるから分析できるって

いうのもあるんだけど・・・

だから　ムキになってしまった私が恥ずかしい

「ここに置いてくれるか？」

「はい」

ここ　というのは、隊長の机の上

今言わなきゃ　さらにいいづらくなる

そう思った私は

「ああのっ

昨日は　すいませんでしたっ

失礼な態度をとってしまって・・・」

「いや　いい　あの時は俺も大人げなかった」

大人げなかったって・・・・（呆れ）

この見た目で言われても

言わないけど

よかった　　彼に許してもらえて
“私”は決して赦されない十字架を背負っていると忘れそうになる。
前世の“私”が犯してしまった罪を

「あのっ　それで　「ちょっとお茶して行きなさいよぉ」・えっと
副隊長の「松本乱菊よ　よろしくね」ははい」

明るすぎる気がする。
嫌いじゃないんだよ
苦手でも　ただ少し弱いだけで
そういう間に　引きずられていく私

「美月　って名前だったわよねぇ。
茶菓子はいる?」

「ははい（ないに比べたら）」

「いいのよぉ　敬語なんて」

「う　うん」

約1時間は足止めされてしまった

日番谷隊長も忍耐強いよな

「すいませんっ朽木隊長。

あの乱菊さん　松本副隊長につかまってしまって……

それで　卯ノ花隊長が　明日私を借りたいといっていたのですけど・・・」

「かまわん　行け」

「あ　ありがとうございましたっ

じゃあ　明日の分もやっておきますね」

感じのいい笑顔を　美月はしていた。

かなり　朽木隊長は美月を気に入ったようだ

本人は気づいていないが・・・・

仕事ができる

早い

気遣いができる

まぁ　関係ないが容姿端麗で驕らないので、

隊員たちにも好かれている

・・

本当の副隊長が、意識不明で今現在

阿散井恋次が代理を務めているが

彼は　あまり書類作業が得意でない

そのため　すこし　たまりがちで
定時過ぎまでかかっていたのだが
今日は　早く終わったのであった。

次の日

「やっぱり　朽木隊長許可してくださったのね。」

「（やっぱり？）はい　今日一日頑張りますのでよろしくお願いします」

「今日は3席が休みの日ですから
私か　勇音に聞きたいことはいってください」

『患者が多数来ました

虚により、負傷。

すべて　十一番隊です。』

まわりの　隊員が嫌がっているのがわかる

なんでだろう？

「１１番隊……なら美月一緒に来てください」

「はいっ」

怪我をした隊員の前で言う

「やってみなさい
１１番隊だからかまわないわ」

黒い
黒い

まぁ　いっか。

めんどくさいから　霊力でなくあれで

「《キュア》」

傷は跡形もなく消えた・・・・・

「今のは…治癒霊力ではありませんね
何をしたのですか?」

「うん？

ここまで　略式なのは私だけだけど、

傷の周りの空間を隔離して、時間を戻しただけですよ」

「すごいですわね」

別次元だ

彼女の使う能力はそんな簡単で容易なものではない

同じような一族でも術式はある

だが、時間や空間に関するものは複雑怪奇

みっちりそれについて研究した者でさえ、数分戻すのがやっと

また空間を隔離するなんて神業なのです。

使えるとしても陣や複数人数もしくは道具は必須なのです。

「そうだわ

こちらに来てくれますか？

貴女ならあの患者を助けることができるかもしれませんわ」

私が・・・？

私が誰かの助けになるなら何でもする

だから

ついて行った。

連れてこられたのは、姿形は自分より数歳上に見える女性が横たわる部屋。

「あの・・この女性は？」

見たところ、外傷は適切に治療され、もう治りかけている。

「この人は今あなたが体験している六番隊の本当の副隊長

青木　輝（ヒカル）です。

約半年前、誰かとの諍いで腹を刺されてヤマはめけましたが、

精神的な傷が深いようで眠ったままなんです。」

「そうなんですか」

閉ざした心

私にはいや“私”は知っている。

実際に　心が軋んだことも、閉ざすことも知っている。

だから・・・・

「私倒れると思いますけど・・・

何の問題もありませんので・・・」

「なにをするつもりです」

私は、そういいながら輝に近づき、

額に手を置きながら

「こうするの　《インナーハート（心の中）へ》」

人の精神世界へ入るための言霊

まぁそれと同時に連鎖して頭に様々な術式を頭に描きださなければならない。

そして、他人の精神を受け入れるだけの器も必要だ。

ドサッ

私は　彼女の精神世界へと降りて行った。

斬魄刀がいる世界は精神世界の一部である

それだけがすべてではない

そこは真っ暗な暗闇であった。

あたりは歪み、1点の光もない

「ついた
ここが輝さんのインナーハート

輝さん　聞こえる？」

『誰っ！？

私の世界に踏み込まないで

どうせ　私なんか必要ないんだからーー』

「（おちついて　彼女の心を感じるんだ…）」

〈〈〈〈

いつもいつも私を殴り蹴り暴力をふるった両親

気味の悪い　オレンジ色の瞳

気味の悪い、力

私の体に残った煙草の焼痕

残ってしまった青あざ

それでも私は死にたいとは望まなかった

だって　大切な大切な　私の妹

私が守って守って守り続けたもの

持ってしまった

私と同じ異能

それを隠し続けて　妹使ったのを私が使ったことにして

いとしい愛しい私の妹

最後に私は両親に殺された

守ったことを後悔なんてしてない
でも私が堕とされたのは

南流魂街８０地区　荒神

そこは　地獄だった
血濡れで、赫にまみれた世界
私は世界に必要とされてなんかいなかったんだ
ひっしにひっしに　私は這い上がった
そして死神になった
私が生前から持っていたのは霊能力の一種と知って私は安心したんだ
ああ　私は“化け物”なんかじゃなかった
そう思った
大切な人ができて
私なんかを好きだと言ってくれる人ができて
幸せだと感じたの

でも　それは仮初の幸せだった
私を襲った絶望
彼がほしかったのは　肩書き
副隊長の恋人という肩書
愛してなんかいなかったんだ

要らない
いらない
イラナイ
こんな世界要らない

＼＼＼＼

哀しい
悲しい
憎い
痛い

イタイ
カナシイ
世界がいらないなんて思いなんて私は
いや
“私”はよく識っている
大切な“妹”を殺されたとき
大切な“朋”を亡くした時
両親が“私”達双子を殺したとき
世界が神が“私”たちを見捨てたとき
この手が赤く染まったとき
世界は、綺麗なだけじゃない
景色がきれいじゃないなんていうつもりはない
世界は醜く汚く穢れている
それは“私”が“私”達はよく識っている
人間は　醜く、欲深く、傲慢で、嫉妬深く、弱い

だからこそ　自分と違うものを排除しようとする
ヨーロッパでの魔女狩りしかり
学校でのいじめしかり

それは　仕方がない
でも　それだけではないことも識っている
人の情、愛を
時にそれは権力に押しつぶされてしまうものであるけれど

「輝さん・・・
いつか、あなたのことを思ってくれる人とも会えるわ　（“私”でも出会えたのだから）
淋しかったんだよね寂しかったんだよね
苦しくて憎くて悲しくて
でもね　貴女だって私だってこの世にたった一人しかいない大切な人

【私なんか】なんて言っちゃダメ

屑なのは貴女を利用して捨てたその男

ねぇ、殻を割って外を見てみなよ、おいてごらんよ

貴女は一人じゃない

憎しみで支配されそうな自分が醜いなんてそんなこと思っちゃダメ

いいの　憎しみを持ってたって

人は　自分の中の昏い感情と闘って

そこにあるんだからね

貴女はひとりじゃない

私がひとりにしない

私は味方だから

それに　朽木隊長も貴女を少なくとも副官として信頼してると思うわ」

『なんで　なんで

あんたはそんなこといえるの！！？』

「昨日ね一日だけど六番隊の3席をさせてもらったの
阿散井恋次　という人が副隊長の代理をしていたわ
でもね　正式な副隊長はあなただと聞いたわ
意識不明になって半年たつのにね
ふつう　信頼してない人をそのままにしておかないわ
朽木隊長はそんな人よ」
『そう・・・ね
朽木隊長はそんなことを』
「必要なのは　一歩ね
勇気をもって・・・・・・
さぁ　私の手をとって」
そして
二つの手が重ねられた

『ありがとう』

別に記憶を改竄することもできた

でも、経験はすべて　心の力だ

普通の一世分の人生程度は

――――――――――――――――

私は目を覚ました

「っ」

少し頭が痛い

倒れた時に打ったかな

「ん　卯ノ花隊長？
　ここは・・・」

輝さんも目を覚ました

「おはようございます

青木副隊長

ありがとう

雛桜3席」

「おは・・ん？　雛桜3席？？」

「【はじめまして】

今、体験で六番隊3席をさせてもらってる　雛桜　美月です。

」

「この声・・・

あの時の・・・

ありがとう　美月ちゃん」

「いえ　私の経験が豊富なだけですから・ね」

オレンジ色の瞳を輝かせて

やわらかく笑った。

第四話　４つの隊の３席体験？　そんな彼女の実力の一端

第四話　４つの隊の３席体験？　そんな彼女の実力の一端

～ｉｎ八番隊～

「今日明日お世話になります

雛桜　美月です。

よろしくお願いします。」

苦笑いしつつ言った

顔が引きつる。

前来た時も思ったしかしここはこないだとは違う仕事のための部屋の隊主室

なのに、なのに、

何この部屋

お酒臭すぎっ

いかん　なまじ五感が普通より鋭いばかりに・・・

これは　キツイ

いや　普通よりは強いよ　酒に

でもその私でも　匂いだけで酔いそう

聴覚なら　いつも通りリミッター代わりにゆるい耳栓をするんだよ

いや戦闘時は外すけどね

目は生前はカラーコンタクトに度を入れて見えにくくしてたけど

今　すごく見えすぎて　時々目が痛くなるし…

「気を抜いてていいよ

美月ちゃ～ん」

駄目だ　この人からぷんぷん匂ってくる

この人実力はあるんだろうけど駄目大人だ

典型的な自堕落な

完全無視だ

「伊勢副隊長。
今日は何をすればよろしいでしょうか？」
「ごめんなさいね。
隊長
が全然仕事をしないから、ほかの隊に比べて仕事が多いのよ。」
「そんなのかまいませんよ。
それにそれは伊勢副隊長のせいじゃないんですから
伊勢副隊長はすごいです
悪いのは全部
隊長
なんですから」
「ありがとうね　美月ちゃん
それもそうよね　貴女に任せたいのはこれだけあるのよ」
渡されたのは

８?程の書類の束

青木副隊長が長休暇をとり、増えていた書類量の１．５倍以上

「わかりました

伊勢副隊長頑張りしょうね」

筆を握り腕を遣う

その仕事は的確かつ正確

きれいな文字

筆を使い始めていやシャーペンや鉛筆に慣れた現代の人間がすらすらと

たとえ前世の“私”が筆に慣れる生活をしていたとしても

２時間後　無事に終了した

「これでいいわ　休んでて」

そういわれても、ほかの人の墨汁を補充したり、書き損じの書類を書き直したり

気を利かせ定時までそこから離れることはなかった

その日の定時後、美月は自室に戻ろうとした。

その帰り道で

きゃっ

女の子の少し驚いたような声が聞こえた。

「……大丈夫？って

五番隊副隊長さんじゃない」

「あれ？　こないだの・・・

「今は八番隊体験中の雛桜　美月ですよ。」

そうそう

あっ　私名前教えてなかったよね

私、雛森　桃っていうの

貴女　この間しろちゃんと言い合いしてたよね

仲悪いの？」

「しろちゃん？」

「あ　いっけない
　日番谷隊長だった
　よく幼馴染のころの呼び方で読んじゃうんだよね。」

「仲・・・いいんだ」

　ズキンと痛んだ気がした
　身の覚えのある痛み
　かつて“私”がある時は太陰にある時はウィンリィに感じた感情

？嫉妬”

　そんなわけあるわけないと
　思った
“彼女”達の中では1番恋しているといえる（ほぼ同じ）美月ではあるが
　数多くある前世の中で
“一目ぼれ”なんてしたことがなかったから

そんな感情は、

ないものとして扱った

まぁ　そういうわけで

八番隊はほかに言うことはないかな

ｉｎ　十番隊

「雛桜　美月です。
　二日間よろしくお願いします」

目上の人に敬語を使うことは美月にそれこそ魂の底まで染みついている。

「あぁ　よろしく頼む。
　とりあえずこれだけしてくれ」

渡されたのは5～6?程、六番隊より少し少ないくらいの量の、書類。

「これだけですか?」

(それだけでも多いわよ　by乱菊)

「なんだ?
　もっと増やしてほしいのか?雛桜」

眉間にしわが増える

「いえ、八番隊や六番隊に比べて少なかったし、乱菊さん・松本副隊長はあんなに多いのに…」

「享楽と一緒にするな。あんな女好きで仕事に関しては無能なあいつと・・・・・・・

松本の場合

あいつがサボりまくるのが悪い。

それにあれでも、締め切りの近い奴は

俺が取り出してやってる
松本の自業自得だ。」
見事ばっさりと言い捨てた。
「そうですか
乱菊さん　これ終わったら手伝いますよ
仕事送れるの困るし
」
私は手伝うといったが、
私自身限っていうなら決められた仕事をしない人は最低だと思うし、自分の決められた役割や責務を果たそうとしない人は最低だと思う
もっと最低なのは仲間を見殺しにすることだけど・・・
上の立場に立つ者は、
自らの感情を捨て去ることはなくとも
それに流されない心が
下に与える心が必要だから

上は下を守るものだと私は思う
下は上を守らずさっさと逃げてほしいとも思う

たとえ最低と言われようがそれが私だから

人の上に立つということは、決して簡単なことじゃないのだから

まぁ

少々厳しいまた呆れが入った思いを持ちながら

自分の仕事を終わらせた

「日番谷隊長点検お願いしまーす

乱菊さん　手伝います」

と残っていた三分の二ほどを取った

（↑もうこの辺で書類仕事に関しての乱菊さんの根気は見限った美月であった。　はあ　）

それに美月が取り掛かろうとした途端

「五番隊副隊長雛森桃です。入ります」

「雛「桃ちゃん。何か用？」」

さらに日番谷の眉間のしわが増す。

「昨日は美月ちゃんが遊びに来てくれたからね

今日は乱菊さんや美月ちゃんとおしゃべりしようと思って仕事終わらせて来ちゃった」

ただ今　定時４時間前である。

少し　私はその発言が気になった

が、五番隊隊長の言い知れぬ不気味な雰囲気や、気配を思い出し彼のそばにいるよりはと思い直した

「たいちょーうぉ

いつも　怒ってると眉間のしわが増えますよーーーー」

乱菊さーん　余計なこと言わないで

私たちが原因なのに……

ほらほら　しわがさらに増えた

「まぁつもとぉーーー！！！

　てめぇらのせいだろうが」

「日番谷隊長っ

　それあんまりです

乱菊さんだけです。　私ももちゃんも仕事一応終わってるんですよ。

ね　乱菊さん　後で遣りますよね。

私がやらせますし手伝いますので……」

最低限　決められたことはやる

それは義務であり責務。

仕事の中断の理由の一端は自分なのに手伝わないなんてことしない。

まぁそれは　自分より能力が下の人とずっと付き合ってきた“私”と私が学んできたこと

だって人間　私と同じなんて思わないようにしなきゃいけない。

私をすべてわかってくれる人間なんかいない
少しだけでも線を引くそのことで、自分が傷つくことを防ぐんだ

“禁忌を犯した少女”

“世界を滅ぼしかけ，朋を殺しかけた少女”

“無力な少女”

“化け狐の子の孫”

“暗殺者”

“偽善者な偽聖女”

朋以外に味方なんて味方なんて

数えるくらいしかいなかった

朋でさえ　最初敵の立場の時があったのに

どうして完全に信じられる？

あああああ

もう　ネガティブに走った

目の前では、少し涙目になりながら日番谷隊長に頼み込む雛森副隊長

日番谷「わかっ

≪日番谷隊長！　松本副隊長！　雛桜３席！

あっ　雛森副隊長もいらっしゃったんですか

≫」

やはり　桃ちゃんも副隊長

さっきまでの顔が変わり、副隊長の顔をしていた。

≪　大虚（メノスグランデ）が数体と巨大虚数十体が発生！！

場所は北流魂街８０地区　更木。

ただ今、下級席官が向かっていますが時間の問題でしょう≫

「わかった。すぐに向かう。
松本、雛森行くぞ。
雛桜は、残っていろ。」

「っどうしてですか！！」

「お前は虚と戦ったことないだろうが
お前は死神になってからまだ数日しかたっていないんだ絶対に待ってろ！！」

私はその言葉を聞いて、思った。

今の私には力がある
守る力も
闘う力も
癒す力も
力があるなら使いたい

でも、日番谷隊長は私を心配してくれている。

でも、

「絶対にそれは聞けません

虚の相手くらい

生きてきた年数マイナス４年くらいはしているし。

闘うこと慣れてます

今私は死神です。

力も

斬魄刀もあります　行かせて下さいっ」

日番谷隊長は　ため息をつき、

「分かった。　でも死ぬなよ」

「当たり前ですっ」

私は、　一番長い刀―身の丈より短いが、長い―＜刹那＞を置いて行った。

～現場～

「あっ　日番谷隊長」

「被害の状況は？」

「下級席官が応戦していますが、重傷者が1名、軽傷者多数です。
今　四番隊に要請するところです。」

「（それくらいなら）
その必要はないわ」

「なぜですか！？
雛桜3席っ」

「重傷者は1人なんでしょ
今私が治す」

そして　私は癒宇を　1番短くてナイフより少し長いくらいの斬魄刀を取り出す。

ちょうど短刀といえる長さかな

「ちょ　何してるんですか」

私はその声を無視して（だって論より証拠だし）

言霊を　唱える

「“癒せ、　癒宇”」

その瞬間霊圧は上がり、柔らかい光を放った。

柔らかな　翠交じりの白の光を放った

「戻れ　癒宇終わったわよ…「危ない！」

っ」

大虚が私を爪で刺そうとしたのだが、間一髪でよけた。

「大丈夫か」

ちなみに怪我をしていた男を片腕で抱えている

「うん　でもちょっと　頭にきた

この日とあずかっといて」

癒宇をしまい、腰に差している長い刀に（腰に差すと下につきそう）

手をかける。

朱い柄に鍔は羽のような形でこれも色は淡い赤。
それを包む鞘は、紅色。
長さは普通の斬魂刀と同じか少し長いくらい
ちょうど　日番谷隊長と同じくらいの斬魂刀と同じくらいの長さであろう。

「何する気だ。」
「こうするんです。
“炎よ散れ、朱夏”！！」
朱夏は、炎をまとう　朱い炎を
（火力は灼熱。魂をも燃やし尽くす炎。お前は昇華されるしか助かる道はない。）
そうして私は大虚を一太刀で切り伏せた。（隊長たちは雑魚たちを相手していた　始解せずに）
「終わったよ。　日番谷隊長」
「あぁ（なんて奴だ。もう斬魄刀を使いこなしてやがる）」

その日は残業だった

乱菊さん書類ためすぎ

でも　私はどこに行くか決めたので
　十一番隊体験は断った

そして　私は十番隊に入隊することを決めたのだった

番外編　十一番隊初訪問っの巻（前書き）

十番隊に入った美月の初めて１１番隊訪問の話です。

背負うものシリーズ以外は、時軸順です

番外編　十一番隊初訪問っの巻

「雛桜」

「はい？隊長何ですか」

「この書類届けて貰えるか？」

「はーい
えっと

十一番隊かぁ」

（番外編）十一番隊初訪問っの巻

「十一番隊って戦闘部隊で有名だし、

戦いしか　意味を持たない人って嫌いなんだよな

（でも、副隊長は可愛いよなぁ　あと更木隊長には実力ばれたくないわ。

意味のない戦いなんて嫌いだし…）」

等々と十一番隊隊舎前で考えていた。

はっきり言って怪しい

「おいお前うちに何か用か？」

と私に声をかけたのは坊さんのようなツルピカ頭（失礼）の男の人

その隣には頭に翅をつけたおかっぱ頭の綺麗な男の人

「あ　はい　十番隊から書類を届けに来ました。」

と臆することなしに言った

それが気に入ったのか？

「ふぅーん
まぁ、入りなよ。（美しいし）」
中に入って　絶句した。
「えっと　なんですかこれ　えっと・・・・」
積み重ねられた書類の山に散らかったごみ、散乱する酒瓶に垢にまみれた机。
十番隊と違いすぎる（ちなみに綺麗さなら　一　二　四　五　六　七　九　十　十三＜三≫十二≫十一　だと私は今思った）
「僕たちを知らないのかい?君
僕は十一番隊第五席の綾瀬川弓親でこっちが…」
「更木隊三席の斑目一角だ。」
「すいません　まだ他隊までは興味向かないので覚えてなくて（おいっ）

（だって　他隊より今の自分の隊のこともっと細かく知りたいじゃない。

まぁなにを知ったかは秘密だけど…）

十番隊三席副官補佐の雛桜　美月です。」

「あぁ　君があのドタキャンした子かー。」

「はん　あの更木隊長が言ってた。」

「そ・ん・な・こ・とより

いったいこれは何！？」

半月からひと月分はあるぞ――

「それは溜めてるやつだよ――ｖｖ」

私の後ろから飛びついてきたのは、ピンク頭の女の子ー草鹿やちる。

「草鹿副隊長…」

敵意とかそういう負の感情の類は感じなかったから、気配に気づいても気にしなかったけど…

「ひっつんのところに入った子だぁー―ねぇねぇ名前は？」

「雛桜　美月です。草鹿副隊長」

「やちるでいいよーー
美月ちゃん。」

ひっつんってひっつんって・・・・・

爆笑しそう・・・

必死に笑いは堪えたけど…

「じゃあ　やちるちゃん

仕事しないの？」

「えーー　だってゆみちーが私は手出しするなっていうし

たまにでいいって　言ってるよ」

「ちょ　弓親さん

私手伝いますので、今暇ですよね＞断定＜
やりましょう遣りましょう＞より協調＜」

「う、うん（迫力が…）」

逃げようとする一角さんの背に手をかけ、

「逃げないでください（黒笑　ただし無意識）」

「あ　ああ」

「おはようございます」

丁寧な言葉が割り込んだ

顔を向けると、アッシュ一灰一色の髪に黒色の瞳、外人の血が混ざってるように見える男性。

「あれ？

珍しいですね
十一（ここ）番隊に他隊のしかも女性がいるなんて…」

その声のする方向へと私は振り返ったのだった。

（視点移動）

一瞬時が止まったかと思った。

艶やかな朱(アカ)色の髪に瞳。

お団子にするとともに下に後ろに伸ばした髪。

外見年齢は草鹿副隊長より少し上ぐらいなのに

惹かれた

魅かれた

儚げに見えるのに、どこか強い意志の秘めた瞳。

ほっそりとした肢体。

守ってあげたいとそう思った

（視点回帰）

「あ　あのぅ

どうしたんですか？

黙っちゃって…」

「あ　あぁ　ご免

俺は、十一番隊４席をしている　須王修宇。　君は？」

「初めまして、十番隊３席雛桜　美月です。」

それがいずれ零番隊第六席となる須王修宇ともファーストコンタクトであった。

「で、いったい何したわけ？

また副隊長がおいたしたわけ？」

「ぶう　そんなことしてないもん

修ちゃん」

「で、じゃああなたにも手伝ってもらいます！！

ここの仕事今日中に終わらせますよ

半分はわたしやりますから

やらないと　内をはじめ周りにも迷惑ですし」

後のことを聞くと、須王も含め少し顔を青くしたらしい・・・・
中にはあまりのスパルタぶりに悪夢にうなされる者が何人も出たらしい

あの書類の山を鬼気とした勢いで、終わらせたそこには、
十一番隊隊士達の屍が転がっていた
（違っ）

これくらいでへばるなんて、情けないなぁ

（注　今まだ初めて４時間ほどしかたっていません。

その間に　１５～２０日分のいつも２００人で遣る書類を　今いる数十名で終わらせたのである。

まぁ　そのうち半分以上は　美月が終わらせました…

さすがに　美月にも疲労の色が見える↑　普通はその量５日はかかります…　ｂｙユエ）

「とりあえずみなさん１人１人渡したのは貴女土地の能力ギリギリの量です。

みなさんでも　このくらいできるんです
今度たまっていたら私がまたやらせますからね（にっこり）」
黒くないのに怖い顔だったと　のちに某三席は言う。

「おめぇ　すげぇな」
と一角は倒れたまま言う
「これくらいなら　大丈夫ですよ
6歳のころの2学部分の大学時代の論文6年分に比べれば・・・
あれはさすがにウザかった
“私ー サリアー”の知識あの時はなかったし…
一からだったもんね。　一番の記憶の経験が増えたのはよかったけどね…
あっ　一角さん　明日練習試合してくんない？」
そう　話を逸らした
まぁ　一角さんと試合してみたいと思ったのは本当

でも　今そういった理由は簡単
知られたくないから

私の　罪　と　咎

赦されることのないそれ
私という人間の根源

そんな簡単に話せるものでもない

まぁ　詳しくは　言えないがサリアとは、前世の１つ
医師であった“私”。

だって　私は　ここの底から信じることなんてできない
心のどこかでは思っている

私のすべてを受け止めてくれる人などいないと

それを　耳にした人は多かったらしく

その次の日にはほとんどの隊員が知っていたのであった。

当然　日番谷隊長にも届き、

冷たい雰囲気に他隊員たちはびびっていた

まぁ　本人はその理由にまだ自分でも気づいていないが…

斑目さんと私は竹刀をもってそこにいた。

だって、斑目さんはともかく私の斬魄刀は抑制しないと被害が大きいもん。

まぁ　山じい（山本総隊長）のよりは、マシだけどね。

もともと対人よりも対化け物に特化してるし

ただの訓練で神経つかうことしたくないし…

↑

何にも考えずにのんびり戦える（えーーー）し。

気が抜けるときは抜きたい派だし・・・

「手加減はなしでお願いしますよ。
同じ3席だしね。」
「あぁ　分かったよ。
行くぜ」
「いつでも」
バシバシバシ
激しく竹刀がぶつかり合う。
それもかなり高速で
はっきり言って視認できているのは、副隊長であるやちると綾瀬川5席（須王は欠席している）
美月は、積極的に攻撃せず、受け身ばかりだ。
斑目さんは、大ぶりかつ大きな動きだが、美月は最小限の動きだけで攻撃を受け流す。
「はん
避けるばっかりせずにかかってこいよ」

「じゃあ、いきます」

私は反撃するために一瞬だけ今の自分が決めた力の上限を上回った。

普通の3席程度以上の速さで一角の竹刀を飛ばし、首寸前に竹刀を当てた。

実質的勝ちが決まった。

ーーー

場所は～～～～≫

「聞こえたぜ
　行くぜーー　野郎ども」

「美月ちゃんはどうする？」

「いくよ。もちろん」

現場では・・・・・

「だいたい、４、５０体かな。（だいたいＢ～Ｃ級じゃん。）

「美月ちゃん美月ちゃん
　斬魂刀はーー？」

あ」

やっばーーー

隊舎に置きっぱなしだわ

持ってるの、癒宇（いう）だけじゃん

癒宇は、短刀（２０？あるかないかくらい）だから持ち歩きやすいけどさ

これやっていいかな？

いまだに3席がどれくらいできるか測りなねてるけどこれくらいできるのかな？

いいや、やっちゃえ（めんどいし、

ごまかせばいい）

「来い、“朱夏”。」

強い力を込めた言霊を放ち、パシッと手のひらを合わせゆっくりと

美月は開いていった

そこに現れ出たのは

刀

まぎれもない彼女の斬魄刀。

朱い柄（つか）に鍔は羽のような形でこれも色は淡い赤。

それを包む鞘は、紅色。

長さは普通の斬魄刀と同じか少し長いくらい

ちょうど　日番谷隊長と同じくらいの斬魂刀と同じくらいの長さであろう。

まぁ　この時点で人並み外れていることに本人は全く気づいていなかった

普通の死神は言霊は使えないのだから。

「さっ　いきましょうか。

朱夏。

炎よ散れ、“朱夏”」

始解の解号を唱える。

朱夏は、炎を纏い、それで美月は虚をなぎ倒していく。
的確に頭を狙い、誰よりも多く、誰よりも早く、周りを把握しつつ
無駄を出さず。

「全部で（他が倒したの入れて）４６体か。
（十一番隊っていいってもこんなものか。〈ひでぇ〉　結構
普通じゃん
血の気が多いだけで。〉」

「弓親さん、大丈夫でした？」

「当たり前だね。
負傷者に対しても４番隊にでもいえ

「けが人何人？」

聞いてどうするつもりか知らないけど、

１人は重傷、二人が軽傷、まぁ少ないものだよ」

「それくらいなら、呼ばなくていいよ。

私が何とかするから。

どっち？」

すると丁寧にやちるちゃんが連れて行ってくれた

「こっちだよーー」

「ありがとう」

けが人のところに行くとまず、美月は

「大丈夫ですか？」

と意識確認した。

（軽傷者の意識はあるし、全然問題なしと、

重傷者は、意識はないが、呼吸は正常…ね。）

空間系の術を使うまでもないので、（あまり多用すると、その人の体内時間がおかしくなることがあるらしいので）

治癒霊力を使い、軽傷者をさっさと治す。

その速さ正確さは、卯の花隊長に劣らないものだった（卯の花隊長本人曰く）

（重傷者の傷は、

両腕、肋骨、あばら骨、右足など１０箇所の骨折に、？度のやけどか。

一か所一か所治癒霊力でやるのは

ただの霊力の無駄ね。）

そして、懐からせいぜい２０センチあるかないかの短刀‐癒宇‐を取り出す。

「癒せ、“癒宇”」

≪弓親＆やちる視点≫

ｓｉｄｅやちる

とってもやさしい光が、美月ちゃんのいるあたりから出たの。

花ちゃんとか呼ばないといけないかなと思った大けがの人を
あっという間になおしちゃうんだもん
さっちゃん（＝大道寺皐月）やゆーちゃん（＝神無月由宇）、うみちゃん（＝如月海依）と同じで斬魂刀が一本じゃないって噂で聞いてたけど本当だったんだぁ～～
なんで　美月ちゃんは3席なんだろう？

ｓｉｄｅ　弓親

最初に会った時の印象は、不思議な　のほほんとしていて　これで3席なのか　だった。
そのわりにおせっかいで面倒見がいいのか、１１番隊のたまった山脈並の（どんだけ多いんだよ　ｂｙ　作者）書類の山の3分の2以上を1日で終わらせてしまった。
残りは、僕たちに指示してだけど
そのくせ、一角と勝負なんて身の程知らずだと思ったね
一瞬だけ・・彼女の笑いが嘘に感じたけど
それは置いといて

でも、試合は僕の予想を超えていた

一角の攻撃を最小限の動きで避け、一瞬で一角の首筋に竹刀を当てた時は

強いそれに、なんてきれいに舞うように動くのだろう

と思ってしまったね。

まぁ、僕には及ばないけど（ナルシスト）

その上、あの虚を倒すときの素早い動き

また今の治癒霊力

正直なんでこんな人が3席についているのだろうと思ったね

傷跡一つも残さず消し、一息ついていたら

やちるちゃんが、いきなり美月にいきなり飛び着いてきて

（もちろんちゃんとキャッチしたよ～ん）

「美月ちゃんすっごーいーーーっ

なんで3席なんかにいるの？

それも、ひっつーのところで

うちに来てよ～～～」

先ほどの十一番隊隊舎や書類を思い出し、

「いや、遠慮しときます。

戦闘も治癒も自信ありますけど（↑おいおい）、必要以上に振りかざしたくないので

（面と向かって言うつもりないけど、

この人たちは尊敬してるんだし…私はっきりいって更木隊長みたいな人種嫌いだし、

まぁ表には見せないけど

ああいう血に飢えた獣っていうのかしら？

無理。　受け付けない

まぁ、東仙隊長みたいにはっきり態度に出すつもりはないけど）

私平穏好きなんで。それに・・・」

ふと浮かぶのは、隊長の顔

ぶっきぺらぼうだけど、部下思いでやさしくて、

意外と素直なところもある隊長・・・

桃ちゃんといるときにズキッと痛む胸

はぁ

認めざる得ないよね

私自身は初めてだけど、“私”は恋愛したことあるしねl

初対面だからとか通じないしもう、

どうやら最初から私一目ぼれしてたのねうん、自覚と同時に失恋かぁ、

私なんかにはもったいない人だし、桃ちゃんとお似合いだし、でも…

たとえ叶わなくても

「私は日番谷隊長のそばにいたいんです。」

その顔はまさに恋する乙女そのもののような感じで、

頬には少し紅さし、瞳は真剣。

恋した乙女はなお美しいというが彼女の内面の美しさがにじみ出たような、少し儚いがとてもとてもきれいな微笑みだった。

それはどこかはかなさと切なさが含まれていたけど…

聞きにくいことをずばりと聞くのがお子様

「美月ちゃんって、ひっつんのこと好きなの～～～？」

「（あまりに率直な疑問に思わず無言）

・・・・・・・・・・・・・・はい」

「私美月ちゃんのこと応援してるからね！！！！！！」

のちに二人のやり取りを垣間見た一角さんはいう

（いや、あれどう見ても両思いだろうが、

鈍すぎだろ）

おまけ　★

「一角さんって、卍解できるでしょ。
実は私もなんです」

そばにいた弓親さんはあきれたように美月をみる。

「こんなところでそんなこと言ったら、そう隊長に知られる可能性が高くなるよ、あの四十六室に知れたら、無理にでも隊長になっちゃうよ」

「はーーい（四十六室は面倒な存在なんだ。ふーん）」

番外編　現世の記憶（前書き）

美月の一方的卯月との再会です

これも時軸本編月の導きの４話と５話の間＜

番外編　現世の記憶

「あの日番谷隊長、松本副隊長」

「「なんだ（何）？」」

「2人には現世での記憶ありますか？」

現世の記憶

「ないわねー」

「ねぇよ

そもそも現世の記憶なんて完全に持ってるやつの方が少ないていうか少なくともお前ほどのやつ見たことねぇよ

仮にあったとしても、

何百、何十年も前のこと記憶にねぇよ。」

現世での記憶を完全に持つものは少ない。

非常に濃密な記憶を持つあるいは何かの強い力を持つ者
あるいはその記憶を持ちたかったか
まあ全くない者も少ないのだが
時と共に新たな記憶に埋もれていく
まして普通の人間の何倍もの寿命なのだ。
だから尸魂界に来たばかりの者は記憶を多く持つ。
まあ生きていても全て記憶を忘れないわけでもないしおかしくはない
隊長格は少なくとも過去2、３０年変わっていない。
生きていたなら子供が親になるほど長い刻
（例をいうなら乱菊さんにいたっては１００年前にはすでにこの尸魂界にいた）
死神は輪廻の輪に入らず
死ぬことにより生まれ変わる。
流魂街　の人は一定の時が過ぎると生まれ変わるのだが…
それはまた別の話し

まあそんな訳で覚えていられる方が不思議だ。

「で美月そんなこと聞くってことは何か話したいんだろ。

現世のこと」

彼は彼女の美月の少し聞いてほしい気持ちを察したのだ。

そして彼女は話す。

大切な思い出を

「

私は空座町に住んでたの。

２人は知ってるかもだけど私の家は精霊術師の血受け継ぐ直系。

１０００年以上前からね

精霊の力を借りて妖魔や虚を倒したり、半場虚化しかけた怨霊や整の浄化ーまあ尸魂界に送ってた。

でも、やっぱり腐っていくの。

少なくとも私の家、雛桜家はね

強大な力を持つが故にね。術師以外を見下し、傲慢になっていく。

どんなに頭がよくても

どんなに運動能力が高くても

どんなに精霊術以外の結界術や特殊術が出来ても

精霊術が使えなければ全て無駄。

しかも私の家が司る精霊術は炎　つまり炎術師の家系

この力は最も強い破壊力を持つだからこそ他系統の精霊術師まで見下してた。

元々それが私達の力って訳じゃないのに

しかも金や名誉に取り付かれて

庶民の依頼を断るのなんて日常茶飯事だった。

とくに古い考えの持ち主はね。

私のお父様は、頑なに名誉を守ろうとする古参に従ってたの

当主なのにね

多分それは得体のしれない母を後妻とした弱みに付け込まれてだろうけど

私は、古い考えのやつも

いいなりの父も
全てぶち壊したかったんだ。
父は、いうなら古参にとって傀儡にしやすい楽な当主、
そんな父が唯一言いなりにならなかったのが、母を妻にする事らし
いけどそれは置いといて
だってその概念のせいであの子は傷つけられたから
だから家から与えられる任務以外に
自主的にやってたの
そのうちの一つが、霊圧垂れ流しの友人に虚が近付かないようの処理
（なぜかやってなくても妙に避けてたけど……）
それをあの子と
卯月としてたの。」
「卯月？

それは誰だ？」

「雛桜　卯月。

私の双子の妹です。

今もなお生きている・・・」

「美月の一族は死神も見えるんでしょ？

どうしてあなた、会いに行こうとしないの？

それどころか、現世任務に極力行こうとしないでしょ。」

「だって・・会えるっていっても死神…死人としてだし、

私が死んだ日ね、隊長は知ってると思うけど私　一人だったでしょう？

あの日は、卯月の都合で、私一人で虚をおびき寄せて、へましたんだけど

いつも背中合わせで戦ってるから後ろの注意怠っちゃたのよね。

2人であの日戦っていたら絶対私は死ななかった。少なくともあの時はね。

だから　今の私をあの子が見たらきっとショックを受けると思うの

よね。」

もしかしたら、それで記憶を取り戻しちゃったのかもしれない

それに　後を追ったかもしれない。

私は　　怖い　　んだ

あの子のためとか言いながら、

過去の“私”の罪を思い出されるのが

しんだ彼女を見るのが、

そして逆にしんだ私と生きてる彼女の違いを実感するのが…

だって私は置いてきてしまったから

≪また≫

強いようで精神的に弱い彼女を

まあ　私も精神的に強いとは言えないけどね

だって私も“私”も置いていかれることへの絶望と辛さをよく
知ってるから

「友人のため…か。

他人のために死ぬのもお前らしいよな

でも、その友人のためにそれをやってたこと後悔していないんだ
ろう。

やさしいな　おまえは」

違う　ちがう　チガウ

私は優しくなんかない

汚くて、醜くて　人間らしい人間だ。

嫌われるのが怖くて

過去を知られるの怖くて

他人を完全に信じることが怖くて

失うことが怖くて

一護のことだって私はただ、身近な人に死んでほしくなかっただけ

卯月が少しでも悲しむのを防ぎたかっただけ

一護のためじゃない

だって、結局私は卯月のいえ、自分のためだっただけ

そんなの私のエゴ

はっきりいって私は一護とは私あまり仲好くなかったし（幼馴染ではあるが、苦手だった。）

最後の3年くらい惰性だったし

だって　絶対私は、卯月と一護なら、たとえ一護が死ぬことになっても

卯月を真っ先に選ぶと思うから・・・

（ごめんなさい　私の中の美月さんはこんなかんじで　朋と卯月至上主義です。

朋&卯月≫愛する人や自分が認めた仲間≫≫越えられない壁≫≫自

分≫≫≫絶対的境界≫≫≫敵

でも、彼女はこう思っていますが、他人が傷つくより自分が傷つくほうがいいと考えがちなので、やはり

やさしいですよね　　ｂｙ　ユエ）

「・・・・優しくなんかないですよ

私。　だって　妹が卯月が悲しむほうが私はずっといやだから。

妹と友人なら絶対妹選んじゃいますし。」

「誰だって優先順位があるのは、心がある人間なら当然だろうが

人の心を考えられるその時点で冷たくなんかないだろう

それが誰かのためにせず自分のためだと言える時点で十分おまえは優しんだよ」

涙がでた

急いでそれを隠したけど

優しいのは隊長のほうだよ

私なんかまで優しく覆ってくれる

隊長には桃ちゃんがいるのに

勘違いしちゃうよ

「お前はもっとわがままに自分の気持ちに正直になったほうがいい
松本」

「はーい。

斎藤４席ぃ　少しの間私たち抜けるわ

仕事は終わらせた（ほぼ、美月と日番谷で）から」

そううちの隊の４席・斎藤　一に言い、

「よっぽどの指令じゃない限り呼ぶなよ（冷たい霊圧）」

一体全体何なんでしょう？

「行くぞ。　松本、雛桜。

・・

任務だ。」

仕事熱心な美月はなんの疑いもなしについていく

「はい」

松「はーいｖｖ（確信犯）」

そして現世に向かった

ちゃんと十番隊担当区間だと信じて

もちろん限定印は押したよ、私はなしだけど

でも。降りたったそこにあったのは見覚えのある風景。

数か月では変わり映えのないそこは

「た、隊長ぅ

ここ空座町じゃないですか～～

ここ十三番隊担当区域でしょ

だましたんですね

わたし帰ります」

穿界門へと引き返そうとした私をガシっとわしづかみするのは、乱菊さんだった。

「やっぱし、松本副隊長もグルですかぁ～～～～！！」

離せーーというようにもがいているが全く力を入れていないし、本気で嫌がってもいない

「おとなしく　妹の特徴を教えなさい」

「ううう

はい

（本当はだれかに無理矢理でも連れだしてほしかったんだ。

会いたい気持ちもホントウだから）

でもその前に行きたいとこあるんですが・・・」

そこは・・・

私の　最期の場所

そして初めて日番谷隊長と出会った場所。

「ここで　死んだんだよね　私」

もう血の跡も、匂いも何もそこには残っていない。

戦った時の霊圧の痕跡さえ

そこに貼ってあったのは通り魔事件の張り紙

「私が虚に殺されたの、通り魔の仕業にしたんだ。

まぁそれしかないよね」

哀愁に浸っていると懐かしい懐かしすぎる霊圧が1つと薄い薄い霊気が近くまで来たことが分かった。

「ちょっ　隠れて、霊圧消して」

慌てて私は隊長と乱菊さんの手を引き隠れた。

そこを通りかかったのは、すごい量の霊力を垂れ流しにするオレンジの髪の少年と

薄い薄い普通の人間レベルの霊気を漂わせる藍色の髪をポニーテールにした少女

だった。

「なんだ?この霊圧・・

　垂れ流しすぎだろ」

そうなんだよね

　はっきり言ってあの霊力うざかった

本気でうざかった（黒）

それだけ蛇口が弱いんだよって思った

（すんません、一護の扱いひどくて、
だってあんまり好きじゃないんだもん
ｂｙユエ）

ていうか　年追うごとに増えてるし量

ていうか、感覚鈍ったかな？

卯月の霊力感じたん・・あ

見間違うのも無理はない

嘘のように覇気がなく

生気が薄い　少女

（そういや、“私”が力ある世界で、“私”の方が早死にするの
初めてだっけ？

ここまで取り巻く雰囲気が変化するなんて・・・）

浮かべている微笑みはまぎれもなく、偽り嘘のもの

まぁ、あまり彼女を知らない人間ならだませるうまい仮面

わかってる

さっき私が感覚が鈍ったかと思ったのは

信じたくなかったから

私の死がこんなにも彼女を変えてしまっているだなんて

その反面わかるにはわかるんだ。

だって逆でも同じことしたと思うし

改めて思うんだ

ごめんなさい　置いていってしまって

でもよかった　まだ記憶思い出してないね

あんな記憶なるべく遅く取り戻したいし

松「あの女の子。

目元とか霊圧の感じとか美月ににていますね　もしかしてあの子?」

「…　はい」

「美月が、双子の姉が死んでまだ2、3カ月だって言うのに、全然悲しんでいないじゃない（卯月さんの仮面はうまいです）」

憤るように言う乱菊さん。

私は、卯月が薄情だとは言われたくなくて乱菊さんの言葉を訂正しようとした

そのとき

「松本、悲しみを隠すのがうまいやつだっているんだ

見た目で判断するな」

大切な妹をかばってくれた

たとえその気がなくても

うれしかった

たとえそれが、彼の昔の記憶と照らし合わされて言われた言葉だとしても

一護と別れると、とたんに仮面が崩れた

「美月・・・・

美月ぃ

ごめんなさい　ごめんなさい

私のせいだ

ねぇ　本当にあなたの魂はもうどこにもないの？

虚に　食われてしまったの？

答えてよ

答えてよ　美月ぃ」

まさにそれは　悲しみの慟哭だった。

卯月の瞳からあふれ出る涙

必死に、私は　自分を抑えた

そうじゃないと飛び出して行きそうだったから

魂の双子の間には

生と死の　絶対的な壁があった。

だって　一緒に過ごすことはもうできないのだから

一通りなき終わると

「駄目だな

私

いつまでもイジイジしてそれこそ美月に叱られるよね。

死したものにこだわるな

とか

そんなに悲しいなら忘れて・・・とか

でもね美月。あなたは私の半身なの

たとえ　道が分かれてしまっても」

強がりだということは

分かった

わかってしまった

でも　その言葉に励まされた気がした。

「いいのか？会わなくて」

「うん」

美月の瞳からも涙が次から次へと流れていた。

「美月がここにいないことは知ってる
でも、私はここと、あなたの眠る場所だけでは
弱い私でいさせてね
美月はなんでも抱え込むから、気をつけてよね」
卯月に拾われないような小さな声で言う
「それは　卯月もでしょ」
似すぎる二人の性格であった
「いっけない
今日仕事はないけど任務があったんだっけ
急げーー　あと5分」
相変わらず無理した表情ではあるが、
さっきよりはるかにすっきりした顔で
走って行った

すごく素早く
死神の瞬歩に劣らない

ちなみにふつうに帰ると、１５分ほど

それに美月はついていく

「最初はいやだって言ってたくせにねぇ」

「それはそれです

見ると
少しは成長してるか見たくなって

（私という後ろ盾なしの家の反応も）」

そしてついて行ってたどり着いたのは

雛桜家の目の前

そこで私は待っていたが

揺れる卯月の霊圧で

何も　この家は変わっていないのだとはっきりと自覚した。

しばらくするとまた卯月が出てきた。

持っていたカバンなどは手になく、代わりに肩下げのショルダーバックを付けている。

まぁもちろん両手がふさがれないようにの処置なのだが、

美月は懸命に自分の気配を消す。

霊圧を無にし、存在感をゼロにする。

（ハンターで言う絶、である。）

そして卯月の後を追う。

どうやら今日は比較的近場のようで、車ではない。
まぁ、車を使うのは車で1時間の距離以上からぐらいであるが・・・

（遠っ）

夕闇がかっているので、彼女は急ぐ。
あらゆる建物の上を飛び越し、走り、疾走し

ついたのはとある古い神社の前

「うわぁ

ひとけがないなここ

でも、ＴＶでにぎわうような神仙疑うところより小さな祠とかのほうがよっぽど力持つ場合もあるしね

まぁ、神様はいい意味でも悪い意味でも神様でしかないしね。

さってとここでよかったよね。

依頼状読んでなかったし、今読もううん」

物陰からは

小声で

「おい、お前の妹抜けてないか？

ふつう状況とかは把握してから来るだろ」

「あはははは、私がいた時は2人での任務だったから私が一回目を通してそれを卯月に簡単に伝えるって感じだったしねぇ。

でもさらに、ボケボケになった気が…」

読み終えた卯月は

「なんだ、ただの浄霊（ジョウレイ）か。

除霊でもいいらしいけど、こっちは簡単だけど問答無用の魂の消滅だしね

っ」

言葉を唐突に止めた卯月。

彼女の様子は気になるが少し話しておこう

除霊は、霊を取り除くことであるが、これは霊に関する配慮なしなので、その霊は魂を消滅するか大きな損傷を魂に受ける。

これをするのは、未熟な術者か、あまりに凝り固まった悪意の念が強い半場怨霊化したどうしようもない時である。

なお、霊子は残るのでそれは器子に変換するか、尸魂界（ソールソサイティー）に送る。

まぁ術者の種類によって（まぁ言及はしないが）　これしかできないときも多々あるが。

対する浄霊は、魂の穢れを浄化し、虚の場合は罪を洗い流し尸魂界（ソールソサイティー）に送る。

では卯月に視点を戻そう。

「気のせいだと思いたい。」

浄霊のため、精霊の声に耳をすませる。

もし精霊の見える者がいたのならこの膨大な数を統べる彼女に驚くであろう。

数百数千数万、この世界の精霊は、五種類に分かれる。

炎　水　地　風　雷

そして、それを操るものを精霊術師という

たとえば、マグマなら、炎2に対し、地8のようになるし、水蒸気なら水9、空気1のような割合でその精霊が存在し、

この混合物はより強者が操れる。

例をあげるならば、マグマを同力量の地術師と炎術師が争えば、地術師に分があり

炎術師がそれを上回るなら、はるかに力量は上だということである。

ほかの話はとりあえず置いておいて

卯月が操る精霊は、水。

「げっ　虚が２０ほど出てきそう。」

「≪ピーピーピー≫」

指令機が鳴り響く。

そして、その通りの虚が出現した。

「隊長、乱菊さん。
大丈夫ですよ。
私たちが相手しなくても」

そう美月は言う。

「なんだ、雑魚か。」

卯月は出現した虚を見ながらそう言いその手に一瞬して氷の矢を作り出す。

もちろんこれは精霊術である。

水術師の彼女にとって水や氷、雪、水蒸気
どれも操るのが容易なものである。

同じく氷の弓で、的確に矢を放ち命中させる。

もちろん狙うのは虚の頭。

自分に何一つ傷をつけず、土埃一つ体を汚さず、周りの神社などの建物や木々にまったく被害はない。

その間わずか、1、2分。

「いつまで倒れたふりしてんの？

気配であんたが2体が合体した姿だったってわかってんのよ

下だったあんたは倒されて（死んで）ないでしょ

〈うまそうなその魂を喰わせろーーーーっ〉

グサっ

氷の矢はそれの頭と腹を貫く。

「悪いけど虚には手加減しないから」

瞳に冷たい怜悧な光を宿して彼女は言った。

・・・

唯一の例外である卯月
水の力はわずか1年以上前に発現し覚醒した。
だからそれまで、無能者と言われ
炎で腕を焼き、
背中を焼き、
集団でリンチした。
あれは、いじめなんて軽いものじゃない
迫害よりも強い
殺人未遂だ
恐ろしかった
少しだけ
自分たちの無知の罪も知らないあの子たちが
血がつながっているだけで恐ろしく感じた

“私”のことを思い出す前だったからなおさら

思い出してから思うのは、哀れだと

ただそれだけだ

もう私にとってどうでもいいものだから

嫌いな相手に割く時間はもったいないと私は思う

卯月は行きと違いゆっくりと帰っていた。

まぁ少しでも家に帰るのを遅らせたいのだろう

その帰り道。

「おいっ

　馬芝中の雛桜　卯月だな」

ガラの悪い連中が、卯月を引きとめた

「そうだけど、何か用？大勢お揃いで」

そうすると口々に、〈男女入れ混ざっている〉

「あんたのせいで、うちの彼氏全治５カ月だってよ」

「俺の連れにずいぶんなことしてくれたな」

「私のところなんて後遺症が残るかもって」

ｅｔｃ

「はいはい。

うるさい

　ていうかどれのことかわかんないんだけど

私は理由なしに手出ししたりしないよ

向こうから手ぇ出したか、しつこかったからじゃないの？（美月が死んで喧嘩ばかりの時も理由なしにはしてないし）」

冷静かつ反省のかけらもなく、恐怖もない卯月に腹をすえかねているのか、

一気に卯月に襲いかかる。

ここからは一方的かつ一瞬だった。

一人ひとりの急所を的確につき

　意識不明の重体もしくは、気絶状態にさせて行った。（微妙に男のほうが対処だひどいが、そこまで変わらない）

↑↑確実に過剰防衛

最後の一人のとき
　気を失う前に

「さすが、？瞬殺の戦姫〃ね。
ところでもう一人の？微笑の戦姫〃はどうしたの？
最近うわさも「うるさい」グハッ」

卯月の雰囲気が変わった。

「あんた達なんかがその名を口にしてみろ

　堕とすよ、下に」

鋭い殺気が一瞬放たれたのであった。

「おい、？瞬殺の戦姫〃とか？微笑の戦姫〃
とかなんだ？」

もちろん隠れたままで、日番谷隊長が聞く

乱菊サンは今の卯月の動きに感心している。

「あぁ、生きてた時の私と卯月の通り名みたいなもんかな。

しつこい男とか今みたいに容赦せずにしばいてたし

たしか、卯月のほうは、一瞬で笑いながら相手をＫＯするからで、

私のほうは笑いながらそれを眺めて弱いと狙えば返り討ちにあうから

らしいわ　　戦姫ってほどじゃないと思うんだけど」

「「（怒らせないようにしよう）」」

そして私たちは帰って行った

ーーーーーーーーー

ｓｉｄｅ卯月

今日放課後から妙な視線を感じた

気配もしないし気のせいかな

あんなこといったけど

本当はまだまだ立ち直れない

苦しい　さみしい

そうしてもういない　半身を求めて泣くのだった

番外編　繰り返された悪夢（前書き）

美月のルキアとの出会いです

番外編　繰り返された悪夢

「やぁ、美月ちゃんじゃないか？
今度うちの隊に遊びに来なよ」
それがきっかけだった。

繰り返された悪夢

「ふ、ふ、ふーん」

機嫌良く走って行っているのは私こと雛桜　美月である。
浮竹隊長は、好感の持てる良い隊長だと私は思う。
まぁ私を子ども扱いするところは少々気になるのだが、
部下思いで、他隊との連携もなんのその古株の隊長
いいよねぇ

権力かさに着ていろいろしてきた家の御歴々に比べたら
月とすっぽんだわ

考え事をしながら、走っていた

結構な速さで

だから、

「げっ　止まれない」

ドチーン

角から来る気配に減速を始めたが遅かった。

見事に激突

あー　こんなの見られたら笑われそう

「っ（痛みになれても痛いもんは痛い）

大丈夫？　ごめんなさい

「こちらこそ、済まぬ。そっちは平気か？」　」

ぶつかったのはぶきっぺらぼうな黒髪が綺麗な女の子だった。

紫がかった瞳を瞬く。

「うん、へーきよ。

あなた、そっちから来たってことは十三番隊隊員さん？」

「あ、ああそうだ。

朽木　ルキアという」

「浮竹隊長ってどこか知らない？

知ってるなら案内・・

「きゃーーーー」

！！！」

突然、叫び声が聞こえた

始まる始まる

悪夢の再来が

その声はまだ続く

「虎徹三席　やめてください！！」

その声のもとに向かうと、一人の女性がその制止の声をかけた隊員に刀を振りかざした。

そして、振り下ろす。

誰もが、助けは間に合わない

斬られる。

そう考えたしかし、

それに反して肉を割く音はしなかった。

見ると、　朱の髪の少女が、それを、背の自分の刀を抜き、攻撃を防いでいた。

（すいません　他者視点を混ぜました）

≪ｓｉｄｅ　ルキア≫

何かに操られたように、斬魄刀を隊員に振り下ろした虎徹三席。

でも、それを守ったのは先ほどの少女。

私は動けなかった

「虚に憑依されてるわね、こりゃ

前に見た物の怪憑きみたいだし」

そう少女が言った時思い出したのはあの時のこと

いつまでも降り続ける雨

死んだあの人を抱きしめる私。

魂と魂の融合

またなのかと、目の前が真っ暗になった。

「虎徹三席ってことは、十三番隊の異例の2人の三席の一人で、四番隊の虎徹副隊長の妹の、虎徹清音さん、よね

様子からして、憑依されて1~2時間ってとこ？

肉体があるときでさえ、ああまで完全憑依されたら、短期間しか持たないって言うのに

（もっともこれは“私”の経験談だけど）

魂での憑依‐いやこの場合融合？か

早くしないと自我が崩壊しちゃう・・・・」

人間の自我はもろい

とくに悪しき意識により少しずつ少しずつ蝕まれる。

憑依状態が長く続くと、肉体の場合一つの体に2個の魂っていう不安定な状態なので体力が奪われる。

まぁ、肉体があれば完全憑依は瞬時にできない分楽なんだけど。

あああああ

こんな時精霊術が使えたら、簡単なのに。
死んでるから使えない
虚の部分だけを焼き払うことが

また　欲しい
浄化の力が

『美月、美月。

精神力を研ぎ澄ませろ』

朱夏の声が頭に響いた

「（どういうこと？）」

『我が契約者であり、超越者であるお主なら可能じゃ。

我はここにお主の斬魄刀として存在しておる。

現世より負担は大きいがな』

―超越者―

―契約者―

懐かしい　言霊

超越者とはあらゆる次元において神に認められ力を借り受けることを認められたをさす。

その数は今この世界に片手しか存在していない

美月の生家、雛桜家ははるか１０００年ほど昔、神獣・朱雀と契約した超越者の血を継ぐ家系である。

いやそれだけではない、ほかの４家、

水の神名家は、神獣・玄武との

地の大道寺家は、神獣・白虎との

雷の神無月家は、神獣・青龍との

風の如月家は、神獣・黄龍との

超越者の血を引く。

はるかなる昔

契約を結んだ超越者の名は薄汚れ伝わっていない。

だがしかし、数人だけが知っている

それを知るのはごくごく僅か

朱雀と永久の契約を結びし超越者

天照の血を色濃く受け継ぎ、帝の係累の娘

そのものの名を、安部(あべの)いや雛桜　美月と言った。

その名前も生まれも

今は本人たちだけが知ること

歴史の中に埋もれた存在

今、その5人の超越者が再び生まれたことも・・・

「（わかった、　朱夏の言葉と自分の力信じるよ）
　ふう」

精神の水面は波紋の広がりを止める

溢れでるのは言の霊

強き言霊は力と一つになる。

「我が守護精霊朱夏よ。

この者と、この者の中にある悪しき虚…二つの魂を引き離し、
　悪しき者を滅せよ

“炎よ散れ、朱夏”」

いつも、始解したときに出る、朱い炎ではなく、その色は

黄金（きん）。

（一回卍解を試したことあるけど卍解は基本朱金色だったよ。）

淡い淡い青がかったそれは清音を覆った

ー　　ー　　ー

「ば、バカ者!!
　何をしておるのだ!!」

「どうしたんだ?」

あわてたルキアちゃんの声と、
　今来たばかりの浮竹隊長

大丈夫ですよ、とは無責任にすぐ言えなかった

たとえ信じていても

清音さんが倒れたと同時にその炎は消えた。

「虎徹三席っ

殺す必要があったんですか！？

簡単に仲間を殺して平気なんですか？！」

痛い言葉

それを紡いだのは、私が斬られるのを防いだ隊員。

私は清音さんの胸の上下してるのを遠目に確認し

「殺しませんよ

彼女に憑依した虚だけを焼き払ったの。

彼女の魂には何の影響もないはずよ」

急いで脈を確認する隊員。

ルキアちゃんが

「そんなことが・・できるのか?」

「うん」

浮竹隊長は私に言った

「私の部下をありがとう」

その言葉で十分だと思った

「あの、あなたは誰なんですか?」

「ああ、そういや入ってまだ間もないし、

新入隊員他隊まで把握してないか

私は、

十番隊三席副官補佐の雛桜　美月。」

なぜか知っている浮竹隊長以外に驚かれた。

いち早く正気を取り戻したルキアちゃんが

「あのですか」

「あのってどんなうわさが流れてんの！！」

いわく

その1、仕事が早く正確

その2、斬魄刀と3本所持

その3、普段の霊圧は3割ほど。

その4、綺麗だが幼い

その5、斑目三席に完勝したらしい

1~3、5は許せるとして、幼いってなに！！

一応出るとこでるよ

ちょーーっと身長のびるの遅かったから小さいけど

3も3割も出してないし

使って一割強だよ。

ああでも　今のは霊圧いつもの半分増しからい使ったかも

「ルキアちゃん。

敬語やめてね

私たち友達でしょ。

浮竹さん、お茶するん

「　いい度胸だな、雛桜。」

たいちょう

私の分終わらせましたよ。」

「お前、松本の逃亡補助しただろうが、
松本の分手伝ってもらうぜ」

「ルキアちゃん　またね（泣）」

ううう、隊長の写真集に目がくらんでたし（おい）
もう二度と乱菊さんのお願いなんか聞くかーー

ー強制終了ー

番外編　繰り返された悪夢（後書き）

始祖については、私のサイト内の少年陰陽師連載でわかるよう前世の彼らです。

そちらは亀並ですがぜひ読んでくださいな
ちゃんちゃん

ちなみに他オリジナルキャラの評判は

如月海依（二番隊副隊長）

・・・美麗な男装の麗人。斬魄刀２本持ち、砕蜂隊長に認められる実力。

神無月　由宇（三番隊三席）

・・・市丸をたしめられる女傑、斬魄刀２本所持

大道寺　皐月（四番隊三席）

・・・第二の卵の花、腹黒、毒舌お嬢、斬魄刀２本所持

青木　輝（六番隊副隊長）

・・・なんでこの人が副隊長?、特に目立たないので実力を不審がられている

神代　魁（十二番隊三席）

・・・　こいつのやっぱりマッドサイエンテスト?

須王　修宇（十一番隊四席）

・・・十一番隊だしやっぱり粗暴なのか?、

美月さんはうわさで判断するのが知らないのでそういうの全然知りません

番外編サイドストーリー（ヒロインはでません）　「二」という字を背負う者シリーズ

如月海依メイン

背負う者シリーズ
　その1、2が原作約3年前
　その3が約2年半前

　詳しい時軸順
二の1→四の1→三の1→二の2→四の2→三の2→その3はほぼ同時期

　です。

12話続きます

番外編サイドストーリー（ヒロインはでません）　「二」という字を背負う者

海依独白

「二」という字を背負う者

心に深くつけられたキズ

「男なんて、大嫌い。でも弱い私（＝オンナ）も嫌い。」

弱い心を殻で覆った俺

今は、それがないと落ちつかない。

いつだっただろう。

私を俺に変えたのは。

「まったく、あの子邪魔だったらありゃしない」

この顔のキズは、愚かな私の象徴

義母を信じた私への

「海依は海依でしょ。」

あの二人が弟の風がいなければ

「姉様っ」

私は壊れてた

誰か助けて・・

私のココロを

弱くて不安定で私は俺は自らの生を拒絶した

風がどれだけ悲しむか考えもせず

死んで悔いなく成仏し尸魂界に来た途端の過去の記憶の奔流。
俺は自分を恥じた
だから死神になった。
そう思った時代（頃）もあったんだ。
過去の記憶を取り戻す前は
前世でも裏切られることばかりだったのに懲りずに人を信じる俺。
でも信じてダメだったって思ってもやっぱり信じたいんだ。
疑うことより信じることの方が難しくて
諦めることより諦めないことの方が難しくて
でも俺は信じたいんだ
世界は醜いものだけではないことを
俺は中途半端だ
時々自分が男か女かわかんなくなる
でもそれも含めて俺だから。

「二」という字を背負う者　その1

「二」という字を背負うもの

―1―

≪砕蜂視点≫

ここ数年目ぼしいものは誰も見つからぬ。

そう思いつつ、霊術院に向かうのは、各隊につきこの入隊前1月の間に、隊長格は少なくとも一度訪問する義務がある。

まったくもって面倒であるが

これも後継育成のため、山本総隊長が決めたことである。

少し憂鬱に思いながら歩を進めた。

が、突然強い霊圧を感じた。

少なくとも今年卒業する者にはいないはずの値の霊圧

「なんだ?

この霊圧は・・・?

今日は私以外死神が訪問しているわけではないし

軽く上位席官レベルはあるぞ。」

これは，今年卒業する奴以外が出しているのか?

おもしろい

うちの隊にほしいな

そう思いつつそちらに足を向けたのであった。

それが始まりだった

時は少しさかのぼる
　　暦を言うと、

春、３月

≪ｓｉｄｅ　海依≫

俺が今おかれている状況を説明すると

上級生に囲まれている

それはすべて　男である。

ぁあ

俺のこと知らないかもな

俺の名前は、如月　海依。

こんな外見、言葉づかい、服装（男用学院制服）だが、

女　だ。

こんな外見と言うと

作者（ユエ）いわく

『少し透明な水色がかったきめ細やかな銀色の髪を乱雑に一つにくくり、

蒼穹のごとく澄み渡った水色の瞳はすべてを見通す綺麗な鏡のようだ。

中性的なその容貌は、どちらかといえば男性的で、

だがその鼻には深い傷跡がある。

その声は変幻自在で、普段の声はとても大人っぽくハスキーだ。

雰囲気も女という感じはしなくて、かといって男のような粗暴さとは程遠い。

いうなら、男装の麗人の雰囲気である。

』

らしい。

俺は普通の銀髪水色の瞳だと思うのだが、

（いや逆に思ってたらナルシストだと思うが）

まぁ、こんな感じだ。

そんな俺は、この真央霊術院（以前は死神統学院だったらしいが）の一回生特進クラスである。

ーー≪作者視点≫ーーー

絡まれている理由は簡単。

成績優秀容姿端麗なのにさぼりまくり、しかも入学初日に先生を倒したという海依はいい意味でも悪い意味でも目立つ。

同学年内ではあこがれの目で見られるが、

上級生には煙たい存在なのだ。

なおかつ、彼女（違和感ありまくりなので、海依呼びします）は、一部（数名）を除き男だと思われていて海依もそれを訂正しない。

海依いわく女だとなめられるよりましだし、どう思われようと自分は自分らしい。

つまり、すごく女子にもてている。

つまり　僻みだ。

ていうか女ってわかってももてそう。

先生を倒したということからわかるようにその実力は、学生のものではない。

海依は死んですぐ、６月中旬中途入学。

もうすでに始解、卍解を習得済みだ。

まぁ先生たちは知らないし気づいてもいないのだが、

（私の主観で、先生はせいぜい中位席官レベルとしてます）

この海依を囲むのは

海依の親友いや朋である、

大道寺　皐月
神無月　由宇

とともに瞬く間に有名になったなりすぎた3人に

いつもは陰口をたたいたり（海依の友人の皐月の毒舌で倍返し）、
足で転ばそうとしたり（わざと踏む）してくるやつだ。

報復のほうが痛そうだが・・・

とうとう実力行使に来たわけだ。

かえりうちにあっちゃえ↑ｂｙ　ｙｕｅ

≪再び海依ｓｉｄｅ途中第三者視点が混ざります≫

「女の子にモテモテの如月君～～

君さぁ、生意気なんだよね

一年のくせに出しゃばって、サボりまくってるし

しかも、あんな美人な女二人もはべらしてさ」

美人二人って、由宇と皐月のことか？

まぁあいつらの容姿は普通より上。

美人の部類だろう（自分の容姿は自覚していないが、他人の容姿はわかるらしい）

だがな、由宇は恋愛沙汰が大嫌いだし

皐月に至っては、朋の俺に対してでさえ気に入らないことに対して毒舌吐く奴だぞ

俺は朋としてはあいつらは最高だが男だった時でさえ恋愛対象として見たことないぞ

しかも、はべらしてって俺は女なんだが…

女同士に偏見はないが…

っていうか自分の自覚をしろよ

臭いし、こいつら

貴族出身っぽいやつ、香をつけまくればいいもんじゃねぇ

媚売ってるだろうのやつ、プライドのない奴が女に好かれるか

無駄にプライドが高くても嫌われるだろうが

ああああ　もう

うざってぇ

「…言いたいことはそれだけか？

サボってるのはてめぇもだろうが、

目立ってる？

ただ普通にしているだけだが？

モテモテも別に俺のせいじゃないだろうが」

彼のいや海依の（いかん油断すると彼っていいそうになるよ女なのに）霊圧は少しずつ上昇している。

彼にとってはいつも薄くしている霊圧に（制御状態で）１割ほどたしたぐらいしか上がってはいないのだがそれでも

上位席官レベルはあった。

あーー

昨日鬼道と白打での組み合わせ夜中ずっと考えていたから

寝不足だし

一回実力の差ってもんを教えといたほうがいいよな。

もうすでにその上がった霊圧に囲んだ連中は気押されていた。

詠唱破棄で少し抑えればまぁ死にはしないだろう↑↑

寝不足で理性が効いていなかった

「破道の三十三　蒼火墜」

青い爆炎が飛び出した。

しかし、何者かの放った鬼道で相殺(そうさい)された。

≪砕蜂ｓｉｄｅ≫

感じた霊圧の元に向かってみると、そこは学院裏。

ついた瞬間見たのは、青年いや女か?が霊圧で相手を抑え込み鬼道を相手に放とうとする瞬間であった。

どうやら威力は殺すつもりはないようで抑えられているが、詠唱破棄であの威力。

周りに被害が出るっ

それに、あいつが学院を退学になるかもしれない

そう思い、とっさに反鬼相殺した。

なんでこのとき退学になるかもしれないと思ったのかこの時の私には理解できなかった。

（今思うと、あの時からあの透き通った水色の瞳に心奪われていたのかもしれない

ｂｙ●年後の砕蜂様）

「げっ

やりすぎた

すいません、お手を煩わせて、砕蜂隊長」

銀色の髪に水色の瞳のその女（すごいですよね、普通間違えますよｂｙユエ）は私に向かってそういった。

どうやら頭に血が上っていたらしい

「いい、霊圧を下げてやれ。
けがはさせなかったのだし、お前に否はない。
様子からして一人に対してこんな大人数だったようだしな。」

まったく男の矜持はないのか

こいつらは

霊圧を下げるとすぐにそいつらは逃げ出して行った。

「それでも、お礼を言いたいんですよ

言い訳になりますけどいつもより寝不足のせいで理性が効きにくかったので。

あのままじゃ、斬魄刀取り出しかねなかったので」

斬魄刀。

まだ霊圧に余力がありそうだったし

「お前、名はなんという」

「如月海依。一回生です。」

敬語は馴れないのだろう
少しぎこちない。
一回生か、　もったいない気がするな
さっきの鬼道といい
霊圧の制御といい
自分の非をきちんと認めることと言い
ほしいな　　うちの隊に
「敬語はなくていい。
　それより、うちの隊に入らないか？」
少し呆けた顔をしたすぐに返答してきた
「俺、まだ一回生ですけど。」
「構わぬ。さっきの鬼道の詠唱破棄のあの威力、それにその霊圧制御。
　すでに始解を習得済みとみた。
　死神は実力社会だからな」

ふところから、一応持ってきていた例の紙を取り出し、渡してその場を離れた

時間も押してたしな

後ろでは大きな驚愕の声が聞こえたが

≪海依ｓｉｄｅ≫

俺の鬼道を相殺したのは、≪二≫という隊首羽織を見にまとう・・たしか二番隊隊長の砕蜂隊長だった。

翻る羽織の裏色は琥珀色(こはくいろ)だ。

どこか頑なででもどこかほおっておけない感じがした

冷徹という噂もあるけれど、彼女の裏はその琥珀のように優しいのだろうかとそう思った。

しんでからろくに使っていない馴れない敬語で返したが、

人の中身を見る人だと俺は思った

さすがに
敬語はなくていい
とか
うちの隊に入らないかと言われた時はほおけたぜ。うん
この俺の目立つ容姿からあまりうれしくはないが、俺が如月海依で先生を倒したということはすぐにわかる。
だが、俺の名前を聞いたということは、その噂を知らないということ、
俺自身を見て、勧誘してくれたのがうれしかった
思わず聞き返したけど
一回生ですけどって
俺の噂はどうやら碌なものではじゃないらしい
ズルして先生に勝ったとかいろいろ言われてるのも知ってるし、
性格に問題アリと言われているのも知っている

（授業の大半をサボることから内申が悪い）
知らなくてよかったとも思ったがな

正当に自分の人格や実力を買ってくれたのはうれしかった。
　鬼道とか
斬魄刀の始解を充てられたのにはびっくりしたけどな。
うちの先公なんて全く気がつきゃしねぇし

卍解ができることは今のところ言うつもりはないが
地位はある程度あったほうがいいがありすぎると困るしな、一番上は勘弁したいぜ。
渡されたその紙に目を落とすと

入隊

二

推薦者：砕

備考：この者を上位席官に

氏名：

依頼書

番隊

蜂　（判）

任命したい

それはここ数年使用されたことのない

初入隊時上位席官依頼書だった

（作りましたすいません）

おまけ

海依ｓｉｄｅ

「俺いち早く卒業決定だわ。悪いな。」

「ちょっ　どういうことよ」

俺のその言葉に真っ先に反論する俺の朋で親友の神無月　由宇。

彼女も俺と同じ目立つ容姿で、金色の髪に金色の瞳をしてるんだよな

ツインテールにした髪は揺れ、瞳は目を丸くする。

「二番隊の上位席官に勧誘された。

以上」

「そうですの。

二番隊といえば、隠密機動と関係が深い隊でしたわよね。」

そう敬語口調で言うのが、もう一人の俺の朋の大道寺皐月。こっちも碧の髪に瞳って目立つけど、感情を表していない。

「そうそう。

確か隊花は、翁草で、花言葉は・・・」

「

「何も求めない」でしたわね。他に「背信の愛」「告げられぬ恋」「清純な心」「華麗」みたいな感じもあるけど」

「海依大丈夫なわけ？

合いそうにない気がするんだけど。

そりゃ能力的には問題なしだけどさ。」

「そうか？

俺もそういうのあまり好きじゃないが、砕…ちょっとあの目が気になってな。

まぁ、間違ったことに屈するつもりはないけどな。

あくまで俺の意思は曲げないしな。」

「あなたが決めたことに文句を言う資格はありませんし、言うつもりもありませんわ。

崩れそうになろうと私(わたくし)たちは味方ですしね」

「あたしも応援するよ。

あたしも、１（なんとなく）、５（うさんくさい）、６（かたっくるしい）、１０（子供に従うのはねぇ）以外なら入りたいかな。

あとできれば、治癒霊力使うの神経使うから４番隊も遠慮したいかな～～～」

俺が完全に信じている朋という存在。

こいつらは何にも代えがたい俺の大切

「まぁ、私たちもすぐに声をかけられるでしょう。この時期隊長訪問多いですし。

私たちの実力のひとかけらも分からない屑はいないでしょうし・・」

あいかわらず辛辣だな、おい

少し不機嫌そうな由宇は、

「それにしても、サボってた海依が最初っていうのがなんか損した気分。

あたし、皐月や海依と違ってちゃんと授業出てるのに…」

「御苦労さま。
授業なんて聞かなくても、教本一回読むだけで充分だろが。試験で結果を出しとけば文句は言えないしな」
と俺。
「時間の無駄ですわ。
視線がウザいですし」
と皐月。
俺も、皐月も、由宇も、試験では、実技筆記ともに主席を維持している
サボりを黙認されるのもそのためだ
「うわーーーん
理不尽だ。なんでまじめなあたしが向くわれないわけぇーー」
もちろん嘘泣きだが、騒ぐ由宇と、切れて毒舌を吐く皐月、ため息をつく俺で
時は過ぎて行った

後日、皐月は四番隊に
由宇は三番隊に勧誘されることになるのであった。

≪ｓｉｄｅ　砕蜂≫

あれほどの実力と見栄えだ、噂になっているに違いないそう思い、
試しに自隊の３席の大前田に聞いてみた。
無駄なことばかりよく知っている奴だからな
「如月海依というやつ知っているか？」
「って
隊長知らないんすか？
一回生にも関わらず、先生を倒した３人組の一人で
まぁ、あまり信じられてはいませんがね。
どうせ、ずるでもしたんでしょう

そんな実力の持ち主がひょいひょい出てたまるか」

もちろん聞いたあとこの男は沈めておいた

こいつに勝ったら。

副隊長にできるよう総隊長にかけあっとくか

「二」という字を背負う者　その2

「二」という字を背負う者

―2―

≪side　海依≫

今日が俺の入隊試験日。

いやまったくもって心配してないよ

逆に相手にどれだけ手加減すればいいかが問題だしな

それより俺の機嫌を低下させてんのは、馬鹿で愚鈍な先公どもの俺たちの扱いだ。

これだから、無知で無駄な矜持が高い奴はだめなんだよ。

まったく・・・

海依のいるこの試験場にはもう少人数しか残っていない。

というのも、まだ海依たちの実力をまったく理解していないし、しようともしていない大部分の先公（一応ましなのうちの特進の担任くらいか）は、

一回生が受かるはずがないとかいう考えから最後に回しなおかつ、先に終わった六回生の蔑み、ねたみ等の視線がそれを悪化させている。

身の程を知れよ、お前ら。

少し機嫌が悪いが見た目はほぼいつもどおりなため、付き合いの長い朋である皐月と由宇以外はそれにきづいていないようだが、もしキレた時も止める気はサラサラない。

（実はこの二人も少し機嫌が悪い）

ちっ

逆にこう考えることにするか

ギャラリーがうるさくなくていい

数人の女子が見学に来ようとしていたが丁寧にお断りした

総隊長が言う

「今よりは、今年の卒業予定者以外の推薦者を行う。

今回は3名。いずれも一回生である。

二、三、四番隊以外の参加・見学は自由じゃ」

ぞろぞろと出て行く六回生（かわいそうに落ちたやつもいる）や、

見る気のない現役死神。

さらに減っていくのであった。

残ったのは、言われた隊以外は十一番隊４人と十番隊隊長副隊長、

五番隊隊長のみ。

げっ

あの目のわらっていない胡散臭い藍染も（気に入らないやつに心の

中では敬称をつけない）いるし。

八番隊はなんか酒臭かったな。

副隊長にせかされてたし

大変そうだよなぁ　よっぽど尊敬していない限り俺は御免だ。

「まずは、（これが、珍しくも砕蜂がわざわざ勝ったら副隊長にと、願ったのは…

確かにいい目をしておる）

二番隊志望如月海依、上位席官依頼が出ておるのう

前へ」

いつもどおり後ろで髪を乱雑に結んだ海依がでる。

こんな日も男子用の制服を堂々と着ている。

その腰には2本の斬魄刀。

もちろんまわりはそれが彼いや海依自身の斬魄刀でなく浅打だと思っているようだが…

砕蜂隊長が蹴りでお前も行けという言葉とともに大前田を蹴りだす。

「では、はじめ」

まずは小手調べといくか。

普通にやれば瞬殺だしな

視界の毒だから消えてもいいが↑↑↑

この前よりさらに威力を抑えてと・・

「“ぶっつ「言わせないぜ、破道の三十三蒼火墜。」ぶっ」

威力抑えたのに、スピードだって抑えたのに刀で受け止めるか？ふつう

しかも、候補生に対して初っ端から始解しようとするか？

まぁ俺に対してのその判断は間違っていないが

こいつもう目に入れるのも厭だし

片方の斬魄刀を抜く。

水色の柄（つか）に鍔は風車のような形で色は銀。

それを包む鞘は、水色。

長さは普通の斬魄刀と同じくらい。

そして誰にも聞こえないくらいの声で

いや結構離れてるけど五感の発達した由宇や皐月なら聞こえるか、

うん

唱えた。

「“風よ、我が声に応えよ、風華”」

俺の斬魄刀のうちの一本である“風華”は、俺の相棒（パートナー）で、朋の次に永きの間戦ってきた戦友。

俺の魂の片割れ。

俺は2本持っているが、はっきり言ってこちらのほうがなじみ深いし、信頼している。

それは、もう一本の斬魄刀である“地生（ちしょう）”もわかってくれている。

だって、“風華”はもう数十いや二百年くらいの付き合いになる。

はじめて会ってから、戦えない姿もあらわせない世界も多かった
だけど
そばにいるというだけで自分が一人じゃないと思ったし

大切だと思った。

まぁ“地生”も納得しているけどよくわがまま言うね
うん。

だって見た目かっこいい筋肉多い人なのにへたれがあるもんな
まぁそれはいいとして

地生は、“風華”と違って小太刀ほどの長さだ。
だって斬り合いに向かない刀だしな。
後は色もデザインも一緒だし、

“地生”も“風華”も、始解しても形も姿も色も何も変わらない。

だから・・・

始解しても、さっきの解号が聞こえた人以外気がつかなかった。

あーー

聞こえなくても

“風華”のほうなら気づくかもな

だってうっすら本当にうっすらなんだけど

刀身に龍の形が浮き出ているから、始解すると浮かぶんだよな。

ちなみに卍解したらもっと濃く出るんだがそれは後々として

俺は、瞬歩で相手の背後をとったが、

まぁ腐っても3席その動きに反応した。

仕方ないか、全力出してるわけでもないし

刀は当たらなかったはずだった

しかし相手の腹のあたりが切り裂かれ、

そして倒れた

≪ｓｉｄｅ　作者≫

それは簡単。

“風華”の力は、風いや空気に関することすべてを起こす力

たとえば、ある人物の周りだけ酸素を少なくすることも、竜巻を起こすことも可能だ。

逆に空気を増やして密閉空間の気圧を急激に上げたり、光の屈折や反射を曲げたり、ダウンバーストを引き起こすことも可能である。

だが、始解状態ではためを必要とするものは本当に長くためが必要になる。

もともと風は、雷、地、炎、水どれよりも威力が小さいものとされているが、海依に限ってが全くそうは見えない。

精霊術師の中では最も戦闘向きでなくて、早いが軽い攻撃だといわれ、蔑まれることも数多くある。

同じ十の精霊を使ったとしたら絶対に負けるし

だが、逆に空気はどこにでも存在するため情報に特化しているであるが、一人に操れる精霊には限界があり

風術師はそんな中を生きている。

数を維持するためにも血にこだわるのだがそれはおいておこう

海依が起こしたのは、かまいたち。
皮膚表面が気化熱によって急激に冷やされるために組織が変性して裂けてしまうことだと認識されてはいるが

旋風の中心に出来る真空または非常な低圧により皮膚や肉が裂かれる現象で、それを部分的にに海依は引き起こしたのである。
現実的に自然におこるのは難しいが意図的に海依は操ったのである。

「勝者、如月　海依」

一瞬であろうと視える人がいたのなら驚くだろう

集まった風の精霊の数と速さに・・・・

≪ｓｉｄｅ　海依≫

俺がもといたところへ戻ろうとすると、総隊長が

「待て」

と俺を呼び止めた。

まだなんかあったっけか？

いやないだろう

相手が弱くてまだ少しむしゃくしゃしていたので少し高ぶり少し霊圧をあげたまま

振り向き

「俺にまだ何か用が？」

「うむ

おぬしなぜ女子（おなご）なのに、その男子の制服を身につけておるのじゃ？」

あー

すごいな　気付いたのか

ま、さらししてるわけでもないし

男装してるつもりはないしな

っていうか逆に女の格好ってうざいんだよな

「理由が必要か？
　俺はこっちの色が好きだし、違う性別の制服を着たらいけないなんて
　規定されてないだろ」

と返したが

後ろの外野が、

つるっぱげな確か十一番隊三席の斑目一角だっけ？

が言う

「はぁぁ？

総隊長　冗談がきついぜ

こいつはどう見たって

男

だろ」

周りには頷いてる人ばかりである。

いや別にいいぜ男に間違われるのなんてしょっちゅうだし、慣れてるし

って言うか男とか女とかってどうでもいいというかなんというかなぁ

ここまで断言されるのもなんかなぁ

間違われてるとさすがに後々面倒そうだし

「あのこれでも俺いや私は生物学上は女ですけど…？」

女のからだ面倒くさいにもほどがあるけどな

まわりは驚愕に包まれたのだった

いちいち男か女か聞かれるの面倒くさいし
死神になったらくくるのやめるか
髪
あと建前で敬語使うようにするか
敬語じゃないとぼろが出るしな
その騒ぎが収まった後
「二番隊隊長砕蜂の申し出により、このものを長く空席であった二番隊副隊長に任命する。」
いきなり副隊長になるとは俺も思っていなかったが、
あの頼りないのが砕蜂さんの右腕にはふさわしいとは
まったく
思えず、その任命を受けた
ちなみに皐月と由宇は無事にそれぞれの隊の三席になったんだけど
それはまた「三」と「四」をまってくれな

≪海依ｓｉｄｅ終了≫

≪ｓｉｄｅ砕蜂≫

私が副隊長に推薦した-如月海依-

垣間見ただけで彼女には、実力があると分かった。

であるから総隊長にある条件を出した

うちの大前田３席に如月海依が勝ったら空席の副隊長に就かせてもらうと

私の期待は外れず、見事彼女は倒したのだった。

もっていた刀片方は小太刀だったが、力を感じた。

しかし使っていたのは間違いなく斬魄刀だ。

どういうことだ？

終わった後すぐに聞いてみると、これも斬魄刀で2本持っているという。

私が知る限りでは初めてのこと

私は彼女の実力に満足する一方なぜかほかのたしか、大道寺と神無月だったか？

と話している時なぜかもやもやした何かを感じた気がした。

そして、彼女の実力はまだ隠されていると薄々感じた。

- 2 - end

「二」という字を背負う者　その3

「二」という字を背負う者

- 3 -

≪海依ｓｉｄｅ≫

俺が副隊長という地位について約7、8カ月という月日がたった頃にそれは起こったんだ。

砕蜂隊長は想像した通り強い覚悟をもって力を使う意志を持った人だとこの間に見て取った。

だがそれと同時に、弱さをやはり持っていると感じた。

弱さは誰でも持つものだと俺は思うんだが、彼女はそうは思っていないらしく、特に立派に見せないといけない部下の前では弱音一つ吐かない。

それがすごくもどかしかった。

俺は、こいつの砕蜂の補佐なのになにもできていない

力がいくらあっても俺は無力だと思うんだ。

そう思うんだ。

解説【いまだにこのふたりは理想の部下と上司に見えますが、まだ本当の意味での支えあう関係ではありません。

海依は、砕蜂に頼ってほしいと思いつつそれを部下が先に口にすると砕蜂が気にすると思い口にしない。

そして、過去の記憶からなにか辛い記憶が彼女を頑なにしているのではないかということには気づいている。

本人が話してくれることを待ち続けている。

砕蜂は過去の離別から深く人と接することを拒んでいるが、海依のことは信じたいと思い始めている】

≪ｓｉｄｅ海依と第三者≫

それが起こったのは

ある一枚の書類がきっかけであった。

「な、この書類っ

遅すぎなんだよっ来るのが」

半場切れつつ俺はいった。

その書類にはこう記されていた

『今日未明出現虚の訂正』

と。

数刻前、大前田３席を筆頭とし、残りを下級席官４名の小隊にある任務が課せられた。

それは、

今日未明出現虚の滅却・昇華。

その時の情報によれば、

霊圧分析により、だいたい低級（海依にとってＢ～Ｄ級）虚十数体

一人２～３体くらい平気だろうと思い、派遣したのだった。

そして今に至る

海依の手に握られた書類は少しくしゃくしゃになり、

他隊からの書類に混ざっていたそれ。

「大前田のやつっ！！

ここ片づけてないからか

ちっ」

それを見つけたのは本当に偶然だった。

大前田の未処理の書類を親切にも海依が片づけてくれたから気づいたことだ。

自業自得といえばそれまでなのだが

その書類にはこう記されていた

一部自分の言葉に直すが

『今日未明　出現虚の訂正

中、低級虚数十体

及び巨大虚数体（ヒュージホロウ）

安全のため、副隊長もしくは隊長に命ずる』

と。

急いで隣部屋の隊主室へと向かう。

隊により副隊長と隊長が同じ部屋だとか、隊長のみとか、副隊長、隊長、3席で使用などさまざまであるが、

今現在、

海依が副隊長の二番隊では、副隊長、隊長の同室で、隣が3席他である。

解説【今現在：由宇、皐月、美月はいずれも隊長から3席まで使用です。

　また原作イメージで原作の時は彼女らではないので、二番隊は隊長のみ、三、四、十のいずれも副隊長、隊長のみです。】

「砕蜂隊長っ

　大前田のやつこんな書類埋まらせてたんだけど！！」

「なんだ？」

書類を読み、砕蜂の顔色が変わる。
あくまで、海依が気づく程度だが
「あの、阿呆が
行くぞ、ついてこい、殺されるなよ」
「わかってるって」
≪ｓｉｄｅ海依≫
そして、俺たちは現世に降り立った。
もちろん限定をして。
俺をはじめ、由宇と皐月は普段から霊圧制御装置を付けている。
俺の場合、この左手人差し指についたアクアマリンの指輪である。
見た目も科学的にもアクアマリンではあるが、これ最初は霊石となった真珠なのだがそれはおいといて、
俺達の場合これで８割の霊圧を封印している。
というのも肉体、魂魄的に常に霊圧を出しているのは危険だからで

体の負荷を減らすためだ。

解説【のため封印＋限定ということで

つまり、本来の力の４パーセント、

封印状態の２割ということである。

２割でも、他隊の副隊長レベルはあるのだが。

ちなみに封印しただけの本来の２０％だと総隊長の１．２倍。

（強）】

なんでもユエいわく

『男にしては華奢で細い、女としてもほっそりしたその指にはまる指輪は、

シルバーで目立ちにくいが、繊細な意匠が刻まれ、アクアマリンの淡い透明な水色が海依の雰囲気にあっている』

らしい。

俺は全くそういうのに興味はないんだが…

とりあえずそんなわけで霊圧の無駄遣いは避けたい。

とりあえず感覚として降り立った時死神5人分の霊圧と気配がまだ感じられた。

まだ、虚の霊圧はしない。

どうやら間に合ったみたいだな。

だがどこか違和感があった。

（霊力もなにも感じないのに、

気配がもう一つ？

人間や霊の気配じゃないし）

霊圧の下で見たのは、巨大虚と戦う3人とけがをして横たわる2人だった。

「霊圧を消せるタイプ、か。くそっ厄介だな」

そういうのは砕蜂。

「てめぇら

さっさと後ろへ行けっ

最小限守ってやるが自分の身は自分で護れ」

言葉づかいを気にする余裕はない。

副隊長になってからは一応気をつけていた言葉遣いのかけらももう

ない。

「は、はい」

しかもけがしてるふたりは下位席官。

大前田のやつ上なら下を守れよな

あとであいつは減給だなこりゃ

あいつはそんなの痛くもかゆくもないだろうが

ボンボンは

だから嫌いなんだよ

倒れてるほうも命に別条はなさそうだ。

ま、逃げなかったことだけでもほめてやるか　大前田

俺はな砕蜂（二人の時はいいと言われた）がどういうかは知らないが…

中、低級虚は数減ってるからやられっぱなしじゃなかったようだしな。

そう考えやはり俺は“風華”の方を取り出した。

“風華”の方を信頼してるのもあるが、もう一つは地系である“地生”は現世では特に使いにくいからである。

同じ地系でも、皐月の“花音”とは使い勝手の良さには大きな差がある。

だって同じ地系でも“地生”は土。

たとえば土の壁を作りだしたり、地殻変動を起こしたり、

と更地ならともかくここは町のど真ん中の公園近く。

というわけで

“風華”を始解した。

「“風よ、我が声に応えよ、風華”」

その始解で次々と雑魚を一掃していく。

一応周りの被害を最低限にしつつ、

（だってそうでもなくても

絶対始末書書かなきゃだめそうだしな

あんま増やしたくないっていうか）

その途中、巨大虚がある一点を目指そうとしているのが見えた。

その先を風で確かめると霊圧の高い人間の少年。

巨大虚がその少年に攻撃しようとするのを察し、小規模の竜巻で周りの雑魚を吹き飛ばしその勢いで飛び込み、

自らを盾にしてその子を抱きしめてかばった。

（だってとても懐かしい霊圧がしたから。

大切な　子の）

始解していたため“風華”で、その子を念入りに風の結界で守り、俺自身は最低限“風華”が護りの風で衝撃を緩和してくれたようだ。

それでも、肋骨2、3本折れたな、こりゃ。

「おい、海依（彼女も二人の時は名前呼び、海依が頼んだ）。

大丈夫か？」

そう尋ねた砕蜂に、

「大丈夫だよ。　砕蜂。

それよりこの子をお願いします

俺は、一気に残りを昇華します」

残りには、雑魚もまだ残っているが、巨大虚も3、4体以外まだ残っている。

「そんな怪我で無茶なこと

「大丈夫。　俺を信じて」

・・・約束は守れよ」

ー殺されるなよー

その言葉での約束

現世に来る前に言われた言葉

「わかってるって」

俺は一気に側にあったビルの上に飛び上がった。

隠していたし

これからもできればここにずっといたかった

だけど

護れないのはそれ以上に嫌だから

悪いな、由宇、皐月お前らもばれるかもしんない・・・

そして、
溢れでる言の霊を唱える。

「“卍解、黄龍迅風華遠（コウリュウジンプウカエン）”」

刀身にはくっきりと龍の形が浮かび上がり、
水色で銀の光を放つ龍‐黄龍‐が現れる。

由宇の“雷覇”も龍だが、あちらは青龍で青白い電気をまとい金の光を放つ由宇の“雷覇”に比べ、
俺の“風華”は体が少し短めで、体は透明に水色や碧がかっている。
そして纏うのは金ではなく銀の光。
冷たい銀ではなく、やわらかい少し水色や碧、紫がかった銀の光。

「“風華”、思う存分やれ。

いくら俺でも、ぶち切れた」

龍-“風華”-の手からつむじ風が出たかと思うとどんどん大きくなりそこにいる巨大虚は吹き飛ばされ、

「いまだ」

上に浮きあがった虚の頭を的確に打ち抜く。

そして、それは粒子となり昇華された。

そして戻るとやはり驚いた顔の砕蜂の姿。

「海依、お前・・・

「すごいです、あの精霊の数」」

精霊？

ってこいつ精霊術師かよ

その声の発信源は俺がさっき助けた１０をいくらか過ぎたくらいの少年。

その瞳で本当はわかってた

わかってたんだ

その少年の瞳は、海依と同じ透き通った水色をしていた。

漆黒の髪に俺と同じ水色の瞳

女の子と見間違いそうな愛らしい顔

視るとその膨大な精霊は≪風≫。

つまりー風術師。

「お前、如月の分家？」

本当は信じたくなかったのかもしれない

その少年のどこか哀が漂うその少年が大切なあの子だということに

だってそうなら

あの子を悲しみに落としたのは　俺　。

護りたかったあの子を

「それ、本気で言ってるんですか？

【姉様】。」

【姉様】

砕蜂や他の死神達の顔に驚愕が走った。

ああ　あの子　なんだ

やっぱり

「ああ、風（フウ）か。」

俺は今年１２のはずの弟の名前を呼んだ。

死んで一年半忘れたことのなかった最愛の弟の名前を。

「そうです。海依姉様の弟の風です。

姉様が死んで１年半どうして会いに来てくれなかったんですか？

死神になったのに」

死人と生者はかかわるべきじゃない
そう思ったのに

「大きくなったわね。

でも俺は変わらない俺の時は止まっているから、俺は死んでいるから

お前を死人の俺が縛るわけにはいかなしだろう」

「それでも、！！

姉様は姉様ですっ

僕の大切な姉様ですっ」

涙目になりながらそういう

「ああ、そうか。俺にとってもお前は大切な弟だよ。

ところで、ここ家から離れてるよな

どうしてここにいるんだ？」

俺は一度もこいつの涙に勝てたことがない。

今回もそうなってしまった。

「他家との合同任務で、雛桜家の留依さんとですよ」

なんだ。知らない名前。

とっとと考えるのを辞めた。

「じゃあ、合流してやりな

今度休みに会いに行ってやるから、な」

その決意をするには時間はかかるだろうけどな

「はい・・・・」

うちの家に記憶置換は無意味なので

砕蜂がそれを出した時

「うちの家ってか精霊術師には無駄だよ。記憶置換」

そういい

今の俺の場所へ　還って行った。

≪ｓｉｄｅ海依ｅｎｄ≫

≪ｓｉｄｅ砕蜂≫

海依は、本当にいいやつだと思う。

私のことをいつも気にして、

補佐して、信用してくれて、

いろいろ気を使ってくれて

あいつがある一線を絶対に超えようとはしない

私がそれを超えるのを待っているのだと思う

無表情無感情を言われる私ですらわかる

でも、怖いのだ

だれかを作るのが

気を張っていないと誰かに寄りかかってしまいそうで

側にいなくなるを思った時

手遅れだとおもった。

でも、それがなかったら私は今もまだ虚勢を張り続けたのかもしれない

―虚戦闘開始時後―

虚と戦っていたはずなのに、いきなり、周りを吹き飛ばして移動した海依。

ある一点に向かって疾ってそして何かを守るように攻撃を受けた。

あれくらいで死んでしまうはずがない

そう思うのに、少し怖くなった

急いで相手を切り捨て、海依のもとに向かうと傷を腕や背中に受けている海依と無傷の少年の姿がそこにあった。

「大丈夫か？」

そう聞いた私に
無事そうに言ったが次の言葉には驚きを隠せなかった。

「それよりこの子をお願いします

俺は、一気に残りを昇華します」

何を馬鹿なことを　と思った。
でも海依の目は真剣で

「大丈夫。　俺を信じて」

それで先ほどの約束を口にするのがやっとだった。

でも…もし今回約束を守ってくれたのなら私は前に進めるかもしれない

そう思った。

ビルに飛び移った海依が唱えた解号にはおどろいた。

「“卍解、黄龍迅風華遠（コウリュウジンプウカエン）”」

海依の瞳のように透き通ったーいやそれ以上かもしれないー水色の体に銀の光を放つ龍。

それはあっという間にすべてを倒してしまう。

ふつう卍解とは

何年何十年の経験や戦闘の中で見つける斬魄刀の二段解放。

幾人もの死神がそれに挑戦し得られなかったもの。

その威力は始解の数倍数十倍。

そして、隊長になる条件でもある。

海依はまだ死神になって一年もたっていないのに・・・・

すると、海依の助けた少年が

「あの・・・

「お前、私たちが見えるのか・・？」

はい、見えます。あの僕を助けてくれた人は誰なんですか？死神さん」

といった。

はっきりいって死神が見え、死神のことを知っていることに本当に驚いたのだが、聞かれたことに答えた。

「如月　海依。私の信頼する副官だ」

と。

私が帰ってきた海依に問いただそうとした言葉を、その少年はさえぎり。

「すごいです、あの精霊の数」

話の流れから海依の生前の弟らしく、

風

というらしい。

海依に大切と断言された、風がうらやましかった。

ーーー精霊術師という存在に記憶置換が効かないことも初めて聞いたのだが

私は今回のことで一番隊移動

ーどう考えてもおかしいのだがー

になった海依にたいしてやっと

私が海依に見えないところで支えられたのだと心の底で思った、

だから・・・・

もう一度

信じてみようと

信じてみたいと

そう思ったんだ

夜一様の残した心の穴はまだふさがらないけど

いつか

海依に話せるだろうか？

≪ｓｉｄｅ砕蜂ｅｎｄ≫

≪ｓｉｄｅ風≫（この前後関係は風炎でやってます。）

（風の結んだ絆　炎の笑顔で描写済。早く読みたい人はサイトのほうへ　こっちへの移行予定は未定です）

雛桜家の留依さんと来た任務。

今日が初対面でした彼女はとても昏い暗い眼をしていました。
その理由を僕は知っていました。
たしか、半年ほど前に死んだ彼女・留依のいとこ。
僕ははっきりいって姉さまの一件以来雛桜のひいては、あの
姉様を殺した双子のことを
憎らしいとまで思っていた
　憎むことでしか姉様を失った悲しみは埋められなかった。
だからその双子の片割れが死んだと聞いた時も、
僕の姉様を見殺しにした報いだと
姉様の足手まといになった報いだと
そう思ったんです。
悲しみに押しつぶされそうになりながら戦う留依の姿がどこか
　自分を見ているようで
そんな考えをひと時だろうと忘れてしまっていた。
儚くて弱い年下の少女。

誤ってあの子が傷ついた時に見せた
赫への恐怖。

全てが終わった後の彼女の着物の袖は血に濡れていた。
「ちょっとへましてしまいました、すいません」
痛みをこらえていう彼女の体は小さく見えて
「黙って、今手当しますから
終わったら待っていてください
車の迎え呼んできますから」
なぜか、守ってあげたいとわずかに思ったんだ。
気のせいだと頭から消したけど

あとでその自分の気持ちを無視したつけを払うことになるのが
か弱い少女だということを誰も知らなかった

任務が終わって気は緩んでいたのだろう

そこである再会を僕はした

任務で気が緩んでいたせいで僕は虚の接近に気付かず、気づいた
時にはもう回避が難しい状況だった。

思わず目をつぶったそのとき

「危ないっ」

ひどく懐かしく聞き覚えのある声は、切羽詰まっていて、
その声の主は僕を庇い抱きしめていた。

どこか懐かしくて

泣きたくなるくらい暖かいその腕。

そっと目をあけると

目に入ったのは夜の闇の中で輝く

“銀”

月光を浴びて輝く銀糸の髪に、透き通るような懐かしい水色の瞳

嘘だと思った

そこにあったのは別れたときそのままの

姉様の姿

でも確信してしまった。

その“銀”の人が操って見せた天災規模の精霊の数。

そしてその統率力。

間違いない　姉様だと

僕はもう長いことあっていない死んだ姉のことを思い出した。

ーーーーーーーー

姉様こと如月　海依

僕の異母姉に当たる彼女は年にして5歳上の生きていたら17歳の姉。

姉様は純血主義が多いここ如月家にとって珍しい術者同士のハーフだった。

今は亡き地術師の本家大道寺家の娘と如月家の現党主の間に生まれた姉様と

その後妻として入りこんだ如月の分家出身の僕の母。

体が弱く、大道寺としての力が弱かったらしい姉様のかあさまは、姉様が2、3歳のころに亡くなったらしい。

そして姉様は容姿こそ如月の色彩の薄い瞳

解説【風術師の本家「如月」他分家では、水色が一番力が強いほうで、より透き通ったほうが力が強い。ほかは薄い灰色や茶色

地術師の本家「大道寺」および分家は、濃い茶色やオレンジ、少ないが緑である。
緑が一番強いといわれている 】

で、力の強いあかしである水色の極限まで澄み渡った透き通った瞳をしているが、

『地』の『土』の力と、『風』の力両方に富みその血を色濃く受け継いでいた。

今でも覚えている。

姉様がわずか8歳にして操って見せた精霊の量とその力を

でも混血を忌み嫌った典型的純血主義である僕の母は、僕を極力引き離そうとした。

僕は姉様をすごく慕ってたんだけどね

尊敬もしていたんだ

　強くて優しくて何でもできる姉様を

でも　姉様は僕を置いて死んでしまった。

昨年の　5月に。

　姉様の朋友（とも）である由宇さんと皐月さんと一緒に

その死んだ日何が起きたか僕も知らない…

あの強かった姉様が、由宇さんたちが自分でへまをするはずがない

だから、

　あの双子のせいにしたんだ

―――――――

懐かしいのも当たり前だ
姉様なんだから

「誰？」

と言われた時、姉様にとって僕はなんだったんだろうと思った。
ぼくは姉様が大好きだったいや今でも大好き。
でもそのあとの言葉で僕のことがきらいなわけじゃないとわかったんだ。

『でも俺は変わらない俺の時は止まっているから、俺は死んでいるから
お前を死人の俺が縛るわけにはいかなしだろう』

そういった姉様。

僕のことを考えてくれたのはわかるでも
自分の気持をはっきりと言うと
俺にとってもお前は大切な弟
そう言ってくれてとてもうれしかった。
今度休みに会いに行ってやるから
その約束が当分守られることがないことを僕はまだ知らずにいた。
僕は姉様が強い存在だと思いきっていったんだね。
ーーーーーーーー≪ｓｉｄｅ風ｅｎｄ≫ーー
このことがきっかけとなり
如月　海依は零番隊副隊長になったのだ。

「二」の字を背負う者ー完ー

風ｓｉｄｅの続きや前後は、風炎こと風の結んだ絆　炎の笑顔で。

番外編サイドストーリー（ヒロインはでません）　「三」の字を背負う者

由宇独白

あたしだって、傷つくことはある。

あたしんちは、皐月みたいに養子ってわけじゃないけれど、うちの父にも母にも愛人がたくさんいる。

認知して引き取った子だけで、男7人女5人。

一応あたしは、本妻である母と父の子らしいけど、本当かどうかも分からない。

ただ力が強いから重宝されていたんだと思う。

「あなたなんて力だけのくせに」

そういう１０も上の姉

「三」の字を背負う者

あたしのいないところで罵る、弟や妹、兄・・
だから愛されたい愛したいなんて思わなかった。

愛は、破滅への序曲。

愛されたいという思いは忘れてしまった。

愛したいという気持ちは、なかった・・ハズなのに・・

自分で自分が分からない。
あたしは幸せになっちゃいけないんじゃないか

前世とパラレルワールドの私を思い出して見て
ますますわからなくもなった。

だってどの世界も私はこの世界より愛に恵まれてたから。

そして異世界の自分に嫉妬する。

こんな赫く血塗られた手であの人に触れていいのだろうか？

「三」という字を背負う者　その1

「三」という字をもつ者

－1－

≪ｓｉｄｅ　由宇≫

「あいつら、今日くらいは来いって言っといたのに…

今日もさぼりやがってーーーーー」

冷ややかな目で周りに見られつつ、叫んだのが、あたしこと

神無月　由宇だ。

あたしは普通の金髪に金瞳だと思うんだけど

ユエいわく

【輝く黄金の髪に、瞳はすべての輝きを集めたようで、

ツインテールにされた髪の印象か

元気いっぱいひまわり娘に見える。

とてもスタイルが良くて、幼くも大人っぷくも見える。】

らしい。

ほめるくらいならあたしの苦労人体質どうにかしろって感じだけど

それはまた置いとこうか

で、

あたしの怒っている理由なんだけど…

親友の海依と皐月今日もさぼりやがっただよーーーーーーー

今日は来るように言っといたんだよ

今日は現世での実習で3人1組だからさぁ

周りは先生のしたことが響いて尊敬の目はいいとして、

あたしと比べられてもかわいそうだしねぇ

いないやつのこと考えてもなんだけどさ

真面目なあたしはまだ勧誘されていないのに、

なんであの二人には来てるわけ？

しかも2人ともサボり中

現世ではサボり多かったけど、あれは仕事があったからだし3人ともあたしに迷惑かけないようにサボれよ

まったくもう

というわけである。

仕方なく1人でやることにして

現世へとここにいるものは向かうのであった。

まぁ省くが無事終わった後そろそろ帰る時間帯の時それは起こった。

きゃーーーー

悲鳴がみんなの耳に届いた。

その先に見えたのは虚にもう半分喰われ、上半身が虚の口からはみ出していた。

顔で分かった。

それは今回の六回生引率者の一人・田沼だった。

その虚は巨大虚（ヒュージホロウ）だった。

一回生（あたしを除く）は大パニックだし、

他の六回生も頼りにならない

そんな状況下

3名のうち1人の田沼につづきもう一人も引き裂かれた。

のこり一人の六回生の中田が

「救援依頼!!救援依頼!!六回生の中田です、虚が…

ガしゃっ

肉は引き裂かれほおり投げられる。

もう残りは1回生だけ。

あんまり、実力見せたくなかったけど
丸一年近く学んできたクラスメイトを見殺しにするのは
嫌だしね
仕方ない。
あたしがなんとかするか。
「俺らも殺されんのか？」
「そんなの嫌だよ」
不思議と入るいやそんな中冷静だからこそ入る言葉や叫び
冷静なあたしの声が不思議とよく響いた
「みんなは逃げなさい。
あたしが全部引き受け
「無理に決まってるじゃない！！
まぐれで先生に勝ったからって、
こんな大きい巨大虚にかなうわけないでしょ」」

あはは

あこがれの目で見ていてもやっぱりまぐれだと思うか

だがここで口論して暇はない

「大丈夫よ。あ、あなたたち登録してない浅打だから門開けられないのよね。

仕方ない」

私は鏡門　を張る。

（きょうもん）

「この中なら当分大丈夫だから」

そしてあたしは静止の言葉も聞かずに走り出した。

≪ｓｉｄｅ一回生の一人：八音（はつね）≫

必死に止めても走りだしていく神無月さん。

確かに彼女には実力があるのかもしれないでも、

巨大虚を一人で相手するのは隊長、副隊長、３席クラスだ。

普通の虚や実習用虚とはわけが違う。

走り出す、神無月さんの手には明らかに浅打とは違う刀が握られていた。

まさか…

「“雷をあげろ、雷覇”」

それは彼女自身の斬魄刀。

しかもしたのは始解。

どんな能力かはここからはわからないし、遠いけどここから見た限りでは刀に変化が出たようには見えない。

でも明らかに相手を圧倒し倒して行っていた。

レベルが違いすぎる

そう思ったんだ

それと同時にもしかして如月君や大道寺さんも同じくらいの実力を持っているのかなと思った。

《ｓｉｄｅ由宇＆ａｍｐ；作者》

金色の柄の由宇の斬魄刀。

鍔は　雷を示す

文様だ。

《卍解の卍》

そして、鞘は山吹色である。

キラリと銀の光りを放つ銀細工の鎖のようなブレスレットは

所々に黄色のトパーズがついている。

これが彼女・由宇の霊圧制御装置であるのだが、

それはおいといて

「“雷をあげろ、雷覇”」

あたし一由宇一のメイン斬魄刀だ。

そして永年の相棒で唯一無二のパートナー。

もう一本の“迅雷”はあくまで能力補助

(元々はあたしが唯一血の繋がった兄と認めた彼“日向(ヒュウガ)陽(ヒナタ)”の守護精霊だった……)

単体の能力では遥かに劣る。

どちらも　雷光系で、始解での外見変化は全くしない。

次々と倒しているのは広範囲瞬時の高圧電流で動きを麻痺させ、

一気に片付けていき

あっという間に倒してしまう。

「ふぅ

終わった」

そして遅すぎる救援が来たのは

あたしが倒し終えた後だった。

《ｓｉｄｅ雛森＆ａｍｐ；吉良》

その連絡は突然だった。

救援依頼が来た。途中で切れたそれ
早く行かなくてはと思った。

吉良君に一緒に連れて行っ
てとたのんだ。

――――――だって
・・・

あの時と
状況が全く同じだから――――――

でもついた時に目にしたのはあの時とは全く違う光景

見えたの2人の死体と鏡門に護られた
無事な人達

私ほっとしたなぁ
でも虚がいつまた出るか分からない

状況把握しようと口に出した途端の
巨大虚
の言葉。

それを口にしたのは
強い勁い光を瞳に秘める金髪金瞳の少女

僕は彼女の名乗った神無月　由宇　という名前に聞き覚えがあった。

入学時に問題になった3人の一人

そして一番真面目だという噂の彼女。

倒したっていう本人は私よりは体格がいいけど
華奢でとても見えなかったし

性格がきつそうだなって思っちゃった。

のちに思うことになるんだけどね
なんでそんな強い勁（つょ）い目ができるんだろうって

そして
僕は
吉良君は
隊に勧誘してた。

《ｓｉｄｅ　由宇》

訪れた死神は、

薄い金髪に青灰色の瞳に【三】の副官章をつけた青年
と
黒髪を後ろでひとつのおだんごにした小柄で茶色の瞳をした同じく
【五】の副官章をつけた女の子。

あんまり資料とか噂で人を判断しないあたしでも
彼らが誰かくらいは知っている。
あたしの後ろでも

「吉良…副隊長…雛森…副隊長」

そう

三番隊副隊長吉良イヅルと
五番隊副隊長雛森桃。

「これはいったい何が…

「虚ですよしかも巨大虚。」

「巨大虚ですって!?!!

どうしたの?」

淡々とあたしは事実のみを述べる。
残念ながらの先輩の死亡と
巨大虚は倒したことを

「巨大虚を院生が：ですって？」

「倒したのはもしかして君なのかな
ずいぶん淡々と話してるけど」

「そうです
あたしです。

死んだことは変えようがないですし
報告はちゃんとしなきゃダメでしょ」

はっきりいって

あの先輩気にいらなかったし……

まず公私混同に

あからさまな貴族贔屓

そのくせ実力がない……

真っ先に逃げようとしてたし。

「君名前は？」

「神無月　由宇です」

この吉良って人

反応からしてあたしの噂を知ってたはずなのに

噂だけで人を判断しない：か

そして　あたしは三番隊に勧誘されたのだった。

「三」という字を背負う者　その2

「三」という字を背負う者

―2―

≪side　由宇≫

まぁ先の二人の試験はなんやかんやあったけど終わりましたよ

お姉さん

皐月のには

思わず　・・・・　でしたけど

口に出したくないので

気になる人は皐月の話を読んで

はぁ

で

頭を切りかけるとして次があたしなんだけど

相手？

興味ないし

霊圧高くないし

吉良さんはいい人そうなんだよな

いい人すぎて逆に貧乏くじひかされそうなタイプだよねぇ、あれは

あの隊長とかそうでしょ

市丸ギン隊長だっけ？

あの人絶対自分の好きなもの以外何も興味ないタイプだよ

大切なもののためなら手段選ばなそうだしね

大切なものと自分なら自分を捨てるタイプ

ひょうひょうとしているようでどこかに芯があるタイプよね

“あたし”の記憶による分析からすれば…

まぁ、あたしの実力を認めてくれた人だし
イヅル君に免じて

あたしも一応信じてあげようじゃないのさ

え？

試合？

たった今始まったとこだけど？

相手は名前は知らないけどとりたてて特徴のない３０代前半くらいに見える男

霊圧は中の下もしくは下の上

　虚でいうとＢ～Ｃ（雑魚虚とか賞金付き虚）くらい？

はっきり言ってヨワいよ

あたしの相手としてはさ

あっちなみに

イヴル君とか副隊長がだいたい中の上から上の下で
　虚で言うとＳＳからＡＡ

隊長さんたちは上の上または上の中

で、もっちろん海依と皐月は上の上のトップクラスだよ。　うん。

あたしがよけている最中、

　半分無意識でーす

「まだやってる

　よかったーーーー」

はーぁーーーーーーーー？

来たのは

同じクラスの初音ちゃん

何か知らないけど懐かれちゃったのよねぇ

「すいません

見学させてもらいます

頑張ってーー　由宇ちゃん」

見た目私と同い年くらいなんだけど

なんか実の妹より妹らしいんだよね

いや

あたしの妹可愛げ全くないけどさ

ーーーーーーーーーー

≪この間もひたすら不意識に攻撃をよけ続け、体術による反撃をしてます。

手加減というより無意識です≫ーーーーーー

というか血がつながっていると思いたくないし

まだ話してなかったよね

あたしの家マジで泥沼家庭。

片親違いの兄弟盛りだくさん

しかも認知した奴だけなのに

あたしのぞいて女5人男7人。

父親も母親も愛人作っているし、夜遊びはするは

反面教師ってやつかああはなりたくないね

まぁもともと政略結婚なあたしの両親で

結婚する前にすでに何人も孕ませてる父親っていやだよねぇ

兄弟仲はあたしは最悪なんだけど

全員あたしとは片親違い。

名字は一緒だから、怪しまれないよう別々の学校に通ってたけどさ

一番年上なのがあたしの１２歳も年上の異母兄・充（ミツル）

次に１０年上の異母姉・艶香（ヨウカ）

つづいて

５つ上の双子の異母兄、実（ミノル）と旬（シュン）

でこの後に生まれたのが

あたし、由宇

あたしだけがこの夫婦本来の子ってどう思うよ

あたしが生まれた後はもうこの夫婦離婚してないだけでもう悲惨悲惨

上の兄姉みんな母親違うしさ

で下に

２歳下の異父妹・愛
４歳下の異父妹・恋

６歳下の異母妹・絵依

６歳下の異父妹・憂（ウィ）

８歳下の異母弟・昭夫（アキオ）
９歳下の異父弟・治
１０歳下の異母弟・昭継
１２歳下の異父弟・健

母親が生んだのは全員認知せざる得なかったけど、

父親はそこらじゅうで種撒き散らしてたらしいし（下品ですまん）

ん？

こないだ唯一兄と認めたって言ってた

日向（ヒュウガ）　陽（ヒナタ）がいないって？

陽兄は正式に認知されていないんだよね

うちの神無月の下位分家の母親を持つんだけど

認知されていないだけで周りには周知の事実なわけよ、うん

で認められていない理由は簡単。

・・・・・・

雷術が使えないと思われていたから。

あたしは知ってたんだよね

たぶん、陽兄が一番あたしを除いた兄弟で力を持ってるって。

薄い茶色の髪に、黄色の瞳を持っていた兄。

生まれた時、雷術を使える子供は生まれる時雷に包まれていて、

母親が雷術師でない場合

ほぼ１００％死に至る。（これは、同じ攻撃的な炎でも怒るのだ

が、）

必然的に引き取られた異母兄弟すべてが母を亡くしている。

逆にいえば引き取られていない異母兄弟は雷術の才能を持たなかったということだ。

まぁ、本家出身と思えないくらい父の力は弱いし、母も上位分家出身なのにお世辞にも強いとは言えないしな・・・・・

話は脱線したが、もう一度言うけど

雷に包まれて生まれてこなかった陽兄だけど、

あたしは知ってる。

彼の才能があたしの次に強かったことを

でも、

とてもとても

体が弱かったことも・・・

雷の精霊たちが陽兄を思って姿を現さなかったことも

あたしは知ってた。

知ってたんだーーーー

（回想）

あれはあたしが3歳か４歳。

このころから、あたしはあらゆる面で秀でていたし、頭もよかった。

ただ興味があることしかしなかっただけで

あたしより遥かに可愛がられている妹が生まれた

（当時のあたしが思っただけで、ごくごく普通、

霊が見えるだけに子供を堕ろすのが怖いだけだったらしい

兄弟すべてほとんど使用人に育てられた）

すぐ後、

っ

何かに苦しむような

痛がるような

そんな　　声なき叫びが聞こえた気がした。

（今思うと、無意識に精霊の声を聞いてたんだと思う）

あたしがそこにいくと大勢で自分より年上の子供が寄ってたかって一人の子供に手を挙げていた。

ぼろぼろで

薄い茶髪の髪は土に汚れ

ただその黄色の瞳だけはまっすぐで

どこか憐みを含んでいた。

「何してるの？」

（まだまだ当時のあたしはまだ誰かに愛されると信じていたし
姉や兄が態度が悪いのは自分が悪いと思っていた。）

「・・これは、神無月の由宇さま。

由宇さまの気になさることではありません。」

敬語を使い話すのは自分より年上の（１３、４歳）の少年。

「こいつはな、由宇さま、

高貴なる雷術師の血を引きながらの落ちこぼれ。

この家の恥知らずなんですよ。」

別の少年が言う。

（こんな家で育ったあたしがまともな感性に育ったことは誇りに
思いたい。

今思うと、使用人のあたしを育ててくれた人が　本当のお母さん
みたいだった・・・）

だから

「それがどうかしたの？

逆に聞くけどあなたはどうなの？

あたしに勝てるようになったら言ってよ。

命令よ　目障りだからどこかにいって」

それが、あたしの

兄・日向　陽（ひなた）との出会いだった。

「ありがとうございます

由宇様。」

「様なんてつけないで

由宇でいい。

ねぇ　聞いていい？

なんであの人たち馬鹿なの？」

「馬鹿って・・・（呆）」

（このころはすごい素直だったよ、うん）

「うーん、そうですね。

自分の取り柄がこの血を引いていることしかないからじゃないですか？

学校で成績は僕のほうが秀でていますし、先生受けもいいですしクラスが僕のほうがランクが上ですし」

「そんなことで？

よくわかんないな

お兄ちゃんはすごく優しそうだし、

たぶんあの人たちよりずっと由宇は好きだよ。」

「そう言ってくれるとうれしいです。」

「ねぇねぇ　お兄ちゃん名前は？」

はにかむように笑って言った

「日向　陽（ひなた）といいます」

「ひなたお兄ちゃん？

ひなたってどうかくの？

こう？」

“日向”。地面の砂に向かって書く。

「いいえ、それは名字のヒュウガで

ヒナタは」

“陽”

「わかったーーー

お日様の陽だ。

ねぇねぇ　暇なときでいいから由宇と一緒におしゃべりとかしてくれない？」

まだこの時彼が異母兄だということは知らなかった。

（この時のあたしにとって陽兄は、とってもやさしい　親戚のお兄ちゃんだった）

そのあとすぐに疑問に思ったものだ

「でも、ひなたお兄ちゃん、

潜在霊力すごく強かったし、精霊たちもひなたお兄ちゃんに優しかったよな～～」

リンチの際、精霊術の名残も残っていたのに、

筋肉が少しまひしたくらいだった

ヒナタお兄ちゃん

この時はこれくらいしかあたしは理解していなかった。

（あたしが陽兄が実の兄にあたることを知ったのは

噂のせいで

ご丁寧にお姉さま（皮肉）は肯定してきたのだ）

はじめて会った時、由宇４歳・陽１２歳

知ったのはすぐ後だった。

でも知ったあたしが思ったのは

ヒナタお兄ちゃんが本当のお兄ちゃんなんてうれしいっ

だった。

知ったあたしはすぐにひなたお兄ちゃんの霊圧を探り、お兄ちゃんのところに急いだ。

そこで見たのは

兄にあたる長兄・充が、

大好きなひなたお兄ちゃんを傷つけているとことだった。

（あたしが家族に何かを求めることをあきらめ始めたきっかけがこれだったのだと今のあたしははっきり思う）

とてもこのころのあたしにとって怖かった

恐ろしかった。

あまり話さないしよく邪険にするが、兄にあたる充が、

ひなたお兄ちゃんに

本当の弟にあたるひなたお兄ちゃんに

暴力をふるっていることが

この前のリンチよりずっとずっと

怖かった。

だから　立ち止まってしまった。

聞きたくない声が耳に入る。

「てめぇ

いい気になるなよ。

後継者決定の　あの由宇に気に入られたからっていい気になるなよ。

この屑が

無能なお前か

まぁ、化け物の由宇にはこんなやつしかいないのか」

「由宇・・・は化け物じゃありません。」

「化け物を化け物を言って何が悪い。

いつもへらへら笑って

人の１０歩も２０歩も届かない先にいって

あの年で、前当主よりも力をつけて

化け物じゃなくてなんていうんだ？」

「由宇は、　由宇です

話せなくても

由宇は、僕の可愛い妹です。」

「俺の妹を妹ねぇ

いい気になるんじゃねぇよ

認知もされなかった

神無月の恥さらしが」

可愛いー妹ー

そう言われた時

言いようもないほど

うれしかった

化け物扱いされたのは

悲しかったけど

だから…

「充兄様。

ひなたお兄ちゃんに何してるんですか?」

「ん? 礼儀がなってなかったんでちょっとね」

たぶんあたしの気配にきづかなかったのだろう

すっとボケたことを言った。

「もう　兄様とよびません

充さん。

金輪際ひなたお兄ちゃん

陽兄に近づかないでください

あなたも　化け物には近づきたくないでしょう」

そして　陽兄と一緒にそこを立ち去った。

「・・いいの？

　こんなことして」

「いいんです。

　あたしの　由宇のお兄様は

　陽兄だけで」

「　そっか・・知ったんだね。僕のこと」

「あたしを可愛い妹と言ってくれる陽兄がいるだけで

あたしは　いいの」

（それから

　４年間

　本当に幸せだった。

これが幸せなんだって思ったよ

陽兄とあってから入った聖クロス学園幼稚舎では、今の朋の海
依と皐月に会えたし

このころのあたしは

今もそうだと思うよ）

あたしが８歳、陽兄が１６歳の時

あたしに訪れたのは永遠の別れだった。

あたしは見ないようにしていた

ときどき調子を悪くして血を吐いた陽兄を

年をとっても華奢な陽兄を

だから、　今もあたしは悔んでる。

陽兄が望んでも、

一緒に行かなきゃ良かったって

あの日、あたしがようやく任務に慣れてきたころのこと

あたしが任務をしだして1年。

慣れ始めて逆に危ないそんな時期だった。

陽兄があたしが任務しているところを見たいといった。

そして行ったんだ。

もしもなんてないって

あたしがいるんだからって

（今思うけどそれは過信だった。）

任務内容は終わったらすぐに忘れるけどこのときのだけは覚えてる。

吸血鬼並びにその兼族の退治。

兼族すべてを浄化の雷で倒し、

少し気を抜いてしまったその時。
あるレベルを超えた一握りの吸血鬼が持つ力。
それにより地獄の業火の刃があたしに襲いかかった。
やられる
目をつぶったあたしの耳に
やわらかい
肉をひきさく音が聞こえた。
あたしの鼻に
肉が焼ける匂いがかおった。
でも、痛みを感じなかった。
瞳を開けると、
あたしをかばって

背中に大きな傷跡を負った

最愛の兄

動揺したあたしの首筋を狙う吸血鬼。

「……っ僕の、お俺の妹に手を出すなーーーーーーーーーーーっ」

吸血鬼に向かって墜ちた青白い雷。

ーーー命を削り取ったそれーーー

「陽兄ぃ・・何やってるの？

あたしのへまなのに」

「いもうとの失敗は…兄が取り消す…ものだろ？」

理解したくなくてもしてしまった。

体の弱かった兄。

精霊は彼をすいているのに声をかけようとしなかったこと

導き出される答えは　ただひとつ

力に耐えられる

器

ではなかったということ。

力がないと思われ、つけられなかった制御装置。

逆だ

強すぎる力は、弱い体を蝕み、命を削った。

精霊はそれの負担を減らすため

どんなに望んでいようと

陽に力を貸さなかった・。

それなのにこの傷で

精霊術を使ったのだ

精霊術には精神力そして

雷術や炎術にはさらに情が必要だ

妹を守りたい、

その思いの強さがこの力を引き出した。

「いやだ、いやだ

信じない　信じたくない。」

天命には逆らえない

どんな術もそれを拒むことはできない

空間回帰も時間回帰も

彼の命を何より蝕んでいるのは、

彼自身の力と人の体にそぐわない - 神の - 血。

「大丈夫。また会える。

約束の証として

もらってくれ

僕の力の源を」

うっすらを彼の体から金色のらせんを描く光

それは、一つになり　雷をまとう鳥が現れた。

「僕の守護精霊のーーー」

そして　逝った。銀の光が粒子状となり彼の体から流れ出そして消えた。

「いやぁぁあぁぁぁぁぁぁあ!

行かないで逝かないで往かないで

陽兄様ーーーーー」

そしてそれから

約8年後あたしは死んだ。

今もなお

あたしは陽兄を捜している。

また、会えることを信じて・・・・・

その時から
何かを決めるその時に使うのは

こっちだ。

“雷覇”より短く細い刀。

デザインは雷覇と同じだ。

この刀は　迅雷。

陽兄に託された力の源。

たとえ解放しなくても
あたしは
あたしを見つけてほしくてこういう場で必ず使うのだった。

あたしは、意識しての試合を開始した。

向こうはもうバテバテだ。

相手の手を狙い、相手の斬魄刀を落とし、足で遠ざけ、顎を刀の峰で思いっきり打ち抜いた。

たぶん脳みそがグルングルンしていると思う。

ついでに電流も送っといたから

処置が遅れると死ぬかもね。

最悪の兄弟たちをも思い出し、機嫌が悪かったのが災いした。

そして

あたしは三番隊3席になったのだった。

―2―END

「三」という字を背負う者　その3

「三」の字を背負う者

―3―

《side　由宇》

これが起こったのは
あたしが三番隊三席になって半年程たった時
あたしには知らされていなかったけど
海依のや皐月のが
ばれたのと同時期。

「どういうことよ……
これ……？」

突然ですので、一時間前に戻します。

「何？吉良副隊長。

また隊長が脱走でもした？」

「いや、さっき君に貰ったあの札で、脱走阻止したからね。（疲れた笑み）

で僕は隊長から目が離せないし、

席官複数出すのはキツイんだ、今日は

だからこれ

一人で行ってくれるかな？」

「もっちろん

いってきますっ」

本気で疲れる……

けど

あたしだけじゃないしね

吉良君なんて

胃薬常備だし

で何々

任務対象は賞金あり虚を含む普通虚

つまりあたしからすると
B～D級虚二十数体かあ

あたしらや斑目除く他の3席だけじゃあまずいかさないよね
これ

普通なら安全策で上位席官を隊長にした小隊だよねぇ

すぐにあたしは出た。

今日、初音から聞いた話だと現世実習らしいけど
そこから1？くらいは離れてるし

このレベルなら1体くらいなら倒せるでしょ

と

何も心配していなかった。

そして今に戻る。

おかしい・・・・。

出現した虚が少ない。

報告の半分ほどしかいない。

とりあえずその場所にいた虚を倒し終えた後、気配を読んだ。

薄く薄く自分にしかわからない程度（いや、海依や皐月は気づくか）の霊圧を広げる。

これは、いわゆるＨＵＮＴＥＲ世界で言う円である。

他世界の自分が習得した技術で使えそうなものは使う。

ちなみにあたしは異世界の“あたし”と同じ半径２００?程できる。

が、

そこまで広げる必要はなかった。

１?程先に感じた。

それらの気配。

げっ

大虚（メノス）つまりＡ＋級が２体。

巨大虚（ヒュージホロウ）Ａ－級が…１２体か。

後Ｂ～Ｃ級虚が２０数体・・・か

あれ…この傍にあるのは数十の魂魄の霊圧…?

これは・・・・・・

うそでしょ

初音達のじゃないっ

気づいた途端あたしは奔り出した。

その瞬歩はとても早い。

ビルを飛び越えただただ一直線に…

（あと　２００ｍっ！！）

異常に発達しあたしの視覚が捉えたのは虚に襲われそうな生徒たちの姿。

ここからじゃ間に合わない・・

威嚇になればいい

そう思い、あたしは唱えた。

「破道の四、白雷」

指先から白い電光が虚に向かって向かっていく。

《ｓｉｄｅ　初音》

二回生になりました。

八城　初音です。？

普通の簡単な模擬虚実習だったはずなのに…

無事に終わるとを思ったのに…（泣）

なんなのさ

私たち呪われてるわけ？

やってきた虚の大群

またかよ・・（泣）

しかも今回は大虚もいるしぃ

せっかく由宇ちゃんが助けてくれた命もここまでか・・・・・・

私を含めみんなが諦めかけてた時白い光が襲ってきた1体の虚の頭部を貫いた。

「はぁ・・　はぁ・・

ま～たあんたたちなの？

ほんと　何かに憑かれてるんじゃない？」

懐かしい声が耳に入った。

由宇の声だ。

三番隊三席になった：

「久しぶりね。

さ、さっさと片づけましょうか」

いくら由宇でもこの量を一人では無理だと思った。

なのになぜか不安にならなかった。

ーーーーーーーー≪ｓｉｄｅ初音ｅｎｄ≫ーー

≪ｓｉｄｅ　由宇≫

あたしの感覚は間違っていなかった。

襲われていたのは元クラスメイト達。

憑かれていないとわかってるけど、憑かれてるんじゃないかと思ったよ、うん

さっさと片づけるといったものの…

“雷覇”持ってきていないしさ

“雷覇”なら始解でどうにかなるけど

持ってきたのは、“迅雷”。

始解じゃ少し辛いよ。

と考えつつ未解放状態で守りつつ初音たちを1箇所に集める。

「バレるのは仕方がない…か。

（陽兄、一緒に戦おうね）

卍解、紫電一閃」

雷をまとう大きな鳥雷鳥が現れ、その羽根が虚に当たると、虚は砕け消えていく。

１０分もしないうちに全てを倒し終えた。

後ろを見ると気まずそうだ。

うん体調は崩していないみたいね

ま、とっさに薄い結界はっといたしね。

「あーあ　隠してたのにばれちゃった」

「由宇ちゃん何時から使えるの？」

「ん？学院時代からだけど？」

これが原因であたしは零番隊四席になった。

ーーーーーーーーー≪ｓｉｄｅ由宇ｅｎｄ≫ーーー

ーーーーーーーーー≪再びｓｉｄｅ初音≫ーー

卍解・・・・

それが何なのかくらいは知ってる

それの持つ力も

別世界の人なのかなって思ちゃった。

羽が当たり、虚が消えていく光景

まるで、蛍が飛んでいるかのように

倒し終えた後なんだか気まずくて、黙ってしまった。

黙っていたのに、あたしたちのために使ってくれた、その事実がう

れしかった。

だって由宇ちゃんは由宇ちゃんだもんね

ーーーーーーーー≪ｓｉｄｅ初音ｅｎｄ≫ーー

ｅｎｄ

［私＝わたくしと読むべし］

今は、直系ということになっているけれども、　本当は分家出身なのですわ・・

「大道寺家の恥が」

念願の我が子が生まれてそういう義父

「皐月様」

実の母の吐いた言葉

多分私（ワタクシ）が最初にカイに近付いたのも、私はこの子より、不幸じゃないと思いたいからだと思います。

そういう　私が一番汚い

美月達を見ると、汚い私が浮き出すような気がして

でも・・目が離せなくて

「馬鹿なことをおっしゃらないでください。

隊長の貴方がいなくなってどうするんですか」

彼女たちが無事ならそれでいいと思ってしまう私を恥じた

私の言葉は、後ろめたいからこそ、棘が在るのかもしれませんわ

今でも私は簡単に人を信じることはできません。

いや死んで戻った前世の記憶で更に自覚しました。理解しました。

人は汚くて醜くて、

本当にイラナイものですもの。

私は本当に信じてるなんていえるのは、

永い前世を共にした美月と卯月、由宇と海依ぐらいです。

仲間っていってくれるのに

恋人って立場なのに

どこかいつか裏切られるんじゃないか
いつか捨てられてしまうんじゃないか
そう私は怯えてばかり・・・

傷つけられて
犠牲になって、
初めて人を愛して
失って
私は大切な人を作るのを恐れるようになってしまったんです
それでも護りたいんです
大切な人のいるこの世界を

こんな私を必要としてくれる人のために

「四」という字を背負う者　その1

「四」という字を持つ者

－1－

≪side皐月≫

「急がなくては…！！

完全に遅刻ですわ」

といいつつ走っているのが私(わたくし)ですわ。

私のこと知っていますよね（笑）

大道寺　皐月

普通に碧の髪と瞳をしていますわ

あのダメ管理人ことユエいわく

『新緑の碧の髪にさらにその碧に深みがかった碧の瞳、さらさらとゆれる髪はきれいにウェーブがかっていてとてもお嬢様という雰囲気である。

あくまで見た目はだが、

胸には、神を信じているのかロザリオをかけている。

その中心にも深緑の石がはまっていた。』

らしいですわ。

いっておきますけど私神はいると知っていますけど　大嫌いな存在ですの

十二神将と高？神（たかおかみのかみ）

あとその他諸々の特定の神は除きますけどね

私の前で神頼みなんて言い方しましたら堕としますわよ（黒笑）

ちなみに真央霊術院１回生ですわ。

わたくしをはじめ、海依と由宇はもう一日目に教員全てに勝ってしまいましたので、

私にしてみれば弱すぎでしたけど…

斬魄刀も卍解までできますし

由宇以外授業には出てませんから

テストができれば問題なしですし

でその間普通にサボりの海依と違い、

食事処～みやかわ～で働いているのですわ

で今、由宇のせいで遅れそうなんです！！

《ｓｉｄｅ　勇音&作者》

有名な食事処～みやかわ～に来ています。

ここそこまで有名ではなかったんですけどここ半年噂されている。

だから隊長と一緒に来たんです。

ここでとくに美味しいといわれている苺大福を始めとする甘味類、

すべての料理

噂によるとこれはすべてある女性の賜物らしい。

あくまで噂だし、たった一人のお陰でそんなことになるわけがない

と私は思うんですけどね

で来ているんですけど、注文してから

なかなか来ないんですよね？

そんな時、

裏手から声が届いた。

少し低めの女の人の声

それと同じくらいにガラの悪い男の声が近くで聞こえた。

「この店はどうなってやがる

この店の美味しいっていう大福に入ったこの髪の毛は」

空腹を感じる人の少ない流魂街では食事どころはどちらかというと嗜好品の毛が強い。

空腹を感じない人でも食べることはできる。

必要性がないけれども、霊力を持つ人間も2，３０人に一人いるしね。

多かれ少なかれ

霊力を持つ。

まぁ死神になれるほどの力を持つのはその一握りだが…

霊力を全く感じないことからして、嗜好品として、ね

どうしょう

最悪すぎる。

これで隊長が機嫌悪くなったら後が怖い…

（そっちかよ）

先ほどの声の主らしき人ではない従業員の女性が絡まれている。

助けてあげたほうがいいよね

悪化しないうちに

そう思い立ち上がろうとした瞬間

さっきと同じ声が聞こえた

≪ｓｉｄｅｅｎｄ≫

≪ｓｉｄｅ　皐月≫

あーー

ガラの悪そうなバカが来ましたわ

っていうか金目当てか女目当てよね

絡んでるのうちで一番か弱くて小柄な女性ですし

お店の営業妨害ですし

止めに行きますか

私の邪魔をする奴は骨の一本や二本は覚悟してもらわないますわ

（黒いよ怖いよ　ｂｙユエ）

そう思いつつ割烹着をつけたままでた。

下には学院制服を着たままである。

敬いたくはないが、

「お客様、どうなさいましたか？」

その男たちは私を満足した下卑た目で見ていた

気に入りませんわ

この視線

この目、

潰してやりたくなりますわ

（怖っ）

「この店の大福には髪を入れてんのかって言ってんだよ

外で言ってやろうか？

この店の商品は不衛生だってな

それとも、女を使ってみるか？」

本当に下品。

「あら。それが本当ならすみません。

それを作っているのは私です。

ですが、その髪どう見ても黒髪ですよね。」

「あ、あぁ」

女性のか弱さを全く見せない私に少し動揺したような相手に

私は精神的な圧力を付加する。

私は三角きんを外した

「ならありえませんわ。

私の髪はこの通り、翠色ですので。

ここでのこのいちご大福はすべて私が作っているので」

「くっくそ。

逃げるぞ」

男たちは走り去ろうとした。

「お待ちなさい。

御代は？

それに周りのお客様に対する謝罪は？」

「んなもんあるかよ。

たかが大福だろうが

それに周りだと、どこに迷惑そうにしてるやつがいるよ」

プチん

温和な私でも料理のことを侮辱してしかも

他人の迷惑を全くわかっていない。

堪忍袋の緒が切れましたわ

その思いを抱きつつ、後で血で汚れないようにエプロンを外した。

この制服を見れば普通の人はこの意味がわかるだろう

しかしこの男たちには分からなかった。

それがその男たちの不運だっただろう。

「なら実力でねじ伏せます」

「『実力で』だと、

女が俺に敵う筈がないだろうが！！！」

男たちが襲いかかってくる。

「あぁ、申し遅れましたね」

周りの奴らを一撃で倒していく

「真央霊術院一回生一組

大道寺　皐月。」

客の中には知っていた者もいたようだ。

すごく驚いていた。

「マジかよ。

大道寺って、たしか一回生で主席。

入学してわずか一日で先生もかなわなくなったっていう

天才の一人だぜ」

あぁ　天才なんて言葉嫌いだ

自己紹介が終わるころには相手の意識はすべて途絶えていた

あぁもちろん殺していませんよ

ボスの肋骨数本は折れたかもしれませんが

自業自得ですわ

≪ｓｉｄｅｅｎｄ≫

≪ｓｉｄｅ卯の花≫

あの実力、普通に席官と戦えるクラスはありますね

それに先ほど掴まれていた時の手の怪我を手当てした治癒霊力。

ほしいですわね。

その子にたいして上位席官用入隊依頼者を渡したのは言うまでもない。

おまけ？

「私（わたくし）も四番隊入隊に決まりましたわ」

「えーーーー

じゃあもう決まってないの私だけじゃんか～～～」

―1 end-

「四」という字を背負う者　その２

「四」という字を背負う者

- 2 -

≪ｓｉｄｅ　皐月≫

今日が入隊試験日ですわ。

全く心配してませんけどね

私も　由宇、海依達も

実力がわかってるはずなのに、六回生の後というのもいいでしょう

まぁ弱い奴に実力を見せる必要なんてありませんもの

一人目は、海依。

結果は思った通りの圧勝。

もっと怪我させてもよかったのに・・

あのおなかの傷、少し深めですけどいたって治療しやすいように傷入れてますし。

ていうか、本当にあれで3席ですの？

弱すぎですわ

そう思いつつ大前田3席のほうに向かう。

「どうしたのじゃ、お主。」

総隊長が聞いてきた

決まっているが、まぁ私たちがどれかわかってないのだろう。

「治療ですが？

それに私の名前はお主ではなく大道寺皐月ですわ。」

そして私は治癒霊力を使った。

私の霊力は少し特殊だといっていた。

治すときは糸状となりまるで蚕のように集まって行く。

こういう治療のとき目をつぶる。余計な感情を入れないためだ。

だから終わったと同時に目を開けた。

「その治癒霊力申し分ない。

たしか、四番隊希望じゃったな。

合格じゃ。」

そういった直後、十一番隊の3席の斑目一角が、

「よかったよなぁ。

四番隊みたいな　ラク　な隊に入れて……」

私は少しその言葉にキレた。

「貴女、斑目三席でしたよね。

そうですわね。あなたがたのようにすぐに怪我する人がいなければ楽でしょうね。

まぁろくに自分の傷を自分で治せない人には言われたくありませんわ。」

当然反論してきた

「そっちこそ、どうせ碌に戦えないんだろっ」

しかしその言葉は皐月の最後の一線を切った。

「そんなに言うのでしたら戦ってみます?

それとも、私に負けるのが怖いですか?」

「おもしれーやってやろうじゃないか」

すると総隊長が、

「ぺいっ　やめんか。やるなら試合で

「じゃあそれでやります、さっさと始めてください」

わかった

大道寺皐月　対　十一番隊三席斑目一角

試合　初め」

試合が始まった。

後ろのほうでは「あーあ、あの一回生可愛そ、余計なこといい過ぎだぜ」とかいう声が聞こえてきた。

私（ワタクシ）は、とても小さな声で始解の解号を唱えた。

「惑わせ、花音」

私の真名と同じ名を持つ私の斬魄刀。

緑の柄（つか）に鍔は花のような形でこれも色は淡い緑。

そして柄からはリボンのように白い飾り紐が巻かれ結ばれている。

それを包む鞘は、深緑色。

長さは普通の斬魂刀と同じか少し長いくらい

もう一本ありますけど、こちらは完全に後方支援用。

花音の能力は、植物に関する多くのこと
私は主に、花の香りを使う。
今回使う香りは麻痺効果を持つ香り。
始解すると同時に、白い飾りひもは緑に染まる。
効果範囲は、人にも効くで、半径５ｍくらいかしら
今回は刀の周りに漂わせるだけでいいか
固体にすることも、液体にすることもできますけどね
ちょっと体が動きにくくなる程度の麻痺毒にしようかな
（それは、皐月様にとってだからーーー
＜泣っ＞
皐月を始め、海依・由宇・美月・卯月には毒などに対する耐性を
拷問訓練でつけていて、
象が数ｍｇで死ぬ毒でも平気です。
一族皆も付けていますが、彼女たちには及びません
５人＞＞＞＞＞他一族＞＞
全体的にその基準が高くて対一族レベルにしています。

皐月さんの斬魄刀の香りは自分にも香っています。が、自分の作る毒の耐性は使う前につけています。

一般にあるどの毒とも成分が違い、彼女にしか解毒剤が作れません

ｂｙユエ）

白い糸状の霊気が刀を覆い消える。

「なんだかしらねーが、始解できるなら・・・

こっちも使わせてもらうぜ、

身の程を知れよ、

“延びろ、鬼灯丸”

見余るなよ」

能力解放と共に柄と鞘が繋がり菊池槍（穂先が片刃の短刀状の槍）へ変化する。

槍ですか

あと勘ですがこれだけではありませんよね

器用に考えながら攻撃をよける。

香りの効果範囲狭めだから離れすぎないようにしなきゃ

なのでほとんどつかず離れずだが

想像より切り返しが早く

とっさに刀で受け止める。

「さけろ、鬼灯丸」

柄を分割し三節棍へ変形する。

「（っ、三節棍）」

変形し、懐に入ってくる攻撃をとっさに刀で受け止める。

「さすが、三席ですね。でも」

腕で棍を受け止めなおした後、片手に持ち直した刀で相手に切りつけた。

向こうもよけたのでかすっただけだがそれで十分。

香りをかぐだけでは数分聞くのにかかるが、体内に直接入れれば

それは

速効性だ。

がくんと崩れ落ちる。

（皐月基準にとっては動けなくなる程度でも

耐性の全くない人間にとっては筋肉麻痺を引き起こします。）

「何しやがった…」

「麻痺毒ですわｖｖｖ。（すっごい機嫌がよさそうな笑顔をしつつ）

いつも塗ってるんですｖ（大嘘）

ちなみにいうと、虚にも効きますよ

それ私が調合しているんで解毒剤私しか作れませんよ。」

「はぁ？

それを扱うお前も危険があるんじゃないのかよ。」

「だって毒に耐性ありますからね。

どうします？

筋肉麻痺結構ひどいみたいですけど」

自分がやったくせに他ごとのようにいう薄情者1名。

「わかったよ。今回は俺の負けでいい。

馬鹿にした俺が少し悪かったからな」

少しねぇ

まだ気は収まらりませんが、

まぁいいでしょう

私の勝利に変わりないですしね

おまけ

斑目に皐月はある袋を渡した。

「なんだ、これ？」

「解毒薬です」

「はぁぁぁ？
持ってないんじゃなかったのかよ。」

「持ってないなんか言ってませんが？

毒を使うものが解毒剤を持て歩くのは常識ですわ。」

味方を巻き込んだときとか

哀れ、一角。

心理戦の得意な皐月さんの黒い一面だった。

≪ｓｉｄｅ　由宇≫

相変わらず苦手な戦い方をするやつねぇ

皐月のやつ。

皐月の逆鱗に触れた斑目も悪いけどね

皐月が切れるとやっぱり怖いわ

絶対零度の笑みってやつ

これ以上切れたらもっと怖いよね

次はあたしかー

吉良さん可哀想だし、絶対勝たなきゃな

心配はしないけど、力加減がめんどいしね

これからも皐月に心配とかかけないようにしなきゃな

毒舌で

冷酷に見えるけど

本当はやさしいからな

皐月も海依も大好きだよ

いまも前世（むかし）も

ずっと大切な朋友（とも）だよ

—2end-

「四」という字を背負う者　その3

「四」という字を背負う者

- 3 -

≪ｓｉｄｅ　皐月≫私＝わたくし

三席になって半年が経ちました。

「お呼びですか？

卯ノ花隊長。」

卯ノ花隊長は、永年生きている私でもある意味敵わないと思わせるすごい人です。

私の人生経験値がえっと２０＋２５＋１８＋約２００＋２０＋２５＋１７＋４０＋

１７だから約２８０年以上だけど
これは前世の分だけですけど

パラレル世界の自分の記憶もあるけど同じ前世を持つ全くの別人のようなイメージが強いですし。

前世の記憶があるぶん人を完全に信用することが困難です。

誰も私が完全に信用していないことに隊長は気づいています。

だれも、私と同じ境遇の由宇達しかしらないのに、ね。

私は人間が嫌いいや、醜いと思います。

いやそう識っている

それでも完全に人を嫌いになれないのも事実ですから

同じように生きてきた由宇よりも海依よりも、美月よりも卯月よりも

私が人というものを一番好きになれません

それでも一部の私の大切な彼女らのために
なにより自分自身のために
私は闘うんです。
力が無いことの虚しさを知っていますから…

――――――――――

「えぇ、実は皐月に頼みたいことがあるんですの。
実は、任務ですの、虚滅却の
元々は、十番隊三席の任務でしたが、彼女が風邪で寝込んでしまったそうです。」
ニコニコと笑いながら隊長は言った。
お願いでありながら無理と言わせない威圧感である。

後ろには黒いものが見え隠れしている。

「なんで四番隊がですか？」

「あなたが適任ですの。おねがいしますね」

「…　はい」

最初の無言は、無言の要求ですけど

笑ったままの脅しにはなれませんね。

いつまでもなれませんわ

私がする側ですので

まぁ、いいでしょう

幸い、一緒に行くのは十一番隊六席らしい。

たしか、入隊試験のときいなかったですし

適当に楽しましょう

「あの～、来ましたが」

「あぁ？

お前が四番隊三席の…名前なんでしたっけ？」

一応地位が上で初対面なので私に対して敬語を使っている。

「大道寺　皐月です。

阿散井　恋次君でしたわよね

今回はよろしくお願いしますわ」

「あ、恋次でいいっすよ。」

彼の頬が少し赤くなったのには気づかないことにした。

自分の容姿が平均より上だということくらいは知っている。

（いや、特上ですから　ｂｙユエ）

生前も学院でもモテていたしね。

「そう、分かりましたわ」

「＜開錠－＞」

現世への門が開く。

久しぶりの現世へと降り立つ。

由宇や海依と違い、あまり戦闘には関与しない隊である皐月は霊術院の演習も行かなかったので
死んでから
一度も現世に降り立ったことが無かった。

だから一年半ぶりだ。

現世にいい思い出は少ない。

ただ一人の親友であった彼女のことだけは気がかりだけど…

任務内容はすべて暗記してきました。

2~3回読んで

内容は虚の滅却・昇華。

数は推定約20匹

本気出さなくても、これぐらい片づけられそうですけど、
始解の能力はなんだかんだ言って由宇達以外まだ知られていませんし
やはり援護ですませましょう。
あっ、後ろに虚が出現しましたわ。
「くっ“吼えろ、蛇尾丸。”！！」
弱いふりをするためわざと腕にけがを一つ負う。
あぁ
けっこう深いし
かなり屈辱的なんですけど
後で、由宇で発散しますか↑ひどっ
「そっちよろしくお願いしますわ」
私と恋次の割合は2：3。8匹…。一気にじゃない剣だけでねじ伏せますか
多少弱いふりをするため（平均的以下の三席くらいに）

傷を負いつつ、片づける。

すべて倒し終えたとき、けがの量は、右腕（…利き腕は痛いわね。）に2ヶ所の裂傷。肩に1ヶ所の裂傷・・・

恋次君も両腕をけがしている。

ちょっと弱いふりしすぎましたね。
（それでも上位席官レベル）

2人で帰ろうとしたその時、巨大虚の気配をすぐ近くに感じた。

これは私たち精霊術師特有の感覚ですけど、もう生前から癖になってますね。

まぁ一番海依みたいな風術師が一番そういう感覚が強いんですが直前まで位置を消せるらしく私でもわからない。

海依ならわかるんですけどね、多分

「どうしたんすか、皐月さん。」

「静かにどこからかは分かりませんが来ますわ、これは、巨大虚ですわ」

言っている途中に虚の腕が恋次の腹を突き抜けた。

「恋次君大丈夫ですか？」

息苦しそうに大丈夫と答え逃げろという彼。

いつまでも私の甘いところ。

少しでも自分と一緒にいた人が傷つけられるのは・・嫌ですわ。

私は、自分の中で決めたことを破った。

私はある言霊を唱えた。

「私(わたくし)を怒らせましたわね。

そのことを後悔するといいわ。

行きますわよ、“花音”

“咲き誇れ、初音（うつつね）を聞かせよ卍解白虎百花繚乱”！！」

薄い白がかった緑の霊気を持つ白い虎が現れた。

これが私の魂の片割れ“花音”の本体である。

始解でも別に大丈夫ですが、最大限の苦痛を一瞬で味あわせるなら、卍解ですわね。

「この者の体を土に…

いえ粒子も残らないよう粉々にしなさい」

花音の一吠えで周りの数体が掻き消えた。

なお、このことが原因でばれて零番隊になったのは言うまでもない。

―３　ｅｎｄ―

光と闇の狭間　序章　と第一話　変革の時（前書き）

注意！！！！！

ブリーチ連載の須王修宇と神代魅が主人公デス

光と闇の狭間　序章　と第一話　変革の時

光と闇の狭間

≡序章≡

２つの場所で別れた
二組の男女

ひとつは北流魂街８０地区更木

ひとつは西流魂街１区「潤林安」

「魅。
どうしてもなるんだな
死神に。」

「うん」

薄い茶色の髪をおさげにした17程の少女・魅
と14，5に見えるアッシュの色の髪の少年・修宇。

「いってくるねー
しろちゃん」

「おぉーいってこい
寝小便ももー」

どじそうな小柄な少女・桃と小さな銀髪翡翠瞳の男の子・冬獅郎

今物語が始まる

魅にとって少年が全てだった

桃にとって死神になるのは最初は護るためそして
憧れの人に会うために変わっていったのだった

修宇にとっても魅と同じはずだった

冬獅郎にとって
桃は大切な幼なじみで姉で妹だった。

今交わる

このことを聞いた時

心臓が止まるかと思った。

第一話

変革の時

《ｓｉｄｅ　神代　魅》

私は神代　魅。

真央霊術院４回生特進学級に入っています。

同期はうーん皆が知っている人なら

阿散井　恋次

吉良　イヅル

雛森　桃

かなぁ

あっ別学級もいれるなら

朽木　ルキアさんも同期かな

故郷と呼びたくない場所

更木から離れて

早くも４年目である。

唯一の心残りは、残して来た
大事な
大事な
家族であり
異性……
須王　修宇。
私は大切だから
護れる力が欲しいと思ったの
だって私の方がお姉さんらしいから
まあ　見た目だけで思考は修ちゃんいや修宇の方が大人っぽいと思うことが多いんだけど……
修宇は私の恩人で大切な人だから
―回想―

周りは赫の世界

血

お腹すいたなー

でも見つかったら殺される

物騒な男達の怒声が止み、

近づいてきた足音

必死に身を潜めた過去の私

なにもかもが怖くて

恐くて

恐怖の対象だった。

「お前大丈夫か？腹減ってんの？」

そう声をかけて私を助けてくれたのが修宇だった。

見た目は私よりずっと幼くて

だけど誰よりも
格好よくみえた。
修宇はただの
錯覚だ
吊橋効果だっていうけど
そうはおもわない
これが私の最初で最後の恋だって
信じてるから
だから護れる力を求めて
死神になることを決めたんだ……
それは耳にしたふとした会話が始まりだった。

「そういや
知ってるか？
流魂街で虚による死亡事件が立てつづけに起こったらしいぜ。」

音が止んだ気がした
それは私の錯覚だったんだけど…
全ての雑音が
排除された……

うちのクラスは特進なだけに
半分以上　４分の３を占めるのは貴族出身だ。

流魂街出身は４分の１にも満たない。

私はただ一つの感情に突き動かされて

それを話した当の本人の胸ぐらをつかんでいた。

「どこでよ。どこか襲われたのっ！！」

躊躇いも遠慮もすべて勘ぐり捨てて

一部の流魂街出身者も不安そうな瞳をして成り行きを見守っている。

「苦・・し

北流魂街７９地区草鹿と８０地区更木だよ話っ…」

力が抜けた

強く握りしめたはずの手には感覚がなく、

強く握りしめた掌からは食い込んだ爪から流れる血が流れた。

「　　嘘だ　　」

周りの流魂街出身者にはそんな危険区域出身者はいない。

いて　最低４０地区だ。

例外の恋次は７９地区戌吊だけど。

誰も私に出身なんて知らない

だって　仲は良いけど

そこまで

私の中に入ってきてほしくなかった

更木では、裏切り、殺人、強盗、傷害の宝庫だ

そこでの癖のせいで完全に信用できなかった。

そんな私が嫌いだとも感じた。

声にならない声で

呟いた

修宇

「どうしたの、魅。」

安心した様子の桃ちゃんが言う。

私のことを知らないっていうのも知ってる

だけどすごく

理不尽だけど

なんで修宇がって

いらつきを隠さず

「私の出身が、更木なの。」

桃も、イヅルも、恋次も、

息をのんだ。

「魅ちゃん、たしか男の子を残してきたって言ってなかった?

私と同じで大切な家族を。」

家族

そんな言葉では言い表せない

修宇は私のすべてなんだから

無言で首を縦に振った。

「行こう、魅ちゃん。

大事な人なんでしょ」

もしいなかったら…

と思うと

とても怖い。

彼は私のすべてだから……

でも前には進めないから…

癖のように魅は太いおさげを結ぶ紐を指に絡ませた。

――――――――――――――

ときどき休みながらついたここ・更木。

ボロボロの家屋棟に、地面には所々に古い血の痕。

変わらない荒れ果てたこの地

懐かしい

人には汚い所でも、

修宇と出会った場所だから

そこからは少し離れた少し古い家屋。
その扉は壊れていた。

「あれ？
　扉が壊れてる」

その家の中に入ると、
　割れた食器に切り裂かれた布
明らかに襲われた跡だった。

そこによく見ると明らかに最近ついたような血痕があった。

凍りついた。

すごくすごく

その痕はぽつぽつと続いていた。

それは家の裏手の森のほうへ続いていた。

私はその痕を急いで追う。

一緒に来た桃ちゃんたちのことなんて忘れて

森に入る私。

吉良「ちょっ」

血痕を追うにつれ、その血の痕はどんどん大きくなっていく

「誰だ?」

少し警戒したような

聞き覚えのある声が、

世界に色が、音が、戻った気がした。

「修・・宇？」

私はその方向へと駆け出した。

そこにいたのは、

別れた時より成長した　最愛の人

16、7に見える青年が

腕から血を流して木の根元に座っていた。

「魅…か？」

「よかった…無事で」

修宇と違い、私は別れてから成長していないんだけどそれは置いといて。

修の腕の傷は、相当深かったけど、修宇が死神学校（霊術院）に行くって言い出した時はびっくりしたな～～～

私が入学した時はあんなにいかないって言ってたのに

「虚はどうしたの？修宇」

「あ、ああ　二人がかりで倒したんだよな」

「誰と？　更木に協力してくれる人なんていないし」

「いや、知らね。見る奴だった。

この地区のやつにしては、いい着物着てたし、向こう隣りの潤林安のやつじゃね？

銀髪のチビだったぜ」

走る私について来た桃ちゃんは

「ええ！！！

それ本当？」

修宇は吉良君に任せて、一区の潤林安に向かう桃ちゃんについていく

「桃ちゃんの出身だよね、そこ。
その子に心当たりでもあるの？
知ってるんだったらお礼とか言いたいんだけど…」
そして一軒の家屋についた。
その家の前には幼いという言葉が似合う
銀髪に翡翠眼の少年。
「しろちゃんっ！！！！」
彼に桃ちゃんが声をかけた。
「桃…か。学校はどうしたんだよ死神の」
「しろちゃん、入ったらいけないっていう
あの森に入ったでしょ」
「ああ、入ったよ、悪かったな」
生意気そうに返す少年。
まるで姉弟のようだった。
「もー危ないでしょ」

「ちょうどよかった
俺受けるから、死神学校」

でもちょっと私も桃ちゃんもへこんだのは

入学前1年以上かけた試験勉強を完璧にしてしまっている
幼馴染にだった。

side end

《side 須王 修宇》

（元々の口調は悪いです。 十三隊に入ってからは、荒事が面倒で敬語に近くなっています）

魅が霊術院に行ってから、4年が経った。

あいつがいなかった前に戻っただけなのに

あいつがいないだけでなんでこんなに不安に

寂しく感じるんだろう・・・・？

魅のやつが、最近俺がいないときに少し帰ってきたらしくて、

霊術院の教科書を読みだす。

（逆にいないことを確認してから、帰っている。

会うと決心が揺らぎそうだから。

帰らないという選択肢もあったが、教科書が使わないのがたまるためと気配だけでも感じたいので戻っている）

静かで、暇だから読むようになったので、もう覚えてしまった…

三って書いているから3回生分までかな。

そして、いつも思う。

あの優しい魅に、

こんな危険なことができるのか…？と

もう日が沈みかけている。

ウォーーー

なにかのうめき声のような声が響いてきた。

嫌な悪寒と違和感と共に現れ出たのは

異形の化け物。

「げっ

これが虚ってやつかよ。」

一見、海洋生物か何かなような

虚。

《ほぉー、昨日のやつらと違ってうまそうなやつだな。そこらのやつらとは大違いだ。》

虚は、触手のようなものを伸ばし、おれを捕らえようと襲ってきた。

それを必死によけるが、その時、いつもこの時間になると来る、あいつが、魅が可愛がっていた一匹の犬だった。

犬は懐くからって言ったのに……

そちらに向いた触手からその犬を守るため体を張って守る。

修宇の右腕に触手がからみつき、思いきっり締め付けられる。

ボキッ

何かが折れるような音が響いた。

とっさに、覚えている鬼道を使う。

「っつ、

くっそ

破道の四、白雷っ！！」

いくら、周りの家屋が少ないと言っても、被害が出る。

そう判断した俺は、自分の家を出、だれもいないはずの森へと誘う。

そして、森のある程度奥、ていうかこれ以上は違う地区に入るしな、に着た途端止まる。

《ほぉ、やっと諦めたか。

わしの血肉と「ならねぇよ。

破道の三十三　蒼火墜っ！！」

俺がそう唱え、打った時自分の打ったのとは違う方向に、鬼道を虚に向かって撃ってきた。

死神か…？

そう思い見た方向には、１０歳前後に見える少年の姿…

白銀の髪に翡翠色の瞳。

でも確かに感じる霊圧の濃さ…

隊長か副隊長かと思った・・・

「大丈夫か、お前」

「あぁ、それよりお前～～～～

打てるか？」

「あぁ」

俺達2人は、虚に向き直った。

《うまそうなやつがもう一人か？

どうした？諦めたのか？》

「諦めるわけないだろっ！！

破道の三十一　赤火砲

（しゃっかほう）っ！！」

俺が虚の気を引くうちに、少年は鬼道の詠唱をする。

彼の霊力なら、俺の詠唱破棄の数倍十数倍の威力になるだろう。

「“君臨者よ　血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ
真理と節制　罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ“
　破道の三十三　蒼火墜っ！！！」
予想どおりの威力だった。
正直二人でないときつかったかもしれない。
けっこうこいつ動きが多様で触手が数十はあったからね
こんなやつらと戦う死神・・
　魅はその死神になりたい・・
そう言っていた。
あいつは俺が好きというけれど
　俺があいつをどう思っているか
まだわからないでも
　守ってやりたいと思ったんだ。

.

$$\frac{1}{\text{endl}}$$

光と闇の狭間　序章　と第一話　変革の時（後書き）

この時点でのしろちゃんは、もう松本さんにあって（このときは1番隊です）

死神になると決めて、桃ちゃんが置いて行った教科書をすべて読破し、

暗記しています。

光と闇の狭間　第二話　決めた道　と第三話　護りたいもの

第二話　決めた道

今日は霊術院の受験の日だ。

内容は、学力、体力、霊力測定だ。

俺も、冬獅郎も（このころは名前呼びで仲も良好）受かる自信はある。

だが、この雰囲気の中にいると、温和な（どこがよ!!　By魅）俺でもキレそうだ。

「流魂街出身なんて受けるだけ無駄なのによー。」

たいした霊力もないたぶん下級貴族だろう。

ったくまわりのやつが気を悪くしているのに気付かないのかねぇ・・・

「それにあんなちっこい奴まで受けてるしな」

あっ冬獅郎の眉間にしわが寄った。
やばい。
「それは俺のことか。」
「さっさとおこちゃまは家に帰れば－？」
そう男らの一人が冷やかしてくる。
「てめぇ
「（ボスっ）」
誰だっ　て、桃　なんでここに？」
「名前じゃなくて名字で呼んでよ。それに、私と魅、学力測定の試験官の1人なの。」
こいつは基本この女のことを
桃もしくはお前と呼んでいた
でもこのときから女を名前で呼ぶのが恥ずかしくなったのか、死神になった後
も名字で定着してしまったのだが、
それは別の話。

「はっ？」

「席について、ほら修宇も」

すべての受験生は席に着いた。

「学力測定の試験官を担当する新五回生特進学級の神代　魅

こちらも同じくで」

「雛森桃です、

　不正行為等は認めませんので

即刻退場です

　では。配り終えましたね。

初め」

テストは、苦労していたようだが、俺や冬獅郎にとっては軽かった

体力も軽かったし（周りはぜーぜーほとんどいってたけど）

霊力では先生が目を丸くしてたっけ

今年の結果

主席

日番谷　冬獅郎

学力　満点

体力　特

霊力　三等霊威（隊長レベル）

次席

須王　修宇

学力　満点

体力　特

霊力　四等霊威（副隊長レベル）

―2　ｅｎｄ―

これは、俺こと須王　修宇が
一回生として初めて現世に行った時の話。

第三話　護りたいもの

「・・・・・・・はぁ…」

なぜおれがため息をついているかというと、入学してからずっと浴びる好奇の視線に疲れたからだ。

（だって成績優秀で、かっこいいから、

灰‐アッシュ‐色の光沢のある髪に、漆黒の黒曜石のような瞳

サラサラだが少しぼさっとした感じにはねた髪

おごらない性格、女子はもちろん男子には尊敬されている…

冬獅郎は…　表向きすっごい冷たく見えるし、近寄りがたい怜悧な感じだし。　Ｂｙユエ）

もともと自分本位で孤立していたためこういう種類の視線には慣れていない。

同様の視線＋恐れや侮蔑のような視線を受ける冬獅郎のほうは、無視を決め込んでいる。

ある意味すごいよな、うん

そういえば・・・今日現世へ行く日だったっけ？

（遊びじゃないんだから、そんな軽そうに言わないでーーーＢｙ魅）

俺は用意するものを持ち、集合場所へと行く。

まだ、引率者は来ていないらしい…。

ふう　良かった・・・

「修宇っ
遅刻よ。。」
あ　違ったのか
「魅・・お前が引率者なのかよ」
「そーよ、
今回は私と、桃ちゃん、恋次よ。」
恋次って、たしか前こいつと一緒に来てた赤髪の男だっけ？
詳しく言うと、3人1組というのを聞いて朝もめないようにと先生がした籤引きのことを思い出した。
たしか、俺と冬獅郎と同じだったはずで確か
もう一人って
いっけね
興味無くて覚えていないし
「あの

よろしくおねがいします、日番谷君。須王君」

気弱そうな現世の人間でいう・・14，5歳に見える少年・・・

紺色の髪に、漆黒の瞳

病的なまでな色白い肌に、華奢な体形の少年

「まぁ、落ち着けって

（オドオドされても困るし）」

「…あ…

あのっ　2人に聞きたいことがあるんです!!」

「なんだ?」

おっなんでさっきまで無言だった冬獅郎が答えるんだ。

「あの・・雛森先輩や神代先輩とはどういう関係なんですか?」

あいつと?

正直そう思ったが、答えた。

「「幼馴染」」

っていうかこいつの名前なんだっけ?

「おい、お前の名前はなんだ」

冬獅郎も同じことを思っていたらしい。

「えっえーっと、笑いませんか？」

「「あぁ」」

俺は保障できないけどな

嘘は方便っていう奴だよ、うん。

「煌（こう）　未姫（みき）。こんな名前だけど男です・」

・・女名だな。まじないか何かか…

そう思った

で、

「で、なんであいつとの関係を聞くんだ？」

俺が言う。

「知らないんですか？あの二人の実力・・・

雛森先輩は学院一の達人と言われていて、神代先輩は、もうすでに始解習得済み。

しかも、容姿はあのとおりいいから、今から他貴族から求婚され

てるらしいぜ。

この学院の先輩や後輩にも…

とくに魅先輩には多いらしいですよ。

今のところ2人とも、フリーらしいですが…」

あいつらがねぇ～

っって

「始解って、あいつがか？」

「えぇ、一回生の時にできるようになったらしいですよ、飛び級を断ったとか・・」

本気（マジ）かよ…

―　現世　―

「かったるい」

魂葬は簡単すぎる・・・

「きちんとしないと・・怒られますよ…」

煌は、言った。

びくびくしすぎだって

俺たちはそんなに怖いか

その傍らで、真面目に、冬獅郎は、一人を魂葬する。

「分かったって、煌それとも未

「その名前で呼ばないでくださいっ!!」

わかったわかった」

俺が煌をからかって遊んでいたそんな時

突然、魅が

「みんなぁ　下がって！！」

他の2人の先輩も、顔が険しくなっている。

この気配は、嫌な気配は、あの時の…

虚　の気配！！

虚が出現する数が多い。

「恋次は、一回生を、桃は私の援護を。

“全てをおおいつくせ！！闇王っ”」

魅の周りを…いや、刀の周りをさらに暗くし、刀身は真っ黒に染める。

魅は、刀を振る。

すると、そこは闇となり、そこから白い蛇のようなものが出てきて、虚を襲う。

そして、その後ろでは、雛森さんが鬼道を放つ。

「破道の三十一　赤火砲（しゃっかほう）っ」

2人とも、多少は傷つきながらも、虚を圧倒していく。

だが虚は数は減らない。むしろ、増えている。

現世では、もうすぐ朝のようで、日差しが出てくる。魅の力は弱まり、彼女の周りをおおう黒い霧のようなものが少しずつ薄くなっていく。

彼女の刀をおおう霊圧も少しずつ薄くなっていく。

「な・・どうしたんだ。」

動揺した俺の質問に、煌は答えた。

「そういえば聞いたことがあります。

魅さんの斬魄刀の“闇王”は、闇の中では絶大な力を発揮するけど、

光の中では極端に弱くなると」

な・・・・・

そう言っている間に日は昇っていく。

こんなときに、俺は何もできないのか・・・

守ると決めたのに・・・

『力を望むのか……？』

ふと、女性の声がした。だが不思議と驚かなかった。

あぁ…

『何のために…？』

魅を…俺が守ってやるために・・・

『彼女にそれが必要なくとも…？』

あぁ、俺は俺の信じる道を行く・・・

『なら、私の力を少しだけ与えよう…

私の名は…ー』

俺と、冬獅郎は、走り出した。

2人の持っていた浅打が、形を変える。

「霜天（そうてん）に坐せ、氷輪丸」

「つらぬけ、光神」

冬獅郎の方の刀は、刀自体は普通の刀よりも少し長い程度であるが、彼の体格と比べると長い。

青がかった翡翠色の柄に、手裏剣のような金色の鍔。

能力解放と共に柄尻に鎖で繋がれた龍の尾のような三日月形の刃物が付き、

溢れだす霊圧が触れたもの全てを凍らせる水と氷の竜を創り出す。

俺の方は、光に目がくらんで詳しい細部は分からないが、黒い柄に、普通の刀と同じような鍔で、刀身は白く光っている、全て魅と逆の色合いの刀。

輝く刀から延びる光は、刃となり

龍は、大きな水流に変わる。

光の刃にあたった虚は塵となり消え、

虚にあたった水は凍り始め、砕け散る。

守れた…　そう思った途端俺たちは倒れた。

≪ｓｉｄｅ　冬獅郎≫

雛森は、必死に戦っているのに、俺は何もできない。

戦っている神代のサポートを鬼道でできないかと思ったけれど、

神代の斬魄刀の能力は、多様で動きが早く今のまだ実際に戦闘経験が少ない自分がやるのは

一歩間違えば味方にあたってしまう

力がほしい

力が

『なぜだ…？　小僧』

知らない男の声が響く。

いや、この声はすっと流魂街にいたころから毎夜のように効いていたあの龍の声だ。

守るためだ、大切な人を…

『大切な人というのは、あの娘のことか？』

あぁ、今は一番アイツを守りたい。

妹や姉のような存在であるアイツを…

『分かった、いまひとたび小僧に力を貸してやろう

我の名を呼べ

我が名は　　―』

「霜天に坐せ、氷輪丸!!」

まだ俺はいずれ出逢う人のことなんか考えていなかった。

これから先に出会う俺の一番を

―2　ｅｎｄ―

光と闇の狭間　第二話　決めた道　と第三話　護りたいもの（後書き）

ちなみにこの後二人は倒れてしまいます

そして、氷雪系最強の意地なのか再び冬獅郎の方は始解ができなくなります。

それは心のどこかで祖母を殺しかけたこの力を憎んでいるからで、

それが彼の中からの声を拒絶してしまっているのです。

決して須王の方が実力が上というわけではありません

最終話より先にもう一つ番外中篇を更新していきます

風の結んだ絆　炎の笑顔　　いろいろこれの説明　　（前書き）

登場人物

雛桜　留依
美月や卯月の従妹にあたり、
明良のはとこに当たる

敬語をよくつかい、おしとやか。
おかっぱ頭が印象的。

いちおう声優で”朱炎”の名をつかう。

髪の色：黒
瞳の色：赤だが薄い。濃いピンク
誕生日：１９９４．６．１２
身長：１５０
血液型：Ａ
霊気の色：赤紫

紳炎は使えない

原作段階で中一　夏梨たちの一つ上

如月　風
サブ主人公３　如月　海依の異母兄弟にあたる。
如月家次期当主
本人は姉を大変したっていたが…
周りはそれを良しとしなかった

主に女モデルとして”宵”という名で活躍している
また姉同様声優もやっている。
髪の色：黒
瞳の色：水色
誕生日：１９９２．１２．１０
身長：１５５
未来は１７０
霊気の色：水色
血液型：Ａ
一人称：僕

風術師で如月の次期当主

原作段階で中三

佐野　明良

髪の色：赤茶
瞳の色：明るい茶色いや、桃色
薄いオレンジにも見える便宜上桃色で
身長：１５３？
誕生日：８／２３
血液型：ＡＢ
霊気の色：薄い赤　桃色
一人称：俺

雛桜家の分家・佐野家の次男
美月、卯月、留依のはとこに当たる。

元美月の婚約者

美月を尊敬していて、初恋は留依だったりする

毒舌マシンガントークの持ち主で、
顔立ちはそこらの女の子より愛らしい
初対面は十中八九女に間違える・・・

生前はサッカー部キャプテンであり、Ｕ－１４に所属していた海依、
皐月、由宇、風と同じく
聖クロス学園に通っていて頭もいいのでＳＡだった

サッカーのポジションはＦＷ

これはネタバレだが
この世界のホイッスルの椎名翼である

風の結んだ絆　炎の笑顔　　いろいろこれの説明

死

それは　痛みであり苦しみでもあり

そして　別れでもある

そしてあまりにも突然訪れ、その心を思いをすべて刈り取る

その人に向ける思いも、情も全て

情け容赦なく切り裂いてしまう

死と向き合わなければならない僕たちはあまりも無知すぎたんだ・・・・・

目次

プロローグ　苦しみ
1，風の若子と銀風の姫
2，朱雀の愛し子の死と炎の桜の後継者
3，ｆｉｒｓｔ　ｃｏｎｔａｃｔ
ー風・１２歳小学六年、留依・１０歳小学四年生ー
4，一年前に起こった事件（こと）
5，闇の鼓動
6，毒されていく風
7，夢の中の悪夢、闇の終わり　注意！微エロ表現があります、できるだけあっさりにしてるはず

８，　戻りし現実
９，　大切な“者”の死を乗り越えて
１０，　はちゃめちゃな文化祭
エピローグ　幸せは続くよどこまでも
もうオリジナルです
原作キャラは出てきません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1849z/

死神達の恋歌　～月の導き～

2012年1月15日02時49分発行